

川柳塔



No. 808

同人特集・月 百句

九月号

平成六年度 同人総会と

二賞表彰 本社十月旬会

とき 10月2日(日) 午前9時半開場

ところ 大阪市立阿倍野市民学習センター

交通便 地下鉄谷町線「阿倍野」駅7番出口すぐ

あべのベルタ3階

電話(06) 634-7951

同人総会 午前10時〜正午

〔議事〕 ①会計報告②会計監査報告③事業経過報告

④役員改選⑤その他

◎総会欠席の方はご意見を文書でご提出ください。

本社旬会 午後2時から開催

告

謹

第3種郵便物料金が1月と3月の2段階で
値上げされ、従来の51円が84円となっていま
す。このため9月から定価6000円は当分、
据置のまま送料共の誌代を半年分4000円
1年分7900円に改定させて頂きます。

平成6年度 NHK学園 全国川柳大会

開催日
会場
主催
後援
協賛

平成六年十一月十三日(日) 午後一時より
工学院大学 高層塔3階ホール(東京・新宿)
NHK学園
文化庁、NHK、全日本川柳協会
キリンビール株式会社
工学院大学
柳生涯学習研究社

投句要領

●宿題五題(事前投句) 各題二句

①「順」②「青」③「表」④「法」⑤「習」

●席題二題(当日投句) 各題二句

投句料二、〇〇〇円(入選作品集代を含む)
投句用紙などは係へお問い合わせください。

選者

竹本瓢太郎(川柳きやり吟社)

斎藤 大雄(札幌川柳社)

森中恵美子(番傘川柳本社)

橋高 薫風(川柳塔社)

渡邊 蓮夫(川柳研究社)

坂本 一胡(NHK学園川柳友の会会長)

仲川たけし(全日本川柳協会会長)

入選作品鑑賞 大木俊秀(NHK学園)

特別講演 「川柳さまさま」

柳都川柳社 大野 風柳

ショートスピーチ 「先生、川柳ができなくなりました」

△五人の宿題選者の話△

賞

大会大賞・NHK会長賞

全日本川柳協会会長賞

各題ごとに特選、秀作

投句締切
宛先

平成六年十月十日(月) 当日消印有効

〒01 東京都国立市富士見台二二三六

186 「NHK学園全国川柳大会」係
大会参加をご希望の方は往復はがきで申し込んでくだ
さい。

乞御期待

西尾 葉

この秋、読書の秋に相応しい、立派な句集が刊行される。

その名は『甲吉川柳』という名の句集である。初め、工藤甲吉氏が句集を出すということを知ったので題名を訊くと、「甲吉川柳」だと言う。正に之しかない、我が意を得た題名に思わず快哉を叫んだ。

『甲吉川柳』実に当を得た題名である。甲吉氏の句は誰もが真似の出来ない、ユニークな彼独特の風格とユーモアと広い視野で詠まれた、珠玉の佳・名句だからである。

「路郎川柳」「水府川柳」「三太郎川柳」等と、一家をなした方々の独自の句風を讀んで、何者も追隨を許さぬ時に使う言葉であるからである。

もう一度言う。甲吉川柳こそ、独創的で、その一句一句の氣骨が、風格が、たくまざるユーモアが、何よりも嬉しくて心強い。

甲吉さんに会われた方は、まず彼の柔和な風貌と大人振りに魅せられる。そして彼のユーモアは、冗談や洒落や茶化したりした、ユーモアではない。彼のユーモアは、彼の心の余裕から出た何とも言えぬ人間としての充足感から出た笑いであり、微笑である。私は彼の少年期、青年期は知らない。が初め、小林不浪人に師事して『みちのく』に拠り、その後、関西の柳誌へ投句したが、麻生路郎を知

るに及んで、路郎の主宰する『川柳雑誌』に拠り、生涯路郎を師と仰いで、変節されなかった。悟りと節操とユーモアは、甲吉川柳の華である。

折あそば玉子こわれてやるつもり
蟹の泡不平は僕にだってある
ここにもぶらぶら年金渡世人
松茸は贈取贈になる値段

トラバガニ君とは握手出来んワイ
すずらんや純情無垢も亦さみし
先年故郷、津軽の尾上町の尾上公園の
どまん中に

人生はよいしょこらしよにとっこい
しよ

という句碑を建立された。
いずれ発刊されたら、句集紹介で委しく紹介されるが、甲吉川柳発刊の嬉しさに、前宣伝をしておく。

座右の句

手と足をもいだ丸太にして返し

(鶴 彬)

私の句

制服を脱ぐ朝 妻よありがとう

森 松 まつお

川 柳 塔 九 月 号 目 次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 乞御期待

涼み台お喋り

西 尾 栗 …… (1)

川柳塔 (同人吟)

西田柳宏子 …… (2)

自選集

西 尾 栗選 …… (4)

川柳の群像 伊東静夢

東 野 大 八 …… (44)

■古川柳 柳籠裏二篇研究 (二十三丁)

水煙抄

黒川紫香選 …… (50)

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

宮 口 笛 生 …… (48)

路郎賞・川柳塔賞中間発表

片岡智恵子 …… (71)

大空のころ (45)

橘 高 薫 風 …… (75)

■同人特集「月百句」

(76)

涼み台お喋り

西 田 柳宏子

これを読まれる頃は、残暑も和らいだ頃と思いますが、私は猛暑の日日照り続きの中で、扇風機の唸りを聞きながら書いています。

◎それにしても、今年是不順な天候であつた。短い梅雨、と言つても雨らしい雨に逢つたのは一、二度。地域的には雷鳴とともに激しく降つた雨もアツという間に上がつて…。

お陰で各地では水不足で、時間給水も実施されている。はなはだしいのは、早明浦ダムが干上がりて水没した旧校舎などが姿を見せたという。恵みの雨を期待した七号台風も、迷走のはては山口県北で熱低となつて、かえつて余計に暑いこと。

◎世界的なニュースも、話題が多かつた。日本女性初の宇宙飛行士、向井千秋さんが乗つたスペースシャトル「コロンビア」が七月八日に打上げ成功、地球二三六周・飛行九八九万キロ・宇宙滞在十四日十七時間五十五分の記録。毎日のように千秋さん語録が放映され、八十余の実験でゆつくり地球を見る暇がなかつたとか。七月二十三日に無事帰還。ほんとうにお疲れさまでした。

銀河系……………河内天笑選……………(80)
茴香の花……………八木千代選……………(84)

「野」……………木村富美子選……………(88)
一路集「入門」……………伊藤寿美選……………(88)

「跳ねる」……………吉岡美房選……………(89)
初歩教室「理解」……………吉岡美房……………(90)

各地柳壇(佳句地十選/小倉アサ)……………(92)

■川柳こぼれ話「川柳と音韻」……………田中正坊……………(79)

■ひみこさろん「川柳へのおもい」……………白根ふみ・秋元てる……………(86)

■句集紹介 石倉芙佐子句集「花 筏」……………金村青湖……………(87)

八月本社句会……………(104)

柳界展望……………(108)

九月各地句会案内……………(109)

■編集後記……………(110)

座右の句

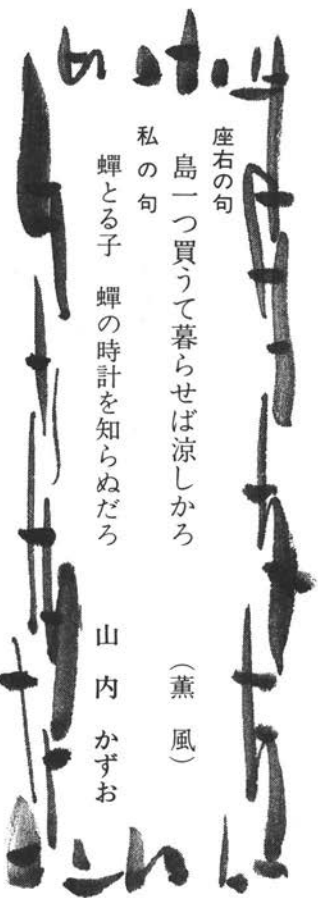
島一つ買うて暮らせば涼しから

私の句

蟬とる子 蟬の時計を知らぬだろ

(薫風)

山内 かずお



◎宇宙の話題がもう一つ。シューメーカー・レービー第九すい星の破裂した二十個の破片が次々と木星に衝突するというニュース。天体に興味のある人たちには、こたえられないシヨ―だったようだ。

◎さらに世界を驚かせたのは、朝鮮民主主義人民共和国の金日成主席が突然、死去したことが七月九日、発表されたことだろう。発表が一日おくれ、葬儀も十七日の予定が十九日に延期されたり、後継者と目される金正日の就任もののびのびになっている。姜首相の娘婿の亡命はじめ、核爆弾をすでに五個保有しているとか、いないとか…。何となく不安な隣国情報が続く。

◎明るい話題に戻せば、オールスターは仲よくセ・パ各一勝で終ったが、若手の期待どおりの活躍で暑苦しさも忘れてテレビにかじりついていた人も多かったはずである。

◎続いて建都千二百年を唱える今年の京都は、祇園祭も熱が入り、人出は三十万とも六十万人とも言われて盛況裡に終れば、大阪も負けじと浪華の天神祭、船渡御で川を埋める船・船・船。大阪の祭も七月三十一日から八月一日にかけての住吉さんで幕を閉じる。

さて、私もそろそろ涼み台を片付けさせてもらいます。今は懐かしい西条凡児の科白で「こんな話がおますネン」「ホナラ今日はこれまで…」で終ります。



西尾 葉選

大阪市 西出楓 楽

カードが怖いそんなことではなんとする
言論の自由通らぬ嫁姑

ライバルのジョークばかりが受けている

花言葉知ってるふりをしておこう

貧乏だからケチだとは限らない

実印を隠した場所で小半日

弘前市 佐治 千加子

着ぶくれた遠野の里のオシラサマ

曲り家で民話を語るお蚕さん

桑食うて昔話の繭ごもり

民宿で座敷ワラシになっている

正気 狂気 つぎはぎ今日も生きている

満月にのけぞっている白兎

松原市 小池 しげお

わらび餅 午後の話が素晴らしい

酒に合う唄なら一つ知っている

痛い歯に当らぬように噛んでいる

頼むのは中元すぎた頃にする

老妻と毎日同じ話する

蟬取りの上手な兄を自慢する

今治市 矢野 佳雲

宝石箱で居心地わるいガラス玉

裏表の世に王将に裏がない

これしきのことを伏せ字に昔され

そのシーン昔見ました昼の月

騙されておこう騙すと眠れない

友達になりたいお金持ちがいる

豊中市 田中正 坊

カンナ炎えまためぐりくる敗戦忌

夾竹桃 みなみの島にねむる兄

商人の子に軍服は似合わない

れくいえむ四人の兄よ 弟よ

父の留守きまってかかる子の電話

太平洋へだてていても父子だぞ

倉敷市

小野 克枝

流刑の身さらすメダカの遊ぶ川

旗日忘れず玄関に立つ男

蹴つまずくたびに積木は高くなる

ときどきは居眠りごっこして夫婦

家計簿の責めに負けない主婦のペン

一徹を通す頑固に慣らされる

奈良県

田 中 紀美代

寂しいと言えばいいのに馬鹿笑ひ

満点の嘘へ満点の返事する

ご近所の噂も絶えて猛暑なり

生きのいい女ばかりで夏の席

本数が減ってきましたうしろ指

いちじくの汁したたれり母の掌に

竹原市

小 島 蘭 幸

サミットで倒れた総理好きになる

今の私のために揚がつている花火

僕が干した洗濯物が乾かない

お寺さんと飲んで話が合うてくる

クーラーはパパが帰ってから回す

松原市

玉 置 重 人

清らかなままでよかった久しぶり

特急が臨時に停まる競馬の日

陸橋が揺れてる街の風に慣れ

神さまへご無沙汰うまくいってます

妻の留守やれ集金だセールスだ

高槻市

川 島 諷云児

出かかった嘘良心が引き止める

劣性遺伝 父そっくりのお人よし

神の教えに背いてみたくなる野心

弁解の喉は乾いてばかりいる

アルツハイマーだけはなりたくない余生

鳥取県

新 家 完 司

密航者の気持で涙に立ってみる

スイカ切る役を恭しく受ける

髪だけが自慢の人の髪ほめる

女さえ居れば元氣な男たち

ひらがなで書けばやさしくなる「こころ」

松江市

舟 木 与根一

じゃが芋の花は本音と別に咲く

專業が主婦でビタミンABC

食欲わく高層ビルのレストラン

雨読など贅沢ですよ水不足

老妻の残りで効いた風邪ぐすり

松江市

柳 楽 鶴 丸

七夕や留守電にして西瓜切る

ジーンズもスーツも同じ影法師

ジューンブライド不幸なひともある

運が悪かったら今年は五十回忌

アンバランスの美の魅力にとりつかれ

下関市 石川 侃流洞

五十回忌 戦死の兄はまだ学徒

住職も学徒 御斎の酒はずむ

地下道に熱帯夜はなしホームレス

釈然とせぬ政治家の顧問料

議事堂に金の成る木があつた夢

伊丹市 樫谷 寿馬

簾越し何を企む妻と娘と

七十年の旧友へ思い切り手を広げ

切れそで切れぬ絆を持つ夫婦

突如妻 大正琴を習い出す

鮮やかに届く勝つた日のスポーツ紙

東大阪市 森下 愛論

病床へ嘘も交えた見舞客

三面鏡別に動いている心

反省を素直に認め飲み直し

酒の席みんな好意のもてる顔

ボクちゃんと呼ばれた頃があつたつけ

西宮市 奥田 みつ子

拗ねているその顔 自分には見えず

山里の人みなやさし星が降る

藤の花つたう雫よ亡母を恋う

敬って貶して今もまだ夫婦

極上の和紙便箋で出す便り

高知県 赤川 菊野

その先は言わない事にして別れ

ひとりでも私の舞台だいどころ

も一人の私はとても泣き虫で

飲まされた煮湯が今日の金字塔

中流の意識でカード持ち歩き

堺市 楊井 二南

自問自答してから本音吐くつもり

力説を烏合の衆に無視される

遠回りすれば無難な車椅子

タイ米の蔑視施す術も無い

金星の汗止め処無いインタビュ―

堺市 高橋 千万子

完ぺきなアリバイ消した仲間割れ

一匹で主役演じる皿の鮎

雨つづく猫は素足を思案する

ゴキブリも慌てスリッパの手も慌て

真夜中にハハンあすこで忘れたな

名古屋 越村 枯梢

背骨が痛む 少し川柳重すぎた

誘惑に負けない日もある根無し草

一度は泣いたこともあつたらう 父よ

夏帽子一掬の水所望する

ひよっとこの仮面を脱いで旅終る

笠岡市 松本忠三

父の日の祝いデパートだけのもの
同窓会 遠方からが義理堅い
うちの子に限って苛めの仲でない
男尊女卑うつかり口に出来ません
七転び八起き転びが少し多すぎる

羽曳野市 榎本吐来

塞翁が馬 自社連合のメロドラマ
マスコミが嵩にかかってくる落ち目
浪人にもある休日という安堵

たらの話はもう言い飽きた聞き飽きた

息子三人 無いものねだりの夫婦箸

藤井寺市 吉岡美房

空梅雨があけたと役所義理がたい
水着着る妻の度胸を讃えよう
抵抗を知ってロボット故障する
飲み込んだ言葉が溜る不発弾
俺だけが残る怖さの慰霊祭

米子市 林荒介

郵便ポストがある僕だけの岬
森を抜け小さな影と連れになる
遠ざかる記憶の中の土の橋
山脈に湧き立つ雲の峰がある
軽口を叩いて列を離れない

米子市 林瑞枝

山の分岐で牛追い唄を聞く
赤い風船 道連れにしたはぐれ雲
薬膳の程良い味が身に沁みる
理不尽なことに迷うてばかり居る
頑なに箸はむかしを語り出す

寝屋川市 江口度

駅前の開発 蟬の子の受難
電柱の短い影でバスを待つ
すばらしい大工と思うかんなくず
若かりし妻の姿で娘が嫁ぐ
宇宙実験しても難民救えない

島根県 西村早苗

そして秋 記憶うすれた文燃やす
彼岸花おいと呼ぶ亡妻の絵と対す
山頭火の夢 霞の音がする
てのひらで迷う安定剤一つ
北の旅 出合いを一つ期待など

甘日市 林野甦光

予定には電車の遅れ入れてない
恋もした赤い水着が干してある
姉さんに買い物籠は預けとく
逢って来て金木犀の香に咽ぶ
濡れ衣を一枚落とす洗濯機

今治市 越智 一水

死んだのにいつまで母の部屋と呼ぶ

仏の灯 絶やさずこころ整える

川悠々 人悠々になれと言う

この俺を妻アクセサリーにして歩き

冗談が言えない妻でもものたりず

奈良市 天正 千梢

理解したくて目線覗き込み

五十万円の金魚買ったと言う便り

とべそうでとべない古希の水たまり

道端で生きて来ました七十年

はんばな涙なんかではないんだよ

松山市 白石 春嶺

冗談はさておき実は金の事

易の灯も時節を待てと言う落ち目

熟年が一時停車をするドック

襟足の色香も失せた寡婦の汗

縁のない投資が攻めてくる電話

美禰市 安平次 弘道

散歩道 犬には犬のテリトリ―

影武者の影も演技にくたびれる

七人の敵も定年丸くなり

写経して心の傷が消えますか

そして秋 日焼けも恋も褪めかかり

豊中市 安藤 寿美子

市役所へ行くと仏頂面になる

銀行のトイレの場所を知っている

チャンスにはきつと三振する私

血圧も食べ物も同じ老夫婦

老夫婦 老婦が先にあくびする

柳井市 弘津 柳慶

年金から葬式代は貯金した

教育勅語今でも暗記しているよ

左から一八〇度変転し

指のきず気がつかぬほど酔いつぶれ

強引なくどきに私負けました

富山市 舟渡 杏花

花の夜のつまりずき 余生に來て疼く

雌伏十年 望郷は妻だけでなし

淋しくてああ電話魔で朽ち果てる

ルス電にして天ぷらを揚げてます

白を白と言いい切れたのも十年目

島根県 堀江 正朗

甘えず他人は僕に言うけれど

欲のない歩幅の中に抱いた欲

気力負けするな朝茶に励まされ

いただいた齢で頑張る暑い夏

負けて勝て妻は言うけど 言うけれど

島根県 堀江芳子

戦盲の御飯ぼろぼろ話し好き

見えた日を戻す花火の音に酌ぐ

血圧の上がらぬように聞き流す

なにか言うように窓辺にくるトンボ

正朗さん誘う盆踊りの太鼓

今治市 野村京子

喪のうなじ女ざかりで美しゅう

月見草の愛へ真直ぐ月のぼる

遠花火さざ波ほどに揺れる恋

夕顔の白へ甘えていいですか

里はもう他人 割箸のつた膳

島根県 小砂白汀

なぐられるボールに蹴られるボール人生譜

ハードルをあつさり越してから独り

焦点が合わぬ右の目左の眼

ペンギンの歩く姿に似てきたぞ

クーラーにうちわの風をブラスする

静岡市 安本晃授

擬音聞く八月の空血が騒ぐ

向日葵の八十路を刻む花時計

八起きめで初めて出合う丸い月

幸せの形か妻の束ね髪

安らぎの吊橋渡る父母の郷

大阪市 河井庸佑

能書きの通り運ぶと甘い読み

言うべきか黙るべきかを聞き分ける

ここまでで口を閉ざせば嫌われず

あのときの引込み思案悔いる今日

板ばさみ今日も辞表は入れてある

尼崎市 春城 武庫坊

鉾立てて京に猛暑の週開く

祇園嘶子のせた電話で招かれる

鼻柱 風に逆らい固くなる

飯盒に被弾から生き五十年

炎天に影は小さくついて来る

尼崎市 春城 年代

新婚の孫 案内する嵯峨あたりに

婿殿の素直さ祇園まつりなど

思考力零の暑さに人恋わず

合わせ鏡が嫌なわたしを見せつける

訣れの子感あつてひとりの朝が出る

奈良市 宮口笛生

九割が海へ流れる別府の湯(別府・阿蘇の旅)

梅雨あいて地獄めぐりを暑くする

湯けむりとカメラへ並ぶ海地獄

草千里 千里緑に包み込む

登れない阿蘇噴煙に包まれる

横浜市 菱田満秋

炎天へ地蔵悟った顔で立つ

照りつける陽より水着がまぶしすぎ

コシヒカリとて火加減や水加減

貸した金戻れば買いたい物があり

ドッコイショ言わなくなつてアイタタタ

高知市 北川竹萌

甘藷苗抱えて降らず梅雨上がる

雨を待つ巷を他所に梅雨上がる

只貰う訳にもいかず高くつき

追従車追い抜き狙うバックミラー

雑草が油断を笑う自家菜園

倉敷市 田辺灸六

人生のドラマ ヒントのないクイズ

結ばれて泣いて笑った金婚譜

励ましてくれる野菊よ汗の道

おつきあい上手な妻の匙加減

嫁に来て仏の花を絶やさない

宇部市 平田実男

染めてやる妻の白髪へふと思つ

お役所へ公僕と言う顔が減り

一言で積木崩れて行く怖さ

グリーン車のこどもあそこもフルムーン

檜山で息子の自慢 娘の自慢

砂川市 大橋政良

森林浴に連れ出してきた車椅子

欠点を逆手にひらき直られる

乾杯のグラス許せぬ顔が浮き

エレベーター動きいくさのビルとなる

伝書鳩 下手な世渡りばかりする

弘前市 蒔苗果林

早晩の目覚め数えるはとぼっば

夏本番いのち朝から燃えてます

おにぎりにそれぞれの指一人前

もらい風呂帰りの月の美しさ

褒め言葉一言 深夜来る電話

弘前市 岡本花匠

普陀落を感謝で巡るバス行脚

煩惱も弥陀の砂利浜掻き消して

信心も老いの坂道きつくなる

アップルロード気さくに交わす津軽弁

納経帳 一印ごとの善を積む

弘前市 小寺花峯

濁り水やがては白く透き通る

逆らったふりしていても鳩時計

今日の酒だつて立派な理由がある

街角で遭った青春は松葉杖

冷戦が続いて時効の日は遠く

想い出が妊つてゆく散歩道

弘前市 村田善保

先頭に立てば棘ある風に遭う

音の無い世界で語る手話の愛

一本の糸で思索の蜘蛛である

献血の滴に祈る生命の灯

弘前市 高瀬霜石

一病を背負いこころの眼を貰う

ぼそぼそと注ぎあっている父子酒

子が巢立ち妻が小犬を連れてくる

キリギリスにだって眠れぬ夜がある

香典を出す側に居る小さい幸

弘前市 浅田隆樹

夏なんだ雑草の葉がいばつて

一匹の蚊を退治した午前二時

草むしり口あけて見るジェット雲

子供らがうきうきしててスイカあり

現状を知らぬ上司がよくしゃべり

弘前市 一戸ツネ

没法子 若さと老いのすれ違い

仕方ないよ貴方がくれた愛だもの

没法子 木偶に吹く風 娑婆の風

息を抜く屋台の湯気と国訛り

女の性 ことば尻とる自己嫌悪

人は山に登ると叫びたくなる

碁会所で勝つて頭を下げている

浴びるほど飲んで晴れぬ未練酒

本当の事を言わない旅鴉

山裾で飾らぬ色に咲いている

黒石市 相馬一花

真ん中で割らぬと種子の無いリンゴ

助手席に妻が居るから手が振れぬ

花よりも団子と鉢にハープ植え

クレジットカードは効かぬ結納金

券買わぬ時は予想が的中し

五所川原市 斉藤 効

ねぶた笛みんな上手になつて夏

牛乳を飲んで牛舎の子を想う

どんな村こんな村だという誇り

正面で見えては見られて胸リボン

練習に出来ず本番にも出来ず

五所川原市 對馬 一閃

包みこむ度量わたしを虜にし

胸の中そつとあかした花言葉

吉日の肩にやさしいこぬか雨

向いより少し高目の堀にする

いい汗をほめる麦茶が冷えている

十和田市 阿部 進

侍がバイクで走る映画村

交通事故ゼロは国道ないおかげ

飽食に生まれ育った味音痴

ライバルが居るから闘志湧いてくる

一瞬のためらい倅を取り逃がし

八戸市 島田 昭治

それなのに虫も殺さぬ顔してる

どうしても火葬は熱いと駄々をこね

とことんのおしゃべり妻は満足げ

心まで貧しくならぬとネジを巻く

斎場棺を持たなきや物足りず

大和高田市 岸 本 豊平次

三差路で選んだ自信歩くのみ

揚羽蝶狭庭の花にも来てくれる

仕合わせは漬物上手の茄子の色

病院の待合でそっくりの話聞き

検診は異常ないのにアアしんど

西宮市 門 谷 たず子

糸電話 娘がひとりいてくれる

生きるとは愛と憎との傘たたむ

小さな城をふたりで守る花の種

死ぬまでをおんなの種火守りぬく

残照にゆるゆると漕ぐ夫婦舟

姫路市 人見 翠 記

嫁さんが三十年目に娘になった

ドナルド・キーン氏に日本文学教えられ

忍草涼しき誘う客の顔

朝毎の露草の青にハッパかけられる

振花 玉簾の中に二三本

箕面市 坪田 紅葉

音に酔い引き込まれてるシンフォニー

すぐ忘れ探しものに日がくれる

孫だとしてお金がからめばむつかしい

イベントで四月始めの蜜狩り

お料理の味をほめ合う嫁姑

大阪市 大塚 節子

宝塚 八十周年 花の夢

コンチキチンの音も馳走の床料理

溪流を塩で描いた鮎料理

新婚の料理一巡してカレー

病院のメニュー旬にはかわらず

高石市 浅野 房子

惚れたのはあなたではない影法師

素晴らしい出逢い別れはさりげなく

語りべの神話へ集う宿浴衣

充分に分かっているが愚痴も出る

気儘者のきままが通らない悲劇

宝塚市 丸山 よし津

新風を入れる老舗の三代目

中流に手頃ファミリーレストラン

この椅子に座って解けた社の秘密

多数派に入り居眠りしています

五年満期生きられたからまた五年

和歌山市 牛尾 緑 良

ハトが出るはずの帽子を大切に

押しピンに昔むかしが耐えている

戦後史が閉じこめてある糖衣錠

ハブラシが帰る息子を待っている

少女期を抜けようとする影法師

和歌山市 堀 端 三 男

世代交替 子供の旗に従いてゆく

例外を作ることから和が崩れ

友の訃を死亡叙勲で知らされる

ブランドのTシャツ古都を闊歩する

ちゃんぽらんのようで約束よく守る

和歌山市 福 本 英 子

茶粥炊いて冷まして夏を遣りすこす

仏さまごめん暑さに負ける花

五〇円拾うタイ米買う足しに

老いらくの恋へ小雨が味方する

お隣も向いも三階建てる音

和歌山市 木 本 朱 夏

思想は痩せ街には米が捨てられる

立ち枯れている向日葵は亡父だろう

鬼も蛇も帰っておいで淋しいよ

レモン哀歌 智恵子に空が消えてゆく

帰心矢の如しおともつばくろも

和歌山市 桜 井 千 秀

背負われて浅瀬を渡る夢が消え(最愛の息子 廿五歳没)

おふくろと呼ばれ振り向く闇の中

色褪せた日記は母の宝物

カンカン照り若き仏に水供養

逆縁の花は枯らさじ十九年

和歌山市 細 川 稚 代

譲歩した手元あかりが見えてきた

それなりの理由があります遠花火

パリパリにのりをきかせて熱帯夜

ぬけぬけと女答える年を持つ

株太る日照りがつづく青田風

和歌山市 福 井 桂 香

たゆとうて七月の雨懐胎す

引き潮に晒すおろかな罪いくつ

あちこちに擬似針がある広い海

どきどきどきウインブルドン観る深夜

声色を変えてもにおい君のもの

和歌山市 垂井千寿子

子育ての答え真摯に受け止める
新生児室この感激は母のもの

和歌山弁でゆつくり暑さやり過ごす

胸中の一線だけは流されぬ

遺品の中に子供が二人ありました

海南市 三宅保州

輪の中に入ると同じ顔になる

自費出版したいと妻に言い出せぬ

キャリアウーマン外反拇趾が治らない

欺される方も悪いと言う詐欺師

一步退くだけでも視野が広くなる

和歌山市 池永正雄

見る方が勝手に焦るかたつむり

浮世には海より多い波がある

自衛艦やはり艦尾に軍艦旗

呼び捨ての出来る会には顔を出す

謝って手古摺った児が親思い

有田市 松井かなめ

夫には内緒のしるし妻黙秘

お地蔵はん呆れるほどの願い事

黄昏に夫の退化悩むこと

九割が中流自認 平和かな

隣の人 思い出忘れた呆け老人

和歌山市 宮口克子

むらさきを楚々と咲かして寡婦の庭
お隣の深夜に流す水の音

一滴のムード深める香水よ

ルンルのふたり車に鍵忘れ

胸に顔うずめて泣いた遠い日よ

和歌山市 玉井豊太

暑いなア妻は髪型かえてくる

強いて言えば妻はわたしの何だろう

相談は恐らく妻の差し金だ

小包は銀行さんの送り主

物事の起りはわたし邪魔になり

和歌山市 堀畑靖子

出会った頃のまんま愛してくれる人

炎天下さえぎるもののない慕情

淋しさは母にはかせる紙オムツ

溺愛の猫に家出をされました

探偵もとききたいな友を持っている

岸和田市 福浦勝晴

字だけ見ると旨そうな鰻料理

図々しくも師匠の後をつけて行き

棺桶も墓地も値上がる高物価

癌じゃないけどやっぱり何かちと不安

大作家気取りで酒汲む昼の月

岸和田市 芳 地 狸 村

電卓に慣れて暗算ばけてくる
パチンコがたのしい明日を忘れさせ
折り鶴を手伝う母の手が温い
お願いの文字がたのしい星祭り
筋書のがさがドラマを生かして

岸和田市 島 崎 富志子

ほんとうの自分でありたい余命表
嘘から出た真信じられますか
前向きに歩けば後ろから刺客
こだわりがあつて古川柳読んで見る
玄関の造花猛暑に耐えている

岸和田市 原 さよ子

同窓会背なの丸みを笑い合い
一匹の蝶へ親子の網がより
今もなお小走りの癖抜けきれず
コンサートの余韻を消した満員車
人の和へだまつて笑顔見せておく

岸和田市 古 野 ひで

青天へ満艦飾と言う団地
声だけは昔のままの君でした
胸の奥すがりたいたい秘めてある
若い血よ美しく咲け甲子園
老い深し猛暑気になる友がいる

岸和田市 高須賀 金 太

民族の差別憂える猛暑来る
オーディオのポリウム一杯妻の留守
咲きたくて咲いてる訳じゃない造花
哀しくてふっと笑いが込み上げる
守備範囲ひろげて痛い目に遭うた

八尾市 宮 西 弥 生

遠いひと近いひと寄る夏祭
順番を争う年にはなりたくない
ライフスタイル変えても逃げきれない暑さ
子も孫もない裸の城天国
芋タコ南瓜 女は強く生きられる

八尾市 宮 崎 シマ子

サラバですおたまじゃくしの尻尾です
サラバです清い乙女のみまでした
私をホロする道連れ影法師
と言うてなあ答は言えぬ隠居の身
金魚のあぶく楽しいラブソング

八尾市 山 下 美津留

理性もつ態度で明日を切り開く
若者の情熱 銃に打ち抜かれ
年金でよう生きてるとひやかされ
階段の汗にはほえむしゃか如來
真実な愛に答えるイルカショー

八尾市 吉村 一風

時どきはいのち洗いに着流して
乗り出した膝を年齢止めてくれ
ふり向くと妻が居るので闊歩する
遊ぶ時は手をぬかないと誰か言う
宿題と話を詰めて来たりユック

大阪府 榎山 隆

祝電と列席大いなる違い
保釈金 悪の上前はねられる
転ぶたび起こしてくれた仏さま
這えば立て立てばサッカーボール持て
ゆつくりと緞帳おりの尊厳死

八尾市 片上 英一

想い出は玉虫色か虹いろか
君くれし木の葉のしおり大辞林
一々と一から十まで言わせるな
ブレンドのコメふつくとと恙無し
ランチタイム何を食べよう腹の虫

米子市 石垣 花子

小さい箱取ってあれから悔やんでる
あれからは大風呂敷と皆が言う
あれからの犬はめつたに尾を振らぬ
あれからは猫も顔色読み出した
あれからは贅肉取りに縄を跳ぶ

米子市 野坂 なみ
太鼓叩くと思わぬフアイト湧いてくる
群れて咲く花は妙なる鈴ならす

天も地も祈りの鐘に融けてゆく
夕暮れて一人の櫂がもう重い
日めくりをめくる 出逢いが重くなる

米子市 田中 亜弥

真珠貝の生まれる海は青かった
太鼓たたくと一目散に夏が来る
灯台を頼りに密航船がくる
前身頃に母の面影生きている
二十世紀の神話大事にして暮らす

米子市 政岡 日枝子

約束をしすぎて頭痛ばかりする
逆まわり象には出来ぬ芸当だ
迷い迷って風呂敷に舞い戻る
家族総立ち今麦秋の海にいる
幽霊が見えているよと九十四歳

米子市 青戸 田鶴

山百合の香りに部屋が満たされる
七月の山彩ってねむの花
道草をしないと友によく出逢う
つかの間に亡母と出逢えた流れ星
あじさいの花にまぎれてかくれんぼ

米子市 寺 沢 みどり

旱魃の庭で雑草たくましい
生き生きと朝の鏡に出逢いたい
受け継いだ太鼓のひびき忘れまい
炊きたての飯をにぎった掌のほてり
本職に褒められトマト赤くなる

米子市 澤 田 千 春

父母に逢える気がする森の奥
逢うて来た鼓動おさえて米をとぐ
曲ってはえた牙をかかえて獅子が哭く
波長の合った相手をさがす箸一本
天眼鏡でも見分けのつかぬ鬼である

米子市 光 井 玲 子

先祖の神話 子に話す時蘇る
一生を軍手で漕いだ父の舟
惚けまいと胸の太鼓を打ち鳴らす
切羽つまつてとうとう鬼と手をつなぐ
古希の坂まだ忙しいそれも幸

米子市 白 根 ふ み

梅雨はれ間 首を擡げるものばかり
立あおい隣家のことは口にせず
落日に出逢い大きな今日になる
神話の埧塙 峰の霞は消えぬまま
仲間からすんなり抜けて落ちつかぬ

米子市 川 上 より子

三月月湖 昔を語ってはならぬ
山姥の話 子離れのバネにする
半ドンスクールバスが賑やかな
いまの児に亀の歩みの友はなし
自由席の好きな夫について行く

米子市 金 山 夕 子

政界のなかよしこよし摩訶不思議
冷房が背中突き抜け風邪になり
風邪に寝てFMの曲薬とす
モノトーンで迎えてくれる美容室
孫の手に届く範圍に座っている

米子市 新 正 子

這えば立てそんな野心が離れない
まるつきり演技をしないポチが好き
十日前そんな昔は聞かないで
少年に還る渚を持っている
誰よりも机が僕を知っている

米子市 中 井 ゆ き

我慢した話は私だけのもの
ゆったりと大樹の陰でねむくなる
あの時の話は暗示かも知れぬ
千匹の羊暗示を馬鹿にする
洗いいもころころ小川 秋の音

米子市 木村 富美子

はらわたに響く太鼓を父が打つ

白金に黄金に勝る子に迷う

白足袋を履けば女になり切れる

本真珠 私首になじみ出す

二人だけの神話をずっと抱いている

鳥取県 土橋 螢

生きる愛する波を立てないようにして

その時は敗残兵になりました

本願寺から一期一会の仲となり

外米を栗饅頭の皮にする

その胸は男に貸したことがある

鳥取県 松下 たつみ

和解にも勝った負けたがつきまとい

自尊心つまらぬ意地を誇りとし

耐えしのぶ道で野ばらの刺に会う

権力のなかで下絵は出来ている

潮時の言葉を隠れ蓑にする

鳥取県 林 露杖

浜木綿は月の囁ききいて咲く

妻いとし一期一会の縁なれ

無心とは退屈しとるのと違ふ

開発の杭 朽ち果てる草の丈

終焉のシナリオまたも書き替える

鳥取県 土橋 はるお

新人のお巡りさんに捕まった

一期一会の別嬪さんは妻だった

村長と幼い頃の話する

新人がわたしの背を見ているわ

銭になる事を時々妻が言う

鳥取県 江原 とみお

煙吐かぬ煙突よつらからう

使い残ったいのちに酒を注いでやり

愚痴っぱいから飴玉をしゃぶらせる

右往左往して悪人になりきれぬ

あの手この手の風あしらっている岬

鳥取市 岩原 喬水

お世辞でもいいワ美人と言われたい

禁煙を誓った指を淋しがり

肝臓の一つ母から子に譲る

きっぱりと別れ鏡に泣いている

祝電を打った本人出て喋り

鳥取県 石尾 かつ乃

よく動く箸に明るい病母を見る

又一人味方の去った苦い酒

石うすを回すと祖母の子守り歌

庭石の目鼻だんだん亡父に似る

よろこびを二倍に殖やす夫という

鳥取県 上田俊路

八上姫のロマンを生かすじげおこし

耳障り親に似ぬ子とほめられる

梨送りみかんが届く仲でいる

清張を読めば時間が走り出す

小説に自分史重ね読んでいる

鳥取市 小谷美ツ千

報復の笑顔練習しておこつ

ちよつと気取つて歩くと噂追つてくる

胸重ね海の鼓動を確かめる

死んだふりぐらいいは出来る花筏

鈴チリりまた八月の忌がめぐる

鳥取県 羽津川公乃

挑戦にまず自画像を塗り直す

一票の重み支える肩パット

私にもあったおしんの私小説

ゴキブリにまた足音を盗まれる

超音波測れないほど脂肪溜め

鳥取県 西浦小鹿

雨の日の世間話が長くなる

愚かにも子猫が鈴をつけている

手のなかの真珠が恋を語り出す

亡くなったあなたの影に蝶が来る

紙一重運のいい男 悪い女

鳥取市 西原艶子

キラキラの理想まだまだ抱いている

今ここでやめてしまえば負けになる

子の夢を聞くにはちようどいいジョッキ

あばら骨見せるなと子へ言っておく

安ものの服を着こなす才は長け

鳥取県 乾隆風

桐下駄が弾む涼しい宵の風

寄り道をせねば済まない泡銭

溪流の笑顔 山女を釣りあげる

縄のれん潜り太郎と鉢合せ

お灸するにカーテンを閉める老妻

鳥取県 武田帆雀

眠れる獅子が起きて来た風の彩

鼻の高さに白百合咲きました

老僧が飲んで忘れた夏帽子

炎天に洗濯竿の弾く音

寝た振りをするのも辛い処世術

鳥取県 さえきやえ

いのちありてまた日まわりと背くらべ

窓際でいつもの笑顔たやさない

焦眉の急 長いマユ毛で風通す

昔ばなしの家がつぎつぎ消えてゆく

私小説 秋海棠の章に入る

鳥取市 春木圭一郎

真つ白な浜へ二人の夢描く
大声でわめき浜辺を走りたい
友情の証のようにジョッキ干す
近づいた美女の小声がワナだった
北の国 小声で援助申し出る

鳥取県 田村きみ子

毎日がいくさ女は母と嫁姑
減ってゆく金と命のくらべっこ
喉仏に褒めることばを溜めている
筆を持つ演技重ねて秋になり
幸せという字を描いて米を研ぐ

鳥取県 山根八重

竹割ったような気性も味がある
盆踊り星の雫が心地よい
天の川 私会いたい人が居る
夏の空 星はキラキラ満席だ
自動ドア戸惑う心知らず開く

鳥取県 土橋睦子

大の字に寝させた孫は宝もの
とまり木の男の背が淋しがる
うれしげに振り向く夢の母であり
宇宙から向井スマイル日本晴
花菖蒲 腰を伸ばせと咲いている

岡山市 川端柳子

人ひとり救えない手よじつとみる
体調を気遣いながらする話
大きな吐息沈み込ませているソファー
百歳の気焰にスイッチ切り替える
うまそうな赤ちゃん運ぶ乳母車

岡山県 小林妻子

償いもせず刑だとも言わず
寒そうな不況と熱帯夜が続く
飯茶碗まだまだ世話になるつもり
一度くらい泣いてやりたいペットの死
汗くさい話勿体ばかりつけ

岡山県 矢内寿恵子

失うたものを数えて敗戦忌
釣書に賞味期間が過ぎました
十戒のひとつ破れば百の刑
九条がゆれる平和もゆれている
ポシエットの青い理想がとびたがる

岡山県 山本玉恵

掌に朝の雫を掬いあげ
今日も句を耕してひとり部屋
女三人よれば着る物食べるもの
ひまわりがたしかめて見る首の位置
火蛾の舞う命の果てのひとつときを

岡山市 井上 柳五郎

日付入り漬けた梅酒へ父の筆
瓢箪から駒マスコミも見込みそれ

幸運と陰の努力は語らない

団地にも過疎老い残る核家族

八月の昭和史にある深い闇

岡山市 荻野 鮫虎狼

生ビール明日へ続いた夜を刻む

謝罪上手で校長まで上り

栄螺売る女 手の皺顔の皺

寡婦ひとり女に戻る旅続く

口髭が少うし伸びて古希の顔

岡山市 二宗 吟 平

天井へ向け朗詠の腕を練り

雷も来ない今年の梅雨が明け

自販機が内緒のように切手出し

鼓童とや街を太鼓の町とする

お互いと言うたがでかい家を建て

岡山市 嘉数 兆代賀

八十夫婦の視野で長男癌を病む

吊り橋が揺れて明日の絵が描ける

五百羅漢に固い約束して帰る

人生七坂まだまだ神のある試練

負け犬がわたしに味方してくれる

竹原市 時 広 一 路

満月と何を語ろう白い花

にこにこ薔薇のお喋り聞いている

夕焼に挑戦サルビア燃えている

石地藏 帽子が欲しいなと思う

二十年時効となっている病名

竹原市 森 井 菁 居

何もかも忘れたくって孫を抱く

童心に戻してくれる磯づたい

解説が欲しい土鈴の土産物

自社連立 公約数はどう求む

意のままに八十歳の草むしり

呉市 榎 田 英 詩

島晴れて烏賊も鰯も干してある

転んだまま亡父の達磨が還らない

竹を踏み飽きて野菜のジュースなど

再会の握手補聴器オンにして

夏休みなのに校舎の大時計

竹原市 岡 本 清 水

瀬踏みして貸したお金が戻らない

息災も不老長寿も個々の徳

作物いろいろ降ってよいもの悪いもの

炎える陽にみかんの園で草を刈る

みんなから呼ばれて嬉しおじいちゃん

岩本笑子

日傘くるくる恋の火種を持ってます

水軍の町でガイドの名調子

橋揺れるああ埋み火のせいだろうか

奥様のグチも知ってるロバの耳

父の胸いつかいつかは長男よ

出雲市 尼 れいじ

精一杯今生きている蟬時雨

輸入攻勢ミカン畑が焦ってる

良い夢を積んで行きたい老いの坂

母が着る制服 娘の服 亡母の服

きつと何時か似合うだろう亡父の服

出雲市 板垣草丘

蝮除け実地調査の前夜祭

物要りな娘と妻は仲がいい

ブラジャーともう一本は何の紐

道端の南瓜と話す日の盛り

差障りないから元氣だしなさい

出雲市 園山多賀子

過去型の麗句足踏みばかりする

判官鼻 情けに弱い女です

孤独ではないと気付いた蕎麦の花

てふてふと言う季語に舞う番蝶

純白な愛控え目ななななまど

出雲市 吉岡きみえ

母の忌に母の思い出 姉妹

洗い髪梳いて女がよみがえる

ハードルを越えて目尻にしわがで

三文の得を雀と分かち合い

また嘘でかためてしまふ白髪染め

島根県 松本文子

疲れたら一人で休む場所がある

名水を飲んで心を入れかえる

料理講習でんぶらにした蕎麦の花

恋人の頃の写真を娘に見せる

喝采を遠くで聞いたことがある

出雲市 島 祥庵

欲しいもの何もないという母が好き

喜んだ指輪のサイズが太くなる

息抜きをする蝶もいる花の街

その奥へ威厳がひそんでいる構え

犬掻きが好きで母の胸の中

出雲市 岸 桂子

今日の悔い深く吸い込み深く吐く

意地と意地同じ痛みの矢がささる

気がつけば仲間の水を飲んで

祝日に旗を忘れてばかりいる

兄嫁の笑顔が里を近くする

夕霧のかすかに流れ花葵

出雲市 石倉 芙佐子

ひそやかな言葉交して霧立ちぬ

さざり立つ夜はひたひた川の音

川霧に仄かな愛を包まれる

知らぬ間に夜霧の中に居た私

出雲市 久谷 まこと

世の流れ姑息な老いは乗り遅れ

不眠症羊の群れはもう追わぬ

敵味方区別つかない騙し舟

正論と思ひこませるから恐い

専門語使い納得させられる

出雲市 竹 治 ちかし

良い時代 親も遊びを考える

富士山よりも高くなつてはいけぬ山

他人の目になつて女が見る鏡

寝姿は共に語らぬ熱帯夜

煙草持つしぐさも亡父に似て老いる

出雲市 伊藤 寿美

鶴は病みき大正ロマン遠くなり

ソプラノとアルトが下の位置でもめ

さり気なく言う独り言に指図され

結局は父の轍を踏む血気

大道芸 一期一会の銭の音

ふるさとの山と対話をしに帰る

落ち込んだ谷間で母の鈴が鳴る

山彦が過疎の佗しさまで返し

百獣の王の昼寝のだらしなく

お茶しない言うてみようか六本木

島根県 石飛 水煙

離合集散 我が身守る政治とは

国民の素朴まどわす政治劇

屋台酒一生つき合う友が出来

手酌でもよし今日はいい便り

八十で手習い覚えた土根性

唐津市 田口 虹汀

一滴も飲まず大阪弁の味(故凡九郎氏を偲ぶ)

盆供養 対の浴衣で来る踊り

五十年妻の軒を子守唄

我が子より可愛い孫に子が生まれ

川柳を盲亀浮木として抱き

唐津市 久保 正剣

目まぐるしい椅子に座つた長寿眉

青壮年の祝日作らぬのも差別

息つぎが下手な女の薄い幸

朝が来ていのち二つになる別れ

無意識のとなりにいつもきみが居る

唐津市 仁部四郎

お化粧が告げてゐる今日の御心境
お世辞につまずきましたハイヒール
軽佻も浮薄も芸と父の遺書
百度石頼んでみたい安楽死
無口なら肌は七難隠してる

唐津市 山口高明

助手席で寿命が縮む娘の車
渋滞の車へジュース売りにくる
怪文書撒かれるほどに偉くない
休診の札を下げてゐる不養生
面当ての家出夕方には戻り

唐津市 浜本義美

窓を開ければ港の見える船帰る
風鈴が鳴るから窓を開けておく
影法師 永田町から顔かくす
街中の窓が開いて曳山がゆく
拝んでも拝めど神は手を貸さぬ

唐津市 筒井朴竜

日出留瑞穂江拙米輸入
無農薬菜葉青虫試食済
邪馬台於尋末盧史探訪
古唐津乃元祖岸岳登窯
唐三彩目出撫廻抹茶碗

香川県 木村あきら

月下美人 気高い花は夜に咲く
逃げ道を敵に残して置く余裕
世の中で頼れるものは自分だけ
塗りすぎて亡夫が少し妬くかしら
お隣の犬が入院したそう

香川県 成重放任

何も無いけど飯食べませんか
老いたとて恥じらいあるよ女です
キャンドルに大きな愛を写し出し
さまたげがあればあるほど燃える恋
里帰り娘が友達へ長電話

香川県 川崎ひかり

うれしさは口より先に目が語る
夫には内緒でダイヤ買いました
建前で言った言葉にけつまずく
子をもって垣根をひくく低くする
ここと言う時に明治のいぶし銀

香川県 工藤吟笑

余命など考えなしに種を播く
相談に乗れぬが一口飲んでゆけ
呑み込みが早くて消化不充分
消えそうになってから要る夫婦の座
吞ますのが奥の手だった苦勞人

香川県 池内 かおり

しあわせは灯の届く所に老母
退職後 会社は何事も無く
ストレスを溜めて喉アメなめている
夫が練る行程表に乗ってみる
冷や汗を掻いてばかりも人生か

香川県 新川 マサエ

あべこべの暮しに主夫もやっと慣れ
一色の中にも冴える色がある
目の上の瘤でもいつか温かい
好きな酒 薬片手に呑んでます
呑む度に昔話を繰り返す

大阪府 本間 満津子

忘れまじ窓々の灯 八月十五日
郵便受けへ何度目 きょうは日曜日
調子の良い返事ほんまにええかいな
切り札は楽しく胸に伏せてある
おばあちゃん可愛いと服褒められた

大阪府 藤田 頂留子

大小をすてて茶釜に生きたとか
通り抜け句集うれしや十冊目
鬼やんまさやさやゆらぐまんじゅしゃげ
昔も今も約束ごとに泣きますな
アナウンサーの声がうわずるゴール前

大阪府 津守 柳伸

年寄りの冷や水ヨガに精を出す
早起きの母にテレビのスケジュール
涼しさもいろいろあって冷房車
年の差をすっぱり包む遠花火
蚊やり火の匂う座敷の軒忍

寝屋川市 稲葉 冬葉

職引いただんなの話ばかり聞く
そうだった月命日だピアガーデン
伯父さんが緊張してる留焼香
お漬物買うて三越包装紙
歴史上人物になる年間総理

大阪府 井上 白峰

ふる里の道でやさしい風に逢う
歳時記にハウス野菜が背を向ける
熟年の河童に泳ぐ川がない
窓際の机で憩う肥後守
てにをはにこだわり過ぎてまとまらず

大阪府 榊 本 落 児

男とはいつも心に虫を飼う
抽象画 私の恋もこのようだ
悲しいね男を断つと書いた絵馬
席譲る女子高生は美人です
バイブルを持つと足元定まらぬ

大阪市 上田柳影

ポーナスで妻休肝日を忘れ

ええ加減にせよとカルテが怒る酒

気まぐれなキューピッドの矢を期待する

ソフトクリーム私をしゃんとしてくれる

空梅雨になって氷屋腕まくり

大阪市 北勝美

生真面目をかせせば度胸ない勇氣

朝漬けの好きな男で欲がない

炎天の短い影を譲り合い

遠い耳 勝手つんばと勘ぐられ

登りつめちよつとまごつく太い眉

大阪市 稲本凡子

愛染祭それから時計進み勝ち

こっそりと出たいが犬がじゃれてくる

疑いを持たぬ老母の涼しい瞳

難聴になつて喜劇を繰りかえす

いつからか嫁に合せたパンの耳

大阪市 寺井東雲

窓開けて蝶を逃がした行方追う

海浜にときめきがある水着ショー

新家庭ママゴト遊び役に立ち

妻の留守楽しさあるが食貧し

助手席はお尻の重さ知っている

大阪市 板東倫子

人生の賞味期間を過ぎて生き

減税まで貯金している国民性

風呂沸いた御飯炊けたとベルが鳴る

思い出し笑いアルバムの子の恋

これがまあわたしの孫か長い脚

広島県 田村新造

歩かねば捨てざる掟いつかでき(興安嶺逃亡記)

満蒙落日どこまで続く逃避行

瓊瑤孫呉むかし馴染んだ街の灯よ

人里が近いが蛇がつきまとい

満月を拝んだ夜の小休止

広島県 藤解静風

お互いに胸にしまっている花火

振り向いた女神は僕を見ていない

親切へ思い違いをせぬように

わがことになれば話は別である

ポケットに模範解答いつも持つ

京都府 都倉求芽

遣伝子に手を入れ神を見失う

去年今年足して二で割る夏の陽よ

激辛のカレーで猛暑を乗り切ろう

勝負ごとジャンケンさえも奥深い

朝の鏡 賞味期限を貼りなおす

京都市 山海友熙

熱帯夜 奥尻の地に忌がめぐり
忌がめぐる 暇閑すれば露のこえ
灯のゆらぎ言葉のゆらぐ大文字
コスモスに聴かれて揺れる風の私語
六歳に占いたどる事故をさけ

加古川市 吐田公一

一喝のこれが亡父ののだ仏
世辞一つ言えぬ老父の肩の瘤
幸せは朝には朝の仕事あり
妻の目から見れば私は禁治産
ヒステリを押える妻の鍋磨き

西条市 片上明水

こんな村までも響くドル相場
鼻髭が邪魔になり出すほど不況
仏間にはまだ祖母が居る鐘の音
修学旅行 方言一つだけ覚え
車椅子どちらにも汗をかいており

寝屋川市 柴田英壬子

一夜漬けの首相が下痢をしたナポリ(サミット異変)
ようやくに淡い眠りをさそう風
風蘭も里の暑さに耐えている
カラフルな浴衣びちびち宵まつり
故人みな呼んで天神祭り観よう

富山市 酒井輝

欠動でない空席が増えて来た
塾疲れ十歳でもう只の人
自転車も乗らせぬ老婆の果し状
赦す気の朝念入りの糸ようじ
無言電話にいくらかの身に覚え

町田市 竹内紫鏑

胸像を想う守衛がいる母校
自分史の切り口こんな流行歌
本棚は昭和でねむる段があり
再会の人はずーが炎えており
機肉食のこさず貧乏性つづく

神戸市 山口美穂

捨てられた仔猫立派な野良になり
酸性雨に泣く摩崖仏へ手を合わす
少し惚けた老母の理屈がもつともで
腹立てた私が阿呆なお母さん
内需拡大 老後をよろしく頼みます

北九州市 梅田宣司

袋小路曲れば出会うキミとボク
保証印まじめな鬼にだまされる
お人よしすぐ本心を覗かれる
抜け穴を掘る善人の顔をして
仏壇か新車にするか迷う歳

生駒市 北山悟郎

暑い夏冷や汗かいている電話

黒子がライトを浴びることがない

至誠を貫き通した兵の墓

四季巡る嬉しさ満つる娘の家で

持てる力出しければ敵霧散せり

堺市 黒田真砂

山の中のこんな所に湧く清水

細かった時なつかしい九号服

大の字に寝ても心の中のうつ

紫陽花が彩変え絵の具皿かわく

従兄弟下戸 嫁は酒好きビール好き

寝屋川市 平松かすみ

暑い日の僕の味方は冷や奴

繁らせて酸素たつぷり吸うてます

蚊に負けている塗り薬のみぐすり

擦り傷を庇いすぎたらひどくなり

アレルギー忘れています隠岐の島

尼崎市 田中薫

人の世の約束ごとや夏瘦せて

魂の掬りどころなき沖光る

水音の激しくなりてたましい荒ぶ

宴果てぬ 妻との乾杯は無言

深き瞳の人と聖堂までの坂

西宮市 西口いわゑ

竜宮城思わすような熱帯魚

強がつてみても夫の旗の下

守られているのに地球汚してる

空想の中で殺す二三人

どのボタン押すと亡母に会えるかな

宝塚市 吉田笑女

少しルーズな嫁の明るい笑い声

気くばりが過ぎてても他人は煙たがり

母と子の仲をとりもつ缶ビール

年中花を育てて暮す独り者

風鈴の音色安らぐ昼下がり

宝塚市 中田純次

会者定離 古い脅かす計の続く

矢の如く過客の如く去る月日

老夫婦 以心伝心 お茶がでる

いつまでも話しこんでる妻の客

顔姿 言葉遣いも美人です

姫路市 大原葉香

過労死など知るはずがない元兵士

鉛筆を小刀で削る大人の目

人間を人間に戻す森の木々

ふり向けばまた未練わく曲り角

寒来暑往 季のうつろいに生かされて

姫路市 丁 坪 サワ子

長い愚痴あくび殺している友情

老齡がなんだと開き直ろうよ

最高のお洒落で姑の医者巡り

姑逝くと捨て場に迷う宝物

煩惱の渦に巻かれている余生

姫路市 中 塚 遊 峰

古希すぎて月日立つのも急ぎ足

幸せの先が気になる苦勞性

年重ね堪忍袋はちきれる

古希坂を越えて喜寿の夢枕

結局は老化くらべるクラス会

羽曳野市 吉 川 寿 美

月下美人 月の雫へ妊りぬ

くしゃみつづく亡姑のお小言かも知れぬ

てのひらで豆腐も男も賽の目に

終電車 今日疲れと相席で

律義に生きた老父の時計の人ざらい

羽曳野市 田 中 透 太

浅学を悔い晩学の灯を点す

胃薬ですつきり出来ぬ腹の虫

百花繚乱とてもルールは守れない

どちらにも言い分がある匙加減

守り札有効期限書いてない

豊中市 吉 田 あずき

天と地も逆さに出来る宇宙服

神様の死角にカメラアイがある

別姓のままで女が出す便り

夢一つ空へ放したレクイエム

さくらんぼやっぱり君を信じよう

川西市 氏 林 洋 敏

ご先祖の話寺から聞いてくる

暑氣払い青磁の皿を見ている

同窓会遅れて来ても気付かれず

死に水を妻がとるとは限らない

百歳を見据え五十の大志抱く

吹田市 山 本 希 久 子

メダカにも先を越された宇宙旅

熱帯夜の窓もまだ眠らない

ころろ貧しく秋の花野に立ちつくす

亡父を思えば似た人がいる雑踏よ

すいとんを食べて八月忌を偲ぶ

吹田市 栗 谷 春 子

あさがおの初花 幸さきよしと見る

古寺涼し制多迦 金迦羅すこやかに

蝶は野に蛙は池に極楽を

この辺でわたしはつめたいところてん

年のせい土用三郎がただけし

奈良市 米田恭昌

色褪せた虹抱いたまま父は古い
傾いても老舗今更妥協せず

静岡県 蘭田 模 杳

あじさいの待っていたかに梅雨の入り
ライバルに後ろ姿は見せられず
じゃじゃ馬の姿見に見る晴れ姿

富田林市 池 森 子

バカンスの帽子は甘い言葉選る
やがてやがてと後押しをする風よ
やっぱり守らねばと帰ってくる絆
七夕の星のひとつは夢売りに
同じ景色の中でビールの泡たちよ

富田林市 片岡 智恵子

火傷せぬ距離で他人の青写真
音絶えた森は仏のふところか
雨の午後 心の扉さびてくる
監察医 最後の声を聞くために
欲すててから見えてきた銀の鈴

富士宮市 渥美 弧 秀

思春秋の子が親の目に眩し過ぎ
笹ゆりに妻は散歩の歩を停めて
デザートの器は妻のお気に入り
針千本 孫の真顔を信じきる
詩とピアノ一途に生きる八十路坂

風見鶏 風の強さを肌で知る
豆球を消して半月取り込もう
古い二人それぞれ別のテレビ持ち
父が子に一身上の手紙書く
町平和 駐在さんも洗車です

西宮市 秋 元 てる

初成りのトマト供えて話しかけ
五十回忌 顔知らぬ子が取り仕切る
暮れなずむ上淀廃寺史料館(旅 3句)
名水の「天の真名井」をボトル詰め
萩焼きの見島手小振り一つ選る

和泉市 西岡 洛 醉

一陣の涼風 亡母の囁きか
パフ叩く女欲望みなぎりて
影法師 嘘と知っても従いて来る
続編のドラマへ君と妥協する
肩書は無くとも今日の職があり

箕面市 椎江 清 芳

釣り自慢語る魚拓に波の音
ローンなら買える毛皮に触れてみる
妻の愚痴浅い眠りの中で聞く
自惚れのバラが花屋で売れ残る
つぎの世もきつと夫婦で星になる

東大阪市 崎山美子

折角の庭またガレージへ変身し
一坪の庭をはさんで三世代
はったりにくっかりのったお人好し
一坪の庭にも四季の顔がある
旧姓で呼ばれ少し若返る

奈良県 長谷川 春 蘭

満ち足りて老いの伴せ梅雨さなか
小刻みに眠る介護の明けやすし
我が声の老いに驚く芽木峠
ビール飲む大大阪を見下ろして
蕎麦を挿す茎を食べた頃のこと

高知県 小澤 幸 泉

春風にのせてもらえぬ受験の子
人間をふたつに分けた赤と黒
風当りさけて気弱な父の朝
土佐弁で語れぬ父の二十年
セメントの生活に少しヒビが入り

倉吉市 野 中 御 前

火の女切り札胸に逢いに行く
綿菓子の中に刺のはいはなし
自販機のお釣りはいつも正確だ
錆びついた缶切りの刃で指を切り
竹粥に農の神話が生きつづけ

堺市 一瀬 福一

割り切れぬものを割り切る手切金
食パンの耳にまつわる飢えの唄
その人と月下美人の夜を過ごす
じゃが芋のような男と呑むビール
農繁期 雨は尊い音で降る

藤井寺市 中 島 志 洋

ゆきずりの愛を育てた雨宿り
五年越し未だに清いお付き合い
すんなりと来た訳でない共白髪
爽やかな秋を届ける赤とんぼ
戦友会 鬼軍曹が酌にくる

守口市 結 城 君 子

ブルドーザーの音聞きながら蓮見舟
とげとげしさを暑さのせいにして許す
悲鳴だけ転がってくるコースター
鋭角な言葉でセールスを断わる
もう秋の予定に移るカレンダー

河内長野市 植 村 喜 代

目に青葉 耳に鶯 今日の日 幸
後ろから押さない親でまだ嫁かす
自分だけよければなんて親ですか
定年で帰る時刻に出掛け出し
誘われたなんてこの次言わせない

茨木市 堀 良江

子に掛けるどこまで掛ける縄梯子

浴衣の子どちら姉やら妹やら

アンダーラインいつ読んだのか忘れてる

一着の馬の瞳の驕りなく

暑おすなことばが返る銚の街

倉敷市 井上富子

恋人へ父母が反旗を振る運命

バツイチの男が唄う子守歌

後輩に話し継がれる武勇伝

褒め合つて丸く生きてる老夫婦

いそいそと失禁パンツの旅仕度

芦屋市 黒田能子

母と娘で受け継ぐ祖母の知恵袋

島国の国境線のない平和

盆すぎて母の静寂また戻る

恐竜は滅びゴキブリ生き残る

命かけ産んだ子供のはずなのに

癌末期そんな政界かも知れぬ

談合の小声へ神も耳を立て

すり減った靴がノルマへ届かない

ヒソヒソヒソきつと賄賂のことだろう

嘘一つああアリバイが崩れそう

鳥取市 両川洋々

仙台市 川村映輝

自社が手を組めば驚く為五郎

一日一善 今日道路の掃除人

卒寿とは余命考える年でない

おしゃべりの植木屋仕事涉らず

唐津市 浜本ちよ

満足な五体を持つて愚痴ばかり

好きな物断つて祈るも親の愛

ゆとりある人ほどケチに徹し切る

眉目秀麗 誇つて見ても若い内

鳥取県 津村八重子

ささやかな果にも愛しい子よ孫よ

船旅を昔語りに瀬戸走る

灼熱を走る素足のある幸よ

いい香りイ貝の飯が吹き出した

富田林市

屋上で一人になったアドバルン

恋人と別れてからの忘れ物

病むでない病むでないぞと芋を煮る

一人言聞かれていたと思うまい

宅地化へ今年かぎりの稲刈機

闘牛の対決わかす島の夏

愛牛へ化粧回しの日がせまる

出雲市 小白金房子

倉吉市 最上和枝

民宿の自慢 泉で飯を炊く

湧く泉 一期一会の茶を点てる

広島に夏 語り部も老い給う

おやつ代りに色とりどりの薬のむ

吹田市 茂見よ志子

余暇出来てオーバーホールと医者へ行く

秘めごとに罪の意識がまといつく

情に流され戻れぬ道に佇っている

言ってみるもんだすんなり承知され

和歌山市 青枝鉄治

ロボットにいても冷たく職追われ

耳寄りな話へコロリはめられる

冷やめしの苦労をバネに這い上がる

ライバルに引けをとらない隠し芸

藤井寺市 福元みのる

冷え切った北浜に暑い暑い夏

効く薬ほど怖い毒だと心得る

誰かに聞かす積りで犬に話しかけ

足の指 父と娘と似て笑い合い

河内長野市 井上喜酔

鉢植の雑居も楽しい狭い路地

ソーメンと冷酒がうまい夏祭り

裏口が丸見え自社が手をつなぐ

父の日も庭の手入れで時忘れ

伊丹市 山崎君子

真夏日は花も無口になっている

寝不足でやさしい言葉忘れかけ

ふる里はいい風が吹く夏まつり

残月に夢うちあけてひとり旅

羽咋市 三宅ろ亭

一鉢を大事に据えて菊咲かす

三人の兄妹帰って近所も元気づく

欲なのが隣に住んで境揉め

首切りの都会に見切りつけるとき

島根県 藤原鈴江

喜びにふるえ色益す雨の木々

趣味ひとつ命の糧として生きる

老春と思う日もあり長らえる

青い風胸いっぱいにさあ朝だ

吹田市 井上照子

妥協して水受けとめる鹿威し

万歩計許してくれぬ近い道

たかが虫 私は万つくかぶと虫

泣き虫も社長になって同窓会

鳥取県 乾喜与志

気の早いコスモス咲いた梅雨上がり

善いことをテレビに習う悪いことも

つまづいた石よ痛くはなかったか

憎しみも愛も残っているノート

和歌山市 岩 本 美智子

気休めの約束ばかりする女

なんやかんや言うても女紅を引く

花いっぱい飾りうつろを埋めてみる

サラエボの廃墟に響く鎮魂歌

鳥取県 谷 口 次 男

ああすると女房との縁切れるだろ

近所とは仲よくしよううるさいぞ

近所には変った人もおりますなあ

神様の逆鱗に触れ貧乏だ

和歌山県 西 口 忠 雄

腰に乗る妻の重さはいい薬

オブラート破れて咳が止まらない

朝っぱら放言飛び交う浜の市

ときにより過激になって来る乳房

札幌市 瀬 尾 六郎太

来ましたね日本最北アルメリア(稚内)

利尻富士サハリン近しコンブ船

景気策はったらかして総辞職(羽田内閣)

一か八 村山内閣かけに出た

岡山県 岩 道 博 友

年金をいつまでくれるか多弁せず

人に会い理想の仮面消すとする

良心で誓うファックスまだ来ない

貸菜園 笑顔も一緒に生えて来る

岡山市 花 田 たけ志

ときどきは呆けた振りして逃げを打ち

膳本を頼んで嬉しい秘密ばれ

才能の過信が重くのしかかる

円高へ減らぬ黒字が冷たい目

出雲市 板 垣 夢 酔

旅行なら賛成ですと言うリンク

神棚へくじを供えてから忘れ

台風と言う名で人間灸をすえ

徳利から笑い話がヒョイと出る

枚方市 海老池 洋

競うてもみんなちよぼちよぼいい仲間

きつとではないがやがてと握手する

薬は薬 びんずるさんを撫でまわし

付和雷同 ルーズリーフのような人

豊中市 三 宅 つえ子

新空港の風に明日の夢もらう

人混みに酔うて淋しい車椅子

紫陽花も私も揺れて昏れなずむ

本箱が片付けられる一周忌

豊中市 滝 北 博 史

内心は茶飲み友だちなんていや

できるだけ早いお経をたのむ父

平手打ち誰も合図と気付かない

孫だけが机を持っているわが家

寝屋川市 堀江光子

虹の橋夢は見果てぬままでよし
虹かかりその貧しさの目立つ村
宝石売場 森閑とした別世界
手の中の虫の憐れは死んだ振り

和泉市 岡井やすお

自由の気 胸一杯にパリ祭
葬式の序列も政治色と見え
鯨のようとは面白い桁外れ
惚けたなと感じるうちは大丈夫

和歌山市 田中輝子

面会へ火を抱く水をだくおんな
ちぎり絵の中にいまでも流れ星
点滅信号よけいなことの喋りすぎ
足の裏 沖へおきへと広がりぬ

大阪市 松尾柳右子

争いもなぐさめもある同じ口
宣言はしないが梅雨は明けていた
年下に見える無口がお兄ちゃん
後味が尾を引いている勘違い

堺市 柿花紀美女

人間で無理ばかりして生きている
炎天下 雑草強い意地を見せ
八方美人演じてからの自己嫌悪
くされ縁よくぞ山坂五十年

岡山市 池田半仙

木の葉さえ揺れない今日の蒸し暑さ
爪だけはよくまあ伸びる楽隠居
いろいろのコケシ故郷主張する
故郷に錦を着ずにUターン

鳥取県 幸家單車

夕暮の浜で恋愛こっこする
村長の哲学にある和の心
犬はフールドで私外米食べてます
夕焼の浜で人生語り合う

和歌山市 田中みね

説法を素直にきける耳がない
憎むより大人になって許しとく
ブレーキの利かぬ軽口持て余す
疑えば切らない事が気にかかり

鳥取県 黒田くに子

妻バイト夕餉のメニューはでになり
家計簿はどうあろうともビール飲む
合歓の花うつとり眠気さそわれる
ふる里へうつとり出来る川がある

黒石市 千葉風樹

過労死をクスクス笑う串団子
水を恋う同士のくちづけがつづく
トロだけが切り離された母子手帳
帆立も海老も黙ったままで閉じる店

幾度も迷う女の裁ちばさみ

出雲市 小玉満江

ライバルの昼寝は長い方がよい

八月の流れる雲よ特攻隊

あれこれと処理にとまどう老い多忙

米子市 茂理高代

主婦業に白旗たてて見たくなる

いい話共によろこぶ友が来る

外したり付けたり真珠似合わない

ほのぼのとしたい老後の木を植える

守口市 森川まさお

少年の野性的なる水飲場

尺とり虫リユウマチの脚痛くなる

バラの刺いつも開いてる狭い門

ステンドグラス寡黙な人が出入りする

岸和田市 寺田甚一

ご盛会の中の一に顔を出す

草枕 明治もいまも変らない

へりくだったつもり本音と受取られ

神前で結び読経で送る国

岸和田市 田中文時

クラスではボスだったのがボケて来た

暑い日に熱い茶が好き祖父達者

百薬の長と信じて疑わず

征く亡兄を見送った駅 廃止線

延命のお茶の香りに二人とけ

出雲市 富田蘭水

忘却のかなたに過去は虹となる

サングラス女の心かくしてる

洗濯が日課となった夏地獄

鳥取市 西村黙光

男気を出した年金大火傷

長寿です兄弟姉妹痴呆症

薬草酒目盛りちよいちよい間違える

シナリオはあなたにまかせ夜の浜

大和郡山市 坊農柳弘

夏休み宿題済んだか地蔵盆

袴を着けた言葉でけつまずく

運命の出逢いが今の子沢山

愛妻弁当 銀婚式を過ぎて尚

倉吉市 野口節子

山一つ小指でころっと動かした

日傘重ねていつまで続く立話

今日よりも明日はでっかい絵をかこう

ゆっくりと咲こう人生八十代

大阪市 清水利武

お祭りの裏方 母のちらし寿し

常夏の国より暑い熱帯夜

盃蘭盆へ息子の嫁が汗流す

カラオケとなれば老婦も一決す

和歌山県 小倉アサ
雑巾になつてもランク纏いつく

よくしなう竹の本心別に持ち
荒削りゆえに人目をひく魅力
鈍感なふりで荒波避けている

鳥取県 鈴木公弘

有休をとつて奉仕の溝そうじ
生きのこり計る背中に鍼を打つ
しゃっくりが続いて困る水不足
豆腐の角がばくのほう向いている

東大阪府 指宿千枝子

車窓に見る競艇場波静か
境内で休めば猫も来て座り
スーパ―に並ぶ野菜の器量良し
ごみ袋出して出陣する戦士

茨木市 藤井正雄

二度の職趣味の仲間の世話になる
時間帯はずして祖母と街で昼
舞台今絶唱霧が這う装置
安すぎる訳を聞きたい話さない

大阪府 八十田洞庵

五百羅漢 香華の中のいいお顔
弱点を見せまい女のたたずまい
旅の膳 妻にはうれしいもののうち
喜寿迎え卒寿もあるが天寿待つ

交野市 福崎しげお
年金で暮せど家族しサイズ
過労死は新語か昔はよかつたな

惚けるのは私が先とおどかされ
颯爽のつもり腰には万歩計

倉吉市 米田幸子

気の緩みどこかに螺子を捨ててきた
愛と金どちらに比重置きますか
喝采を受けたピエロが裏で泣く
溜息は止そう青春真最中

箕面市 岩津ようじ

別々の歯医者へ通う妻と僕
脳病院の院長もいるクラス会
疑えば鬼が聞こえる蛇も見える
古き良き年功序列物語

川西市 松本ただし

想い出に負けて寝付きが悪くなり
御破算を續けてばかりの長丁場
ああでもないこうでもない騙し舟
新薬を有り難がつて穴に落ち

竹原市 石原淑子

良い子でも優しい子でもないの老母さん
靴ひもの謀反に泣いた不覚の日
三十五度 賢治の世界に涼もとめ
済みません自動ドアではないのです

和歌山市 山口 三千子

一日が長い夢見の悪い朝

ふとした事から思わぬ人の艶話

思い立ったら吉日 妻は落ち着けず

心の中で育んでいる夢芝居

広島市 森田 文

ご当地ソング覚えぬままに暇乞い

すすめられるまま買うたきびだんご

反発の火種になったのはジョーク

感情の起伏はげしく八月忌

豊中市 井上 直次

反抗期 薬が少し効きすぎた

上役のその上役に気に入られ

ギャンブルの話はいつも勝っている

向う意気強い男の不仕合せ

堺市 中野 櫛子

貴重な日日 之で好いのか今日の彩

尾鰭つきすぐ泳ぎだす立ち話

喪の服の出番が続くだるい夏

悲しい真実 夢であればと弱い声

鳥取県 石谷 美恵子

新人のネクタイ闘志結び込む

良妻でいようか残り火が揺れる

一肌を脱ぐ体温が燃えてくる

浜が消え波の詩にももうあえぬ

和歌山市 榎原 公子

石流れ木の葉沈むのも世間

人は皆弱さを持っていて集う

刺し違えそして己になる模様

神戸市 木村 貴代子

雨の朝ガン検診の列にいる

日の丸を不戦の旗に原爆忌

湖に星をうつして夏終る

十和田市 小笠原 敏人

羽一本落したカラスの濡れ羽色

拒否反応僕の肉体排他主義

紫陽花に今年の色が着いて夏

大阪市 渡部 さと美

私だけはもちっとましと皆おもしろい

町内にたった一つのつばめの巣

ジーンズがきつちりはけて秋に入る

池田市 岡本 吉太郎

薬漬だけど寿命は世界一

火葬場でゆっくり亡父の骨ひろう

若き日の情熱レール踏みはずす

枚方市 八田 敏

新境地 味方作りに酒が過ぎ

焼肉の匂 家までついて来た

うだるほど熱い風呂好き貧乏性

豊中市 江口 明光

邪魔したくないが話がこんで来る

減量が薬にまさと医者と言う

禁煙の駅 売店でタバコ売る

岸和田市 三輪 通彦

言いたいこともあるが耐えてる喉仏

親の方から折れて同居の和を保つ

賑やかな親子で共に祭り好き

和歌山市 玉置 当代

一徹を通した亡父の煙草盆

灰皿のない対談で落ち着かず

抜け道を易に委ねる四面楚歌

香川県 山地 マツエ

脇役の似合う女であったかい

部屋一つこわして新車住まわせる

約束の明日が守れぬ重い足

鳥取市 前田 一枝

花盛り過ぎれば人も振りむかぬ

青い風 米のなる木をなでて吹く

結んだ手放すな闇が深くなる

和歌山市 北山 好笑

売り言葉に三言も返す買いことば

片言がくもる心を晴れさせる

面会は電話と違う肌ざわり

岡山県 江口 有一朗

諦めず神にお任せしてみるか

外出の心へ一寸櫛を当て

積み重ねた笑顔実力つけてくる

堺市 近藤 豊子

早口で呼びあう朝の雀たち

鉄棒に宙ぶらりんの足ならぶ

梔子の花に風あり遊歩道

大阪市 清水 絹子

二つ並ぶ湯呑みも今朝の有り難さ

お見舞いの空ベッドにみる快復期

四面楚歌 太宰治を二度三度

吹田市 瀬戸 まさよ

信念を貫く支えわが家族

辞めさせる大義リストラ利用され

連れ立って緑の中の墓参り

大阪市 川端 一步

嫁した娘に電信棒にも礼をせよ

ポックリのさい銭額を思案する

就職の浪人というやるせなさ

岸和田市 藪野 けい子

年金を貯めて同居へ増築す

店員に足袋をまかせる七五三

手伝いに昼食ついて昼寝つき

自選集

月原宵明

花粉には負けぬ座った鼻柱

星の名は知らなくてよい天の川
目に入れて痛くない子に背かれる
傘寿の坂越えようとして竹を踏む
人間のエゴ合理化の名を借りる

大矢十郎

チャンネルを変えれば匄を蹴っている

医者になるのを諦めた藪投手
それはそうだけど嬉しい真紀子さん
しあわせな昼寝の背に孫が乗り
捨てられる母いそいそと切符買う

有働芳仙

青雲も都会の波に寄り切られ

孫や子の世話になる身の情けなさ
感情の起伏マイクへもろに出る
政治家が政治屋になる金に負け
番犬もドッグフードに負けちまい

児島与呂志

点滴の支えで九月の風に会う
ありふれた愚痴も聞いている小商人
君のことふと思いつく計報の日
あの人もこの人も逝く道しるべ
大胆な言葉も知ってる小市民

小西雄々

追いかえず魔へ火の鳥を千羽折る
風抱いて母に言えない人に逢う
懐にいつしか鬼が棲みついた
半額の眼鏡ひずんだ世相見る
落武者の足跡 塾の方へ向く

金井文秋

挑戦することに意義あり呆け防止
やっぱり齢と感じている八十路
好きなように生きてはるなと他人は見る
贈りものにもおしゃれさせます包装紙
ストレスが朝の喫茶で溶けて行く

八木千代

逢うていられるのか天の川ゆらぐ
逢うまえのはなやぎ萩も白菊も
鶴を折れば逢えぬ人にもすぐ逢える
出逢いもう祈りの匂漂わす
あと何度逢えよう心尽して逢う

正本水客

ゆきずりの人と視線があっただけ
後味が悪いとぜいたくな事を言う
先頭に立てばせんとうの風があり
いつも陽があたるとはかぎらない
まっすぐな道まっすぐな人に会う

工藤甲吉

国会が昼のドラマの邪魔をする
生きてるといい婆ちゃんて居れたのに
八十となり七人の敵も無し
死んだ人が生きてて夢は面白く
こっそりと男の薬買ってくる

辻白溪子

脱いでからやっと人気が出たスター
何言っているのか知れぬほどに酔う
公家の出の娘が免許持っている
応接間ひっそり留守をする金魚
見晴らしの視野が絵になる松の列

恒松町紅

年金の範囲で幸せごっこする
自負心があるから強いボールペン
老妻の物干し竿は過労死だ
同い年が逝くと長生きした気分
食い意地が達者で今朝も胃腸薬

遠山可住

よもぎ干すいつか誰かにあげたくて
いつの間か燕に味方してしまふ
神棚が埃かぶっている落ち目
金持ちの人生観はもう追わぬ
年寄りが居なくて草がよく伸びる

松川杜的

四面楚歌 水平線の唯青く
行く先は如何あろうとも髪洗う
年寄りには嫌か犬も従いて来ず
父と子の対話 潮風あつたかい
雑音を聞く補聴器ならかけません

小林由多香

一期一会逢いたい人が一人いる
熱帯夜ビールぐらいで寝つかれぬ
太陽の笑顔が憎い水不足
飯よりも酒米だけが気にかかり
友情を頼るセールスでは伸びぬ

藤井明朗

先生の米寿えびずさんに似て長寿（祝米寿紫香先生）

酔いざめの水おぼろげに悔いのこる

季は巡る諦めきれぬひと憶う

情熱を秘める八十路に夢がある

世界情勢どう変ろうと詩に生く

波多野五楽庵

無影灯無明の旅をしたらしい

解らない言葉を禅と言うのです

思い出をうつすにごる水鏡

おおらかに癌と共存しています

醒めた目で星を見ていただけなのに

水粉千翁

二人だけずぶ濡れという雨が好き

花道がつづく二人で草を抜き

川流れ山に抱かれてわらべ唄

抱きました歩かせました子を信じ

おわかりか舌をころがす酔いごこち

奥谷弘朗

能よりも才に長けてるように見え

ふところが温いと言うことまでちがい

順番に文句があつて和がくずれ

笑顔にも同志の処世術がある

時の顔などとおだてる手を使い

野田素身郎

母のない児と父のない児が手をつなぎ

健康管理トイレの頻度まで数え

喫茶店で読むことにした週刊誌

五十回忌わが家の戦後処理終わる

夏が来た孫に泳ぎを教えよう

久家代仕男

手ばなしという喜びは未だ知らず

気がかりがひとつ笑顔が戻らない

そう言えば川にめだかも見なくなり

荒菰に梅が塩吹く土用干し

過保護には草魂という措辞が消え

野村太茂津

屋上で雌雄を決めた友と遭う

秋はそこまで絵描きの好きな彩がある

住所不定無職で夏のシャツのまま

酸いも甘いも鈍い感度が戻らない

点鐘は響かず木霊戻らない

黒川紫香

秋ですぬ虫聞く女と茶を啜る

秋の花ですよと白い手で摘まれ

栗を焼く匂がつづく滝の道

おばさんが島の波止場で蟹を売る

変わってまへんなあと女の賞め言葉

ひと夏を飛んでとんぼの夢果てる
カッタカッタ汗の演技まだ続く
岸をゆく娘の流灯おくれがち
精霊の舟流れゆく月あかり
仏の灯ちりちり燃えて虫の闇

藤村 女
西田柳宏子

安らかな老妻の寢息に今日終る
谷底へ落されて知る父の愛
手伝いをさせろと孫が駄々をこね
愚妻にはいつも感謝をしています
張り切った若さブレーキ遅すぎる

高杉鬼遊

アルミ貨が生きるひとりの食事代
スーパリーの袋おとこは絵にならぬ
炊事洗濯おんなに負けたなと思ひ
税務署の冷房を出る炎天下
いっぴきの金魚と老いの生き比べ

小出智子

墓を買ってよかったという話
泳げない河 故里を横切つて
空き缶の一つぐらいが守られず
赤ちゃんの泣いているのも懐かしく
うたた寝をしたひとときを惜しむなり

川柳塔鹿野みか月大会

と き 11月20日(日)午前9時開場
ところ 鹿野町営国民宿舎 山紫苑
(JR浜村駅からバス15分)

兼題と選者(各題2句・午前11時締切)

「簡単」	橘高薫風選
「木」	寺尾俊平選
「占う」	森中恵美子選
「畳」	浜野奇童選
「劇」	内田久枝選
「輝く」	政岡日枝子選
「動く」	江原とみお選
「絵」	野沢大漁選

会費 2000円(軽食・発表誌呈)

投句 11月10日までに投句料1000円を添えて下記へ

〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野
1279 中原諷人方
川柳塔鹿野みか月事務局

第21回 堺まつり協賛

堺市民川柳大会

と き 10月8日(土)午前11時開場
ところ サンスケア堺2F
(JR堺市駅下車北西200m)

兼題と選者(各題2句)

「日」	木本朱夏選
「月」	池森子選
「火」	牛尾緑良選
「水」	長江時子選
「木」	神江平狂虎選
「金」	西川景子選
「土」	河内天笑選

◎席題なし・出句締切午後零時半

会費 2000円(昼食・記念品・作品集呈)

連絡先 〒593 堺市堀上緑町2丁16-3
河内天笑

主催 堺川柳会

川柳太平記 (196)

川柳の群像

伊東静夢

東野 大八

「一般論によると、俳句は自然情緒であり、川柳は人間情緒とされている。これを分析すると、俳句はロマンチズム文芸であり、川柳はリアリズム文芸として大別できる。併し人間情緒には、白紙の表裏の如く、ロマンとリアルは棲息している。

従って川柳におけるロマンチズム追求や抒情追求には、川柳の本質であるリアリズムを喪失しないことが肝要である。

これを要約すると、「リアリティーを失わないロマンチズム」と表明される。

現代川柳には現実には、このセオリーに沿って只今展開中であり、このことが今後の川柳文芸の発展を促進するものと確信する。リアリズム文芸の素材になる喜怒哀楽はもとより、生・愛・憎・悲・怨・美・醜・欲・情を基盤

にして、広く深く吾々人間感覚に浸透して、川柳文芸をより高度に多彩なものにしている。従って各柳社の代表選者の責任は重大な立場にたち、かつ先覚の明を要求されることになろうし、川柳論旨も自由を求めて卓抜な様相を示してくれるであらう」(伊東静夢『燎原』昭和57年刊第二集序文から)

「伊藤静夢の夢の字は、昭和八年に番傘副主幹の小田夢路氏から貰ったのだそうです。

川柳は宗教である」という信念の人、小田夢路に始まり、リアリズムの岡橋宜介師と、若き日の静夢は、熱心に京都の平安句会まで足を運んだとききます。

そして「川柳は人間である」に心づたれて病床の梶元紋太師を見舞っています。第一回の紋太賞(昭48)を受賞後、「ふあうすと」の

同人となり、北川絢一朗さんが『新京都社』を設立したと知ると、すぐに新京都社同人にも参加して親交を深めていきます。

静夢川柳は留まることなく、『せんば』(琥珀集)から『ふあうすと』(明鏡府)や『川柳新京都』まで多くの川柳作家を動かし、絶えず川柳作家の発掘につとめた情熱は、生れ育った尼崎の風土によく馴染み、リアリティーな句をよく作って、尼崎川柳同好会の指導に当たっていました」(『川柳新京都』森田栄一悼文)

「静夢さんは、私の大先輩で、昭和八年に川柳をはじめ、職場の小田夢路を師と仰ぎ、岡橋宜介師により開眼、『せんば』同人になられ、毎月欠かさず師と同行して、京都平安川柳へ顔を出しておられた。(中略)ふあうすとと、新京都同人となり、そのエネルギーシユな活動は止むことなく、せんば琥珀集から、ふ誌明鏡府を手がけ、絶えず新しい句の発掘につとめたのです。

昭和43年6月、句集『燎原』を発行、このときは十一名だったが、第二集の昭和57年6月刊行の折は四十名となりました。参加者は伊東静夢の魅力にひかれ、自由を求めて集まってきた。静夢さんの川柳に対する執念と努力の結実は、実に『燎原』ではないでしょう

か。自分のための川柳をおしげもなく外へは
けていった功績は、現代川柳の中に、一点の
光となって残るでしょう」（『ふあうすと』森
田栄一悼文）

本名伊東敏夫、大正四年三月五日尼崎市生
れ。自動車の金型製作所経営。

「私が静夢さんを知ったのは昭和43年頃で
第一句集『燎原』が十一人の作家で刊行され
た折で、ここで時実新子氏がつぎの静夢作品
を批評されている。

剃刀のすゝしさを信じない

自画像を破れば墓が立っている

死刑執行たしかに今日の影を見る

静夢作品に底流する気品と重厚のロマン。

加えて私は火の精神を見る。（中略）昭和四
十六年七月、いづみ、せんば、川柳春秋社合
同吟行と、姫路書写山・田教会会館で一泊し
たことがある。この時の21名の交歓会は実に
懐かしい。（中略）

『燎原』第二集の静夢作品は

まばろしの兵団が征くいわし雲

肉切包丁曇って誰が逝くのかな

担がれて行く猪の爪天を指す

ひき逃げを月がどどん追いかける

雑木林の雑木になっていく女

この序文で、この人はまた、

「川柳がリアリズムを本質とした文芸であ
る限り、川柳文芸の発展を、この言葉により
期待したい」と重ねて川柳リアリズムをくり
返している。（『ふあうすと』鳥本泰）

筆者と静夢の出会い、昭和44年7月、兵

庫県民会館で開かれた「ふあうすと四十周年

記念大会」の折、大阪の宿で石原青竜刀と一

泊した折のことだ。朝出発の折、静夢が訪れ、

地元名物のカマボコを頂戴した後、青竜刀が

お世辞のつもりか、

「せんば」に連載している『響きあるも

の』の川柳作家紹介の人物評は、まことにう

がち得て妙と感銘している」

との一言に対し、この相手は相好をくずし、

「あれは書くのに苦労してるんです。あま

り書くのは、貴方たちほど得手ではないんで

す。一生懸命です」

と洩らした一言を今も忘れない。

静夢は、腎炎から入退院をつづけ、人工透

析十二年余の闘病生活をつづけ、平成五年十

月二十日死去した。享年七十九。

「この闘病の十二年間、川柳を作りつづけ

ていました。清子奥様の愛と川柳への執念は

最後まで川柳を放しませんでした。私はこの

眼で二人の愛にふれ、川柳家としての偉大な

静夢イズムを知りました。静夢さんは、奥

様にもいつも感謝の念でいっぱいでした。死期
を前に、ユーモアの中に愛のある言葉を聞き
ました。

「俺が先に逝ってお前の席も取っておく
よ」

お互いに最後まで美しい思いやり、深い

愛情が支えてきたのです。週三回の透析から

二回に、そして一回も出来ない状態にまで、

その衰弱を目の当りにして励ましの声をかけ

ましたが、やがて透析も点滴もなく、酸素吸

入だけになりました。（中略）

私は静夢さんの

春の雲楽器を抱いて降りてくる

に惚れてこの人を好きになり、気安く静夢さ

んと呼んで親しんで参りましたが、もつこれ

からはそれも言えず淋しいです。（『川柳新京

都』森田栄一悼文）

「昭和20年結婚しまして、お酒の好きな人

でしたが、川柳を生涯の楽しみとして、私に

はよい思い出しが残っていません。子供に恵

まれなかったため、二人で頑張りました。毎

日今だに涙する日々が続いております」（伊東

清子筆者宛書簡）

透析や走り続ける古時計

虹はこわれ古時計は時を止めた

静夢

▼次号は「浜 夢助」

柳籠裏三篇研究 (二十三丁)

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人
八木敬一・七久保博・岩田秀行
紀内恒久・西原 亮

鈴木倉之助 故岡田 甫

285 猫と寝て居てあた打をはやく知り 玉章

瀬川||猫は金猫・銀猫と呼ばれた私娼。ここ
では回向院土手の色茶屋に出入したもの。こ
の回向院土手のすぐ近くに、吉良上野介の屋
敷があった。

意は、回向院土手の色茶屋で、猫(私娼)
をだいてねていた連中は、赤穂浪士の仇討ち
を他より早く知ったろうと言うのである。

元禄時代にはまだ金猫・銀猫は存在してい
なかつたから想像の句。

鈴木||賛。当時の回向院は東に面していたが
今は北に面している。

岡田||賛。

286 御太刀一腰並に干鱈なり さ、波

瀬川||不明。御祝儀物かなんかの取り合せの
ようだが、分らない。

佐藤||五月節句の贈物を、目録にした趣向。

弁慶とあてたに干だらくりやがり 三〇₂₉
鉄砲の干魚かぶとにそへて遣り 三二₂

八木||佐藤説に賛。將軍家へ献上の目録に擬
す、といったところであらう。

鈴木||同。五月の節句になぜ干鱈を贈ったの
か知りたいと思い、いろいろ調べたが、文献
見当たらず。

本句先行句に、

御太刀一ちやうに干だらハ五枚なり

天元仁₂

「御太刀」は菖蒲刀です。
岡田||同。

287 女護の嶋の幕で生嶋はたき 玉簾

瀬川||女護の嶋は大奥の意。「はたき」には
不評判の意あり。

例の絵島生島の件。お茶屋なんかでこそ
こそ会っているうちはよかつたが、生島新五
郎が人目をかすめて、大奥に忍びこんでから
は、あまりのことに不評判になった、くらしい
の意を言ったものだろう。

青木||絵島生島説賛。「生島は抱き」ではな
からうか。芝居に見立てた句。

佐藤||賛。ただし「はたく」はしくじるこ
と、失敗するの意であり、芝居がかりの句で
あるから、この幕で大きくじりをやらかした
と、役者の演技にかこつけて表現した句案。

岩田||佐藤説賛。但し「はたく」は、
順の舞謡ハいつちはたきなり 四三₈

からして、「うつけのこない」「不評判の」「失
敗する」といったような意味でよからうと思
う。芝居用語か。

鈴木||同。小学館版『江戸生艶気樺焼』浜田
義一郎先生、頭註にも「ひどく失敗しそつな」
芝居とあり。岡田||同。

288 塩からひ魚ミセを出す村の市 五扇

瀬川 村の市の魚店は、まだ海からとれたばかりの塩からひのを並べているくらいで、都会人からみた軽蔑の念が含まれているように思う。

青木 此の村は海辺から遠い村で、そのため日時に耐えるよう十分に塩をした魚を物日縁日に商っている状態ではなからうか。鮮度が落ちているのを軽蔑しているのでしょう。

八木 となたてだから塩からいというのは変で、青木氏のように、悪くならないように塩をした魚を売っているというのである。

岩田 同じく青木説賛。ただし「軽蔑」というはとらない。いかにも田舎らしい在り方として具象化して見せたまでである。

鈴木・岡田 同。

289 石臼も色身でまわる浅草寺 五清

瀬川 浅草のふしみせ（五倍子店）の看板娘をよんだ句。石臼は五倍子を挽くためのもの。売り物のふしそのものより、看板娘を目当てに浅黄裏がうつわいていた五倍子店。石臼を挽く身のこなしもここに色っぽいといふのである。

青木 賛。柳雨著「川柳から見た上野と浅草」には主題句を「五倍子を挽くに用いる石臼が隣から隣へ転々借用せらるる事であらう」とされているが、礎稿の方が適解と思われます。

佐藤 賛。「色身で廻る」は礎稿説通りと思う。

岩田 賛。

石うすにこひ付て居る浅黄うら 拾二27

鈴木・岡田 同。

290 旅立ちのころうは川と女房也 鬼蝶

瀬川 旅立つとき、まず気にかかるのは、川止めなどにあつたらどうしよう、ということと、自分の留守中、女房が間男などひきこむんじやなからうか—との二つだといふのである。これではなかなか旅立てそつにもない。

青木 賛。

旅立ちには川と女房を苦勞がり 安五梅4

旅見舞女房をやる実な人 第四3

鈴木・岡田 同。

291 ありやこりやなものを始皇と武田埋メ 狐声

瀬川 ありやこりやは、俗にあべこべという意。反対の意。始皇帝は儒者を土中に埋め、武田信虎（信玄の父）は、盲人を無用者扱い

にして穴埋めにして殺したと言われる。始皇帝は目明きを、武田は盲人を穴埋めにしたということ。

あいたのとないのを和漢で埋めるなり 五七2

青木 賛。信虎でなくて信玄であらう。

信玄はあんまりむごい殺しやう 天三梅2

杖くるみ焼けと信玄下知をなし 明四智7

岡田 盲人を生埋めにしたのは、盲人に問者（スパイ）が多いためと聞いている。

川柳塔唐津支部

12周年記念川柳大会

とき 11月2日（水）午前11時半締切

ところ 唐津シティーホテル（JR唐津）

兼題と選者（各題2句）

「走る」	田口 虹汀 選
「無口」	久保 正剣 選
「メモ」	仁部 四郎 選
「太鼓」	古川 静枝 選
「布団」	橘高 薫風 選
「青い」	板尾 岳人 選
「声」	林 荒介 選

会費 2000円

秀句鑑賞

同人吟 宮口笛生

8月号から

蟬しぐれ記憶の底にある軍歌

田中正坊

川柳作句を始めてから四十七年になる。よくも続いたと思う反面、最近、作句の苦しさや頻繁な句会、また、川柳の友との付き合い等々、なんでもこんなしんどい事をすると思う時が多々ある。月六、七回、近郊の句会に足を運び、惚け防止どころか、惚けてる間がない。

息子がいないので、機械化した農作業も頑張っている。町内の仕事も色々役を持たされ本当に暇がない。農作業も最近しんどいなと思う時が多くなった。来年は古希、昔ならとうに隠居の身を現役として頑張っている。

だが今、私から仕事も川柳を取ったら急にあの世に行くかも知れない。すると今のままが良いのかも。苦しいが川柳は楽しい。いくらしんどくても、川柳は止められない。川柳の友達は良い人ばかりと、妻も川柳の良さを認めている。胃を切ったが、酒だけは美味しく飲める。うまい酒で元気を保っている。川柳をしていたからこそ、中国も台湾も行ってきた。吟行であつちこつちも行ける。体の続く限り頑張る他はない。

今年もまた八月がやって来た。早いもので戦後五十年になろうとしている。八月になるとついつい、戦時中の記憶が蘇ってくる。悪夢であれなんであれ、戦争体験のある者の複雑な気持である。

Vサインそんなに軽いものじゃない

玉置重人

Vサインの嬉しさ、そこには苦しみの連続があつての勝利である。簡単にVは取れるものではない。努力の賜物に他ならない。ずつしりとした重みを軽く読みこなされている。

死んでも御恩忘れませんとそれつきり

石川侃流洞

死んでも忘れませんというからには、相当な恩であつたと思われる。それがどうか、それつきりとは、あまりにも得手勝手過ぎないか。道義を疑いたくなる。世の中にはいろんな人もいる。でも、これではあまりにも薄情過ぎますね。

真実の一つを消した多数決

高橋 千万子

多数決という程不公平はないと、私はいつも思っている。この句のように、真実も多数決には勝てなかったというのである。このようないふ事への多数決はひど過ぎると思う。うまくまとめられている。

よく聞くと神は二つの耳を付け

河井庸佑

人間の体は、神からの授かりものと言われる。しっかりと聞いて立派な人になれとおぼし召しか。二つの耳を付けが面白い。ユーモアもあり、表現の妙をいただく。

君子危うきに近寄らず皆他人

永田俊子

ほんとうの勇氣のある人間は少ない。かなしい事だが自己防衛になりがちで、他人事ともなれば、見て見ぬ振りをする人の弱さを暴露している。

いい噂したい座ぶとん譲り合う

林野 甕光

いい噂がいいですね。人はともかく寄ると悪い噂をしたがるもの。噂の輪を大きくして喜んでいる。この句どんな良い噂だろうか。座ぶとん譲り合うが句を盛り上げている。いい噂をばらまいて楽しんでいただきたい。

交番へ届けるほどの金じゃない

新家 完司

このくらい金を届けても、警察も自分も手続きにしんどいだけ。届けるところ。もらったところ。軽いユーモアもあり、すらすらとまじめに上げている。

ふところの事情もあつて休肝日

池 永 正 雄

持ち合せの少ない財布の中味は言わず、「休肝日」にして逃げてゐる頭の回転の良さに感服しました。本人にはさびしいことだが、楽しませてくれる句だと思ふ。休肝日が良く効いている。

長いこと人間やつて手抜きする

宮 西 弥 生

面白い句ですね。まあ長い一生、いろいろな事もある。こうすれば良いとわかつていながら、なかなかできないはずは人間が多い。

「手抜きする」にこの句の命がある。

式場へ着くまで暗記した祝辞

榎 山 隆

結婚式だろうと思ふ。誰でも何回か経験されておられることと思ふ。書いた文章を読んでいる様にならない。口下手でも、それなりに一生懸命に暗記している苦勞を、式場へ着くまでとうまく表現している。

いまさらに何を焦ろう夫婦箸

堀 江 芳 子

好き好かれ、ここまで来てしまった夫婦。長い年月にはいろいろな事があつた。もう先が見えて来て、何を焦ることがあろう。歳老いて仲の良い夫婦をかし出してゐると思ふ。夫婦箸がうまく決めている。

時計進んでいると五分を引き止める

榎 本 吐 来

時計が進んでいるとは、うまい見付けたと思ふ。長くは言わないあと五分だけ。酒好きの吐来さんうまく引き止めている。うなずける句だと思ふ。

じいちゃんのおみくじ恋愛吉と出る

松 本 忠 三

思わず吹き出したくなる。ユーモアたっぷりて面白いですね。いつまでも笑い声が聞こえるようです。

政界を一度虫干ししておくれ

両 川 洋 々

自民党と社会党の連立内閣。油と水の両党で、果して立派な政治ができるのだろうか。思いもよらぬことである。わが党かわいさだけで、国民のための政治が疑われる。一時しのぎの短命内閣。一日も早く解散総選挙で、国民の審判を仰いでほしいものである。

小説みたいな事を言うても始まらぬ

土 橋 はるお

現実には小説のようなわけには行かない。わかり切っているながら、人間は欲望を願ひ生きている。なるようにしかならない人生。小説のめでたしめでたしの欲は忘れよう。

匿名の善意恥ずかしがり屋だな

安 平 次 弘 道

匿名は人間の美学かも知れないが、善意には恥ずかしがることなく、正々堂々と名乗ったらと思ふがどうだろう。恥ずかしがり屋がうまく穿っている。

芯とがらせて書きたいことがあるのです

奥 田 みつ子

何を書くかと言うのかは知らないが、芯をとがらすという言葉の奥底に、女のおそろしい執念がにじみ出ているように思ふ。かつかすると芯が折れますよ。

無視されることがいちばんこたえます

三 宅 保 州

なんでもない句だが、無視という刃で心臓をえぐり取られる思いが秘められている。人間もみんなから無視されるようになればおしまひである。そんなさけない人間にはなりたくないものである。

以上、私好みに鑑賞させていただきました。



黒川紫香選

尼崎市 田 辺 鹿 太

香川県 萬 沢 翠

号砲が鳴ると泣きだす女の児
迷彩のキリンの首は人見知り
人情に溶け込む路地の白い花
トータルをすると妻には齒が立たぬ
身の上を女が語るとき詩人

宝塚市 永 田 暁 風

梅雨のバス乗り継ぎ沙羅に逢うために
老いてなお笑う日がある姉おとうと
待ち切れなくて眠ってしまったのは時計
回遊魚のごとく特売場を巡る
今のわたしに浮かぶは寒い死後の景

名古屋市 藤 井 高 子

何という花か画廊も秋のいろ
急転直下 風も味方をするドラマ
自分史の中で無口も能弁に
太郎冠者も うたた寝してる無風帯
手拍子につられて足が浮いている

お地藏さまも寝不足らしい熱帯夜
今日もあしたも約束があるカレンダー
花市で会う人みんなきれいだな
蛇いちごそんなに熟れてどうするの
人妻と話す男の別の顔

和歌山県 杉 山 精 子

胸像に学ぶ開拓者の涙
肩ふれて雨のムードに酔う歩道
集団の声に勝てない貯金箱
いつかいつか忘れてしまうこの恋も
反旗持つ黒子に幕を下ろされる

摂津市 木 下 道 子

休刊日ゆっくり朝が動き出す
医者軒借りて燕は子を育て
蟬の羽化真夏の夜の無言劇
脱ぎ捨てた殻に未練は持たぬ蟬
転がしておくには惜しい古いつば

広島市 流 奈美子

雲は流れて笛の音色が澄んでくる
間伸びした一句浮かべている湯船
旗色を読む議事堂の波高し
美しいなどとやさしい偽善だな
風は饒舌 照る日曇る日多彩なり

富山市 島 ひかる

鮎釣りに行った男が帰らない
万華鏡覗く仲間がふえてゆく
満月の丸さへ祈り深くなる
干からびた蛙に水を含ませる
娘の部屋に小鳥の居ないかがある

富山県 高 畠 五月

母の里 一本杉が消えていた
ボーンス日 妻が聖女に早がわり
飛行雲 素直になれと消えてゆく
退院の許可はまだ出ず千羽鶴
過労死は恥だと思ふ昼寝する

田辺市 大 峠 可 動

ああ日本 風に凭れて尾を垂れて
炎天下蟻の足跡みな踊り
自己過信の中で風になっている
ああ 女風になるとき自惚れる
夕日鮮烈 母のぬくみを想い出す

熊本県 高 野 宵 草

故郷の荷の紐のかたさは老父元氣
揚羽かも知れない毛虫殺さずに
僕なりのグルメ挽ぎたてトマト食う
ふるさとの蛇口ひとあじ違う水
スーパ―で試食の時は美味かった

熊本市 宇 野 照 代

孝行をするまで生きてとよろこばせ
再会を約した友の計が届く
まだ明日があると思つていた油断
縁側で孫と西瓜の種飛ばす
空耳と思いたくない亡母の声

熊本県 大 川 幸 子

底のない袋へ満足知らぬ欲
いい事が筈で返りそな予感
からませた小指の記憶よみがえる
見逃がせぬ話へ又もだまされる
玉の輿一寸見染めただけの事

今治市 塩 路 よしみ

貧しいが洗濯好きの妻がいる
漁火がきれいなどとは第三者
てにをはの一字が足らぬ倦怠期
事なかれ主義で花よりよいだんご
満ち足りて夫婦の鈴がひびき合う

尼崎市 森 安 夢之助

発起して四国遍路の靴をはく
棟梁の自慢 欄間に謎がある
肩書が消えると猫も寄りつかぬ
人情がからむと崩れだす背骨
背中から押しよせて来る老いの風

静岡市 沢 田 き ん

なる程と語源を知った薬指
指切りを忘れるほどの軽い指
辞書にない知識に揺れる年の功
元気ですされど薬は飲んでいる
人並を越せば他人の眼が光る

旭川市 朝 倉 大 柏

挫折して自分の足が見えて来る
新語辞典繰って革命試みる
還暦を越え父らしくもてなされ
風に乗る切符持たして子を送る
一行を削ると本音顔を出す

今治市 渡 辺 南 奉

寝苦しいのは僕だけでない熱帯夜
方言も水も赴任地あたたかい
悪友の方が一肌脱いでくれ
友達のような夫婦でうらやまれ
また猫を拾って帰るお人好し

尼崎市 尾 宮 弘 治

血管が細いと愚痴る注射針
草餅が届いて義姉に電話する
母の日に街の嫁から花が来る
ライバルの頃の過労を語りあう

尼崎市 的 場 十 四 郎

世話好きな妻で朝から飛び回る
風の子が広場に來ない過疎の暮れ
言い過ぎて雨はななめに降りしきる
記念樹もドラマと共に喜寿となり

豊中市 石 川 勝

言い勝って妻の兵糧攻めに合う
パチンコの背の淋しい男たち
一度だけ本気で泣いたチャップリン
人は無力で子無し夫婦の月参り

久留米市 鶴 久 百 万 両

俺もエース火を噴く打線食い止める
純愛をボソボソ語る午後のモカ
通勤車で読む朝刊はAと決め
白寿までは生きろと無茶を魔女が言う

尼崎市 野 瀬 昌 子

やる気などないと結構やってる
若き日の悔い眠らせる古手帳
赤皮の手帳少女に夢がある
昼間の喧嘩おもい出してる子の寝言

尼崎市 山本すみ

わだかまり解けて眠りが深くなる

電話ベル湯船の中で聞いている

家中の風入れ替えて梅雨晴間

母の日のカーネーションがよく香る

米子市 足立由美子

子育てに神話も時に借りてくる

逢って来たらしい靴音弾んでる

枯れぬよう私と鉢に水をやる

風鈴をいくつも吊るし暑気払い

藤井寺市 高田美代子

祈り続けて今年も八月十五日

反対の立ち場も思う苦勞人

昼花火やたら大きな音がする

母の残した浴衣と下駄で御堂筋

熊本県 岩切康子

待ち合せ早く来たのに場所違い

父庇う息子はどこか可愛らし

言わぬから探りたくなる強い意地

賞められた犬は尻尾を振って寄る

今治市 村上久美子

上げ底の箱に詰まっている虚栄

地獄極楽みんなこの世にセツトされ

おとなりのごみ箱が好きグルメ猫

進退に迷えば風が押してくれ

西宮市 山本義子

紫陽花を寂しい花ときめないで

うしろ見るひまなく生きて元氣です

暑い夜 踏切のかね耳につく

冷や奴これが馳走と客は言い

西宮市 亀岡哲子

山の湯の静かに溢れ河鹿鳴く

すつきりと暑中見舞に一句あり

草萌えて野は自営隊演習場

チクタクチクタク月下美人の開く夜

西宮市 牧瀨富喜子

ぎりぎりの日付け欲しくて早い朝

触れ太鼓うわさに尾ひれ付いてくる

通り雨パール片方取れたまき

結局は鬼にもなれぬ傍觀者

西宮市 古谷ひろ子

頑張れと人ごとだから軽く言う

怖いほど嫁と話が弾みます

独りには隣の喧嘩ねたましい

雑居ビルの屋上にある街の森

河内長野市 大西文次

字が下手で誰のノートか直ぐ解る

階段の手摺転んでから付ける

姉さんの縁談を聞く忍び足

軽井沢でするバカンスのアルバイト

羽曳野市 芦田 絢子

万灯籠 妻と言う日に還りたい

打ち水に涼を返さぬアスファルト

缶ビールぐらいで本音吐けますか

クーラーをきかせて暑中見舞書く

枚方市 前 ともつ

教会を散歩コースに入れている

浪曲が鳴ると猫まで逃げていく

うれしくて犬かきもする風呂の中

去り際に本音一言置いて行く

河内長野市 水谷 正子

向日葵もへんくつが居て余所見する

する事が何もないのでしんどなる

ルール通り朝顔の蔓巻いている

留守に来て草など引いて母は待ち

松江市 松浦 登志子

食品の売場で私蟹歩き

付き添いを断った日の夜の長さ

家守る父の頭がうすくなる

活躍の女性のニュース勇気わく

和泉市 加山 よしお

ふるさとの訛りで祝う披露宴

閑静なところですねと田舎道

信心と言えないほどの手を合わせる

月詣り観音さまは亡母に似る

長岡京市 山田 葉子

留守電に話したくない日曜日

許せないわたしも嫌いになってゆく

逃げ道をふさぐと知恵が湧いてくる

足踏みをしたまま出ないその一歩

大阪市 江城 修史

一期一会 握手に残る手の温み

さわやかに老いたし命ある限り

くせのある後ろ姿の友も老け

悔いひとつ子等と旅したことがない

高槻市 江原 秀夫

古希を過ぎいよいよきざなベレー帽

黒タイの出番が続く炎天下

あばたもえくぼ自社連立の落し穴

自分の事だけで暮れてく梅雨のうつ

出雲市 園山 かおる

まだ欲があるので荷車引いている

老農の粘り腰なら丸くなる

言いやすいことから先に言っておく

泥を吐くシジミお前も愚痴言うか

鳥取県 奥谷 彩子

うれしくて弾む大声風に乗せ

磯笛と張り合う詩吟波に乗せ

ちぎり絵に心の鬱を張りつける

還暦を過ぎなお人の目を気にしてる

大阪市 勢理客 トミ子

お若いと誉められたのは夏帽子
大ジョッキいっきに遠花火
譲られた席で素直になつてゆく
ゆらゆらり風鈴売りと秋の橋

今治市 越智青園

水打ったくらいで暑さ胡魔化せん
ゴキブリもところとところと熱帯夜
小便小僧のしぶきが散歩の顔洗う
読みあきたページを風が読みに来る

香川県 辻上よしみ

口下手で不器用だけど愛らしい
バーゲンは女挑発させるもの
下手な嘘知つて聞くのも辛いもの
ほうほうへ顔出し暇が無いと言う

香川県 堤くに子

晴れた日もどしゃ降りもある倦怠期
衣替える度ボタン位置を変え
間の抜けたところもあつて可愛い娘
座り直してからの話が長うなり

和歌山市 古久保和子

無人販売トマトの匂するトマト
炎天に郵便ポスト燃えそうだ
いい知恵が出そう散髪した頭
口下手でお茶飲むだけの相手する

寝屋川市 富山ルイ子

異次元からのモールス信号待つ
次々と思案に余る花の乱
卒寿過ぎ母は気ままに生き給う
お守りを健康祈り隠岐土産

寝屋川市 後藤黎之助

飽きたとは罰があたるぞ二人旅
愚痴ひとつ言わず紫陽花色をかせ
還暦の好きなゴルフに出るパワー
子の望み親の願いと交差せず

大阪市 川原章久

通天閣下に馴染みのそば処
パソコンの孫を連れ出す夏の川
テンポ良くティッシュを配るバイトの娘
待つてます店開けましたと女文字

島根県 槻谷仲子

バスの旅お喋り続く温泉場
並の人どうせ手の出ぬ非売品
茶飯事を友と長長立話
換気扇 好きな煙草も台所

鳥取県 岩崎みさ江

青空の下で愚痴など話せない
積乱雲はげしく泣いた日は昔
しあわせにしがみつから逃げられる
道草もさせてもらえぬランドセル

島根県 菅 田 かつ子

愛らしい顔してトマト熟れてきた

大の字の夫へ障子そつと閉め

朝顔のほっぺへきらり玉の露

かぶと虫その雄々しさに孫むちゅう

岡山県 大石 あすなろ

岩田帯しめて嫁つこよく動く

聞き上手 味方の顔で聞いている

ネジ巻いて進むしかない父の貨車

大器晩成などと気休め言っている

芦別市 斎 藤 房 子

旅はるか一会の風にたわむれて

一握の砂に火を抱くいのち抱く

過去の愚を溶かすクレパス買い足して

夏の彩拾いあつめて壺にさす

愛媛県 久 保 良 子

待つて待つてやつと来たのが不採用

さみしいとつい足が向く猫の墓

味音痴の夫の好きな胡瓜もみ

ユーピン屋が来るだけの道一軒家

貝塚市 池 田 寿美子

鉛筆の先からドラマ創られる

坂越える手頃な靴を探してる

パラソルをくるり回して友を待つ

唐蓮の一輪 薔 静かなり(唐招提寺)

福岡市 井 崎 ミサ子

名と顔が一致しないよこの不思議

娘の自立待つ楽しみと待つ不安

知らんぷり出来ずに顔色変えてます

まずい事やると口笛吹いて居る

酒田市 永 澤 裕 子

試練まだ足りぬと神の向い風

どの土地に住んでも嫌な人が居る

人間を値踏みされてる絵画展

一目を置かれて寒い上の席

泉佐野市 河原崎 礼 子

ゆっくりとかなで今日から三分粥

真夜中の看護婦の手があたたかい

ニンニクにファイトをひとつもらう夏

言い訳を考えながら終電車

尼崎市 河 津 正 治

過労死とむごい言葉で葬られ

貯金箱潮の満干の早いこと

コーヒーカープ湯気の向うの瞳が涼し

補聴器がお国訛りを聞きもらす

尼崎市 湊 修 水

ストレスが溜り自分を見失う

浅い夢ねがえりばかり熱帯夜

池の鯉 宇宙メダカに嫉妬する

デメリット昔の部下がよりつかぬ

茨木市 島 元 ふ み

今更に老いたと思う虹の色

少年の面影残す老いの背

喧騒の街に刺激を受けに出る

兵庫県 森 脇 和 子

頑張れと肩叩き合う生き残り

二階まで笑いが抜ける女連れ

それなりの伴せ小さな皿に盛る

西宮市 菊 池 トミエ

我が影が背筋伸ばせと叱咤する

慕鳴いて不意に何かを忘れた

建売の現地で旗が呼んでいる

高槻市 庄 野 澄 子

何十万回皿出し入れし母が逝く

虹の橋とつくに渡り終えている

応接セット替えて水割よく似合う

吹田市 馬 淵 光 子

気休めの説教相手に通じない

エリートめだか宇宙で御出産

受験生吞気で親の胃が痛む

寝屋川市 宮 崎 菜 月

旅に出て偶然のドラマあってよし

元気で言えばあの方ほっとする

拝観料寺の傷みを見てまわり

兵庫県 円 増 純 子

目鼻ない紙人形にある表情

化けの皮はがす尻尾をつかんでる

体形をごまかしきれぬ夏衣装

大宮市 新 井 圭 二

図書館のベストセラーはスポーツ紙

良いところは俺に似たなと悦に入る

大型の休みを社の指示で取る

宿毛市 岡 村 千 鳥

ゼロからの旅立ち妻が舵を取る

化粧のりいいね鏡に茶化される

いざのときやはり女の底力

寝屋川市 井 上 す み れ

私のこと老母と書く子も六十歳

朝刊を読む順番が未だこない

それぞれの距離が決まって皆平和

八尾市 生 嶋 ま す み

遊びすぎ晩のおかずが決まらない

思いつきの写真を探す雨の午後

炊事する夫が派手に使う水

枚方市 森 本 節 子

救急車のサイレンまともに窓をうつ

孫のいうままになつてゐるわが娘

茫洋とした性格にひかれてる

眠らせたその子を起こす月の笛
西宮市 岡 本 道 子

熱つづく夾竹桃の赤たわわ
恋に似て猛暑の風邪の胸苦し

尼崎市 吉 永 伊三郎

立たされた廊下を拭いた秋の午後
汗拭いて誰に逢うのか腕時計
与野党の顔色読めぬ風見鶏

尼崎市 中 澤 向 西

山歩き何を食べても腹が空く
禁煙をしてから愚痴が多くなる
旅をする娘を案じてる流れ雲

尼崎市 岩 倉 キク子

おしゃべり雀あの娘のうわさ告げに来る
むずかしい話になって座がしらけ
石橋をたたいて決心まだつかず

寝屋川市 森 茜

線路わき駱駝のように歩いている
無駄なことしてると機嫌いい帽子
咳こんで目まいしている雨あがり

今治市 野 村 清 美

紙人形顔へ出さずに胸で泣く
大家族手に溢れ出る胡瓜もむ
働いた汗がきらきら美しい

エプロンが似合う女になりきれず
東京都 清 原 悦 子

あの頃の話にウソも少しませ
いつまでも子供にしたい母心

島根県 森 茂 美

苦笑いの中に勝算読んでいる
往く人を見どりに染めて並木道
あのひとがバックミラーに消えてゆく

堺市 吉 本 菁 風

衣食住足りて嫉が忘れられ
偶然が重なり合ってミステリー
臆病だから停年まで勤め

尼崎市 向 井 末貞一

居れば邪魔いなくなつては恋しがり
ゲートボールで絶えて久しい出逢う戦友
失言を白紙へ戻す難しさ

寝屋川市 北 岡 波留吉

気紛れな夫に鎖かけておく
五平餅の匂が誘う木曾の旅
包丁の光で分かる店の味

河内長野市 妹 背 尽呂久

散髪をしたら体が軽くなり
恐竜の化石歴史のひとつかけら
何遍も別れ話をした煙草

鳴門市 八木芳水

兵庫県 北川とみ子

一生は後悔ばかり数珠を繰る
気の遠い話ですけど待てますか
待ちばうけ小石をけつて歩き出す

相生市 中塚礎石

沖縄県 杉谷一栄

自分史は起承転結とはならず
ふところの五本の指が読んでいる
人のよい男でいつも電話かけ

高槻市 執行稲子

唐津市 山口ふさ子

母の日の四つ葉のクローバーで若返る
哲学の道歩く詩人の顔をして
妥協して歩いた事も若い日よ

富田林市 欄智久

唐津市 山門幸夫

待ち合せまだ来ぬコーヒ三杯目
煮くずれたジャガ芋好きな亡母でした
孫の絵に想像たくまし宇宙都市

羽曳野市 酒井一壺

唐津市 山門タミ

あなただけわかってほしい目の合図
二度とない朝だゆっくり番茶飲む
不景気へしきりに攻めるクレジット

伊丹市 桎谷郁子

福岡県 本田忠男

政治とは便利 油と水がよく混ざり
名を呼ばれいやに高ぶる検査の日
胃カメラの待合室は皆無口

原点に戻れと古墳謎かける
足元の灯はいつも母が持ち
捕り物の蟬が一匹鳴き出した

イラストで送られる人送る人
絵の具では及ばぬ花の紅の色
草野球 子等の監督団地パパ

散歩道 野の花たちに語りかけ
唐津焼この花があり老妻が活け
ミニよりも浴衣の裾が懐かしく

うちのよりいいのが出てるゴミ出し日
檜山へ行こにも背負う子もいない
梅雨明けが早くて逆に雨を乞う

水やりの姿やさしい人にする
犬だけに土を踏ませる散歩道
棧橋に妹残る手を振って

尼崎市 軸丸勝巳
プライドを捨てて老人会に入る

悪口も孫が言うなら笑つとく
父の日に値札のままのプレゼント

広島市 中村 要

真直ぐに帰れと靴に諭される
縄のれん忘れた傘を又忘れ
去年は雨今年はひでりかも知れぬ

出雲市 林 悦子

心変りをしてみるそぶり秋の空
指をかむしぐさ昔のまんまです
手のひらに桜の花びらくれた人

静岡市 増田 扶美

這い這いにカメラの父は汗しとど
無常迅速妹までが先に逝く
ひたむきに生きた日偲び浴衣縫う

今治市 渡邊 伊津志

結び目が美しいので惑わされ
辻褄を合わせて雑魚の中に居る
不景氣へ今日も錨が降ろせない

大阪市 三浦 千津子

孫という役者が呪文かけに来る
そして空豆も剥いてと妻のメモ
腹立ちを物音たてて聞かせてる

和歌山市 木村 親路

いい男かすかに罪の匂する
こみ入った話はしない蠅たたき
次の世も夫婦と妻がうぬぼれる

熊本市 遠山 夏生

病室の一つの窓も雨期に入る
ネクタイに触れて何やら下心
銀行は札を扇にして見せる

静岡市 小木 久子

老人が笑う家みなやさしそう
来てすぐに帰る帰るとせわしない
花火見物やはり浴衣が似合います

神戸市 向井 泰子

雨の日によく働いた爪も切る
レンタルのおでん焼そば盆太鼓
アメリカの旅の帰りは派手になり

熊本市 黒田 緑

こじつけた無理で動きがぎこちない
先回りしても運命には勝てず
肩肘を張ったが誰も振り向かず

佐賀市 古川 かずのり

揉めるのが嫌でお世辞を言っておく
虹を描き少年ハードル乗り越える
あしたのこと少しも言わぬ落ちこぼれ

兵庫県 中野とよ子

こわがりの一足先をかずら橋

添え書にほんのり温いものを見る

頼ること出来ぬ一人の窓明り

藤井寺市 楠 昭子

のんきものだけど淋しい背である

良い案は妻にまかせて飲んでいる

ときめきが化石になった古日記

柏市 上鈴木 春枝

裏表確かめ老母の針光る

ハッピーエンドにさせたがつてる外野席

三次会まではつきあう軍資金

寝屋川市 籠 島 恵子

お隣の暮らしの音を聞く安堵

居心地のよさから抜けてゆくやる気

賢明な選択でした妥協癖

松山市 丹下 美津子

短い梅雨へとても気になる貯水量

泥かぶる覚悟友情裏切れぬ

政策はあれよあれよとエースの座

豊中市 田 中 道胤

ただ今と金魚に明かりつけていう

お隣に毒ガス作る人がいる

クーラーで猫が鼻風邪引いている

羽曳野市 麻野 幽玄

電話帳に出てます探して私を

汗も引きやつとしてから呼び出され

映画館遊び疲れがかく軒

新潟県 高野 不二

退職後それから趣味をまたふやし

ダイエツトだけが守れぬ定年後

見ないふりするためにするサングラス

岡山県 国 米 きくゑ

夕陽の道 私の影も八等身

向い風 歩幅が少しずつずれる

宿題に甲高くなるママの声

静岡県 中 西 雅

ちぐはぐの小皿の思い捨てきれず

砂浜に足なげ出してうまい飯

香を焚き夫の霊と通じ合う

姫路市 福 島 姫 女

梅雨晴れ間 照れば暑いが米思い

絵に熱中 置引にあい青くなる

完熟トマト誰にもやらんこのうまさ

廿日市市 森 川 抜 智

与野党は笑顔をつくり合意せず

子供らは噴水の下くぐりぬけ

キャンパスの前に筆置きしゃべりだし

岸和田市 井 齋 一 齋

庄助の気持が分かる露天風呂

どなたにも優しい夫気にかかる

色々の秘密聞いているイヤリング

和歌山県 中 後 清 史

万歩計孫と話の種拾い

寄り道をしたいがふところが寒い

笑わせちゃ駄目よと妻の付け駄毛

鳥取県 橋 谷 静 江

老いたのか昔話が好きになり

そろそろに本音で喋りだした友

夫婦愛一緒に濡れる覚悟です

唐津市 入 江 喜久亭

梅雨晴れ間妻洗濯に追われる日

止り木で咲いた優しい紅の花

年金は安く消費の税高し

青森県 諏 訪 明 雄

白銀の御髪うるわし紫の恋(本間満津子様に「銀髪」いただく二句)

あちから亡母の便りが来たような

八十キロの亡母小さな箱にいる

姫路市 小 井 里 兆

あの橋の向うで風が止んでいる

端役演じて人生ドラマ切れ間ない

総入れ歯なかなか仲が良くなれぬ

静岡市 宇佐美 寿 美

カーテンの蔭で会いたい人を見る

影いつか消えて人間らしくなる

不機嫌をかくせぬ音の皿洗い

香川県 高 橋 宅

贈り物見栄も少しは入れている

料理より器の方が話されて

米さげて修学旅行半世紀

兵庫県 酒 井 靖 子

決心をしてから響く大太鼓

鬼だって情けの種はもっている

筋道を説けば古いと笑われる

宇部市 中 村 三 良

声だけで美人と分かる夏木立

鳥獣戯画の蛙となつて笑いこけ

欲深い掌で愛の鈴鳴らしても

鳥取市 津 村 静 枝

抱きしめてやりたい心鬼にして

顔に似ず図太く生きる三男坊

京の旅涼しい声でおこしやす

鳥取県 山 本 正 光

ど忘れのたびに脳天叩いてる

作法などいらぬ我が家の茶が旨い

ふり向きもされぬ善意の草を抜く

島根県 三代朝子

こんな時友がいたらと恋しがり
束の間の憩い幼女とたわむれる
色づいたトマトは鳥に試食され

松江市 浦辺静江

姿見へ気になり出した皺の数
スイミング若返るよと誘い出す
星空へ日増しにふえた月見草

有田市 生馬芙美子

要領が悪く仲間の外にいる
言い訳が自然瞳が美しい
雑草も星の雫で生きかえる

兵庫県 西井つや子

米粒をひろって姑の独り言
せせらぎに慰められて炎天下
新鮮な土の香添えて野菜市

八尾市 村上ミツ子

七人の敵を味方にしてしまふ
賞味期限延ばすつもの色を選ぶ
かたつむり家を担いでどちらまで

寝屋川市 瀧本八十八

熊楠の情熱 日本の梓を超え
燃え尽きて仁左昇天となる舞台
タイ米の粥 梅干しで満ち足りる

静岡市 永倉柳華

靴脱いで野に座す昼の缶ビール
やさしさに触れて涙が止まらない
女の武器最後は涙拭くばかり

静岡市 柳沢たま

のし袋手刀切って孫可愛い
骨粗鬆症医学の本を読んで見る
うっかりと敵に漏らした日の不運

静岡市 片平静代

帳尻が合って談笑する余裕
ライバルの秀句即効刺激剤
黙秘権不都合な時娘も真似る

尾張旭市 三浦きぬ

孤独ひしひしこんな夜には長電話
妻の饒舌これも特技か諦めよう
大正の女だな正座崩さない

島根県 安部美恵女

朝顔の日記を孫に起こされる
いつしかに風ひんやりと季は巡る
久しぶり暮らしに触れる姉妹

奈良県 飯田昇

ライバルの誘いに覗く落し穴
心まで染めて嘘つく会期末
回り道星がまばたきしてるから

鹿兒島県 大山 舞鳥影

吸いすぎに注意が読めぬ蜜族
目を入れたダルマは手足はしくなる
情報源は待合室の週刊誌

岡山市 中嶋 千恵子

許し合う渋い夫婦の名演技
尻に敷く妻に余白残してる
この猛暑 水一杯の情け知り

秋田市 古川 喜美子

手さぐりの暮し時折虹の橋
黒髪の姿そのまま逝かんとす
葉書でも失礼だとは思わない

静岡市 大村 正雄

未練ない素振り心で泣いている
大臣になればおんなじ事を言い
勲章も寂しく並ぶ蚤の市

福岡市 森 志げる

過労死へ無駄も余白も無い手帳
ひかえ目に露草喋りかけてくる
芸の艶ほろほろ落ちてカムバック

高槻市 乙倉 武史

下手ながら花活けてあり応接間
交際中親の意見は馬の耳
ベランダの朝顔へ蝶も気を配り

唐津市 浜本 治幸

雨も晴れも三日続けば愚痴が出る
聞き上手中々話し終らせず
老夫婦墓地見学で品定め

島根県 岩田 三和

文化にはやさしさ見せる池の波
Tシャツに蝶の絵かいて土手を舞う
寝るまえに書いておきますありがとう

兵庫県 玉田 三重

やっかいな話は午後に纏れ込む
人並の恩義忘れぬ付け届け
愚痴一杯吐いて明るさ取り戻す

岡山県 伏見 すみれ

しなやかに筆走らせる詩の道
うしろ指さされまいと寡婦の意地
うしろから撃たれたなどと口にせず

明石市 小川 酔月

孫せわし塾にピアノにスイミング
耳にまで重りをつけて見栄をはり
居酒屋の世間話は世帯じみ

唐津市 市丸 晴子

少年の汚れた夢を拭いてみる
お疲れとビールも汗をかいて出る
この年齢で子供の荷物持たされる

和歌山市

森口

恵子改め
美羽

毎日を音声多重繰り返す

敬った時から弱みふえてくる

すつきりとしたいのに又むしかえす

島根県

福岡博利

生きている証 朝日は燃えに燃え

孫がくるテレビ料理の忙しさ

古い二人草をとるにもけんか腰

鳥取市

植田一京

ポケベルが私とことん管理する

雨の日はゆっくり豆を煮ておこす

晩酌をすれば自信のつく父さん

島根県

武島ちよえ

冷房の中で汗する話聞き

梅雨晴間笹百合の朱なまめかし

とりどりの水着で波を弾ませる

松江市

安食友子

ボカリスエツトばかり欲しがる万歩計

窓拭きをすると不思議に雨が降る

律義だな蹴られた小石でんと居る

鳥取市

近藤秋星

お隣の朝顔一日早く咲き

妥協するすべを知らない芒の穂

赤い靴履かせた人はもう居ない

鳥取市

田賀八千代

ふりむけばいつもやさしい風がいる

花の乱時がすぎれば風になり

岡山県

富坂志重

叱られる覚悟うわ目で親を見る

仲良しが帰る頃には虎となり

池田市

木村一笛

なりたくてなった大臣御用済み

暑い日々地蔵は頭に水貰う

十和田市

阿部喜久江

歯切れよく笑顔で語るお立ち台

すったもんだあるほど売れる芸能人

大阪市

尾崎黄紅

ゆっくりとしていきなはれ酒が出る

金のことなら老妻の勘忬える

米子市

小塩智加恵

由緒ある家系の息子髪を染め

珍しくベルの鳴らない日が終わる

米子市

鹿島繭

灯台の真下に二人だけの椅子

母さんが漕ぐよ向うの岸までは

高槻市

守先伸子

日記帳夏のページは汗ばかり

万歩計休ませた日の胃の重さ

枚方市 濱田良知

恩師より老けて見られた白い髪
五十回忌母に百句の供養する

高知市 桑名知華子

丁寧糊代を剥ぎ読む手紙
庭先の自己満足の胡瓜摘む

豊中市 岸田知香子

新人類機械相手で会話なし
頂上の風がさわやか汗拭う

羽曳野市 山本たけし

声もなくげんこつ飛んで来た明治
大学は出たけど続くアルバイト

静岡市 松下正枝

宿に着き丈の短い浴衣選る
保釈金ぼんと出るのに何故汚職

岡山県 福原辰江

紆余曲折重ね浮世の風の音
曲線で上手に逃げる祖父の知恵

寝屋川市 太田とし子

逝ってからいい人でしたと皆言う
一冊の本から見たものきいたもの

和歌山県 福田和子

「ありがと」たった五文字の出し惜しみ
大輪の美事な花は散り急ぐ

富田林市 山原昭水

再会は昔の味の店で呑む
街で見ぬチンドン屋さんテレビで見

田川市 松元寿永

働き蜂に追い打ちかける妻のエゴ
時間から時間追われる旅で良し

泉佐野市 稲葉洋

一時間待って顔みりや腹がたち
気をつけてまた転んだは親の方

大阪市 中井正秀

元気を靴のちびりで確かめる
年金は自宅待機と同じこと

香川県 高橋たみ

夏の風 植木ひとつをころがした
籠さげて下駄ばきで行く市場なし

唐津市 福島紀一

万歩計ならぬ歩幅で峠越え
方言で酌する女の太い指

河内長野市 印藤智子

なにもかもほっぽり出して昼寝する
コップ酒女一人で絵にならぬ

河内長野市 木太久正一

早朝の畑で汗して昼寝する
仙人のような総理に安堵する

檀原市 西本保夫
正義漢毎日腹を立てている
話してゐるうちに気付いた未亡人

摂津市 井上源一
火の国の男に堪えるおてもやん
長寿国だから長寿と限らない

鳥取県 小西五十鈴
日焼けなど気にせず農婦鎌を振る
だまし絵の中に苺の海を見る

和歌山県 藤井春子
太鼓の音心満ちてるリズム感
梅干の三日三晩の熱帯夜

高槻市 小林一閑
しなくても済むことをして疲れてる
コマーシャル目立って困る生ビール

羽曳野市 徳山みつこ
稲を思えば暑さもガマンガマンかな
万葉の滴りを汲む二上山

箕面市 木村天弘
人生は仕事一途に燃えつつけ
白い杖の横断じつと待つタンプ

岡山市 山磨行子
ガラクタも孫には大事な宝物
孫といて今日と言う日があればいい

大和郡山市 榊原慧心
父と娘は他人のように二歩はなれ
情報で頭ばかりがデカくなり

海南省 谷口義男
宝くじ当る奇跡で又も買う
盗る物も無いが矢つ張り家に鍵

八尾市 平川幸枝
送り火の燃えつくまでを見届ける
知らぬうち夫婦は違う道を行く

唐津市 野田旭恒
お俠な娘母そつくりの天の邪鬼
置き薬二年使わず持つて去に

静岡市 浅子まつゑ
人並を越えて行きたい夢を持ち
屋根仕事降りて来たのは女の子

八尾市 村上剛治
少年の瞳の輝きに嘘はない
故郷に本籍だけはおいておく

和歌山県 村中悦男
空似かな日傘の中に居る女
逆らいの目は反省をしていない

広島市 元林光子
つぎ当ての腕を生かしてパッチワーク
またしてもすったもんだで旅決まる

熊本県 増田 一 乗
飲みぐすり種類確かめ七つ飲む
四五日ぶり母娘話の種つきず

和歌山市 山 根 めぐみ
手に入れた自由デパートめぐりする
闇の道 夫の親指にぎりしめ

愛媛県 中 居 善 信
ほろほろと一番上手いのはかじか
ダンディーな蛙は縞の服を着る

米子市 永 井 三津子
表札に亡夫の名前残してる
美人でも般若に変わる時もある

鳥取県 橋 本 孝 原
温泉につかり治ると医者離れ
妻の愚痴風呂敷に入れしまつとく

大阪市 今 西 静 子
喪の枕がおびえる夜半の音
賀状に添えたペン字に友の顔

泉南市 坂 根 流 水
耳うとく話跡切れて友も去り
冷奴これさえあれば後いらぬ

大阪市 一 本 勇 太
旅先の妻が電話で料理する
自動ドアに影をちぎって来た孤独

大阪市 池 田 一 男
心電図 心の底まで分かるまい
まだ生きています証の町散歩

吹田市 西 岡 豊
門限を破る老兵意気盛ん
炎天の暑さなだめる大ジョッキ

姫路市 服 部 一 典
出世はしない息子近く住み
山彦が六甲下ろしの返事する

千葉県 大 川 晚 翠
夏草の土手は焼かれて涼風
蚊柱にすやすや眠る古希の背

鳥取県 権 代 康 女
タイミング良くて三時の茶をよばれ
花好きで心やさしい人と知り

鳥取市 山 口 しげる
うまい話耳が拾って放さない
他人より遠いスープの冷めぬ位置

庫津市 岩 崎 實
詮ないと思えど愚痴のくさり
いとまる客へ持たせるトマトなす

大阪市 大 河 未 佐 子
琴爪の袋を亡母の帯で逢い
未熟でも一本道を歩きたい

大阪府 澤田和重

若い頃のムードで夫婦しています
好きと書く手紙しんから惚れている

東大阪市 松山隆

期待すること知っている今朝の靴

蛙ケロケロ里の天気はよく当る

岡山県 土居ひでの

還暦へ七つの孫が頬を寄せ

還暦へ合せてくれる娘の歩幅

和歌山県 上岡正直

充電し明日に風を吹かせよう

待ちかねた雨 三日目はいやがられ

流山市 神田治

一軒家に住む独身の蜘蛛である

ダンス入門へアトニックも変えてみる

吹田市 吉川渉

好きなことだんだんばくを甘くする

足のつば揉めばご機嫌よい明日

羽曳野市 西村りつえ

ひと言を受けとめるにも人柄出

母と子等亡父の恐かった事ばかり(亡父23回忌)

鳥取市 田中友子

会う時を待てぬ心が走り出す

隠さずに話す我が子に汗をかく

鳥取市 杉本孝男

約束を破り小指が泣いている
カメラマン スポーツ並みによく走る

鳥取県 藤山弘子

灯台もドライブコース風みどり

マスコミが心配の種まきちらし

米子市 服部朗子

神様の恵みどつしり重い西瓜

生き延びてペダルが漕げるやれ嬉し

米子市 池尾保子

やまかげの向う側では陽がいつばい

嫁いだ娘が他人行儀な顔でくる

大阪市 乾哲静

足止めを食った挙句に妻の愚痴

こいさんがカラオケに行く好い時代

島根県 松本聖子

露草を踏んで草履も元気です

うとうととまた見逃がした夜のドラマ

大阪市 平井露芳

冷戦も終った言うて自社が組み

口惜しさを風呂場で流す負け力士

静岡市 三浦つね

健康がもどればすぐに忙しく

娘の家へ犬が養子に昨日来た

寝屋川市 坂上 高 栄

板さんの腕の冴え見る京料理
堪え難い別れも月日に癒される

鳥取県 中 西 智恵子

紫蘇の色程良くついた梅を干す

初恋の話がはずむ同級会

鳥取市 中 澤 正 恵

ああすれば良かった悔いも終い風呂

音信不通勝手に決める元氣良さ

鳥取市 大 工 静 子

身の上を老爺は語る淋しげに

鳩の巣に傘差し掛ける情があり

大阪府 岡 本 久 峰

鎖解けいざ帰りなん母の国(ウクライナ)

母なる国女人眩しく仰ぎ見る(舞鶴)

鳥取市 谷 口 侑 里

父さんもひげを剃ったら男前

新人が会社を背負う気概もつ

お 願 い

「川柳塔」「水煙抄」への出句は、本文最
終頁の投句用紙に8句を記入し、毎月15日
までに到着するよう、川柳塔社事務所へお
送りください。

川柳塔社編集部

川 柳 大 会

西宮北口川柳会20周年
黒川紫香会長米寿祝賀

と き 9月6日(火) 午後零時半開場

と ころ 西宮市民会館 1階大会議室

(阪神西宮駅北出口から徒歩5分)

おはなし ふあうすと川柳社 田中好啓氏

特別課題 (事前投句・締切りました)

「 八 」 黒川 紫香 謝選

当日課題 (各題2句・午後1時半締切)

「 壺 」 林 はつ絵 選

「 炎 」 来 住 タカ子 選

「 ふたつ 」 小 出 智 子 選

「 純 」 和 田 光 代 選

「 島 」 香 川 水 聲 選

「 女 」 森 中 恵美子 選

「 詩 人 」 西 尾 栗 選

会 費 1000円 (欠席投句拝辞)

懇親宴 希望者のみ・会費5000円

主 催 西宮北口川柳会

後 援 川 柳 塔 社

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 8月号から

片岡 智恵子

翔びたくて助走ばかりを繰返す

植田 一京

余生をどう生きるべきか。あれこれ夢をめぐらして、まずは少し駆けてみよう。翔べるかもしれないし、翔べないかもしれない。ただ悶々と暮しているより、雄々しいとおしさを感ずる。

笑っても笑っても来ぬ福の神

辻上 よしみ

明るく健康的な句で、思わず笑ってしまつた。笑っているのに、福の神がこちらを向いてくれないといわれるけれど、暗い顔で愚痴っぽい生き方では、万の神がそっぽを向くことだろう。すばらしい笑顔で、どうぞ…。

大袈裟に聞こう真面目な子の話

大川 幸子

幼子の心を思いやるやさしさあふれる句。夢いっぱいのお話がかわゆい唇から次々に

てきそつ。子どもの目線を大切にしたい。

流れ星とこへ落ちたか気にかかり

高田 美代子

ロマンチックな句です。気になって眠れぬ夜となったことでしょう。

千年に一度と言われる「SL9」と木星の大衝突あり。「コロンビア」号あり。宇宙から目が放せない昨今だもの。

八月の雲が涙を呼びに来る

藤井 高子

雲湧き立つ灼熱の八月。時代がいかに移り変わろうとも、いまわしい戦禍の日を忘れ去ることはできまい。夏の日はやはり黙祷を捧げる一日であるのかもしれない。

養虫よぶらり私も今無職

菊地 トミエ

「今無職」という言葉、少し気になります。が、句意はよく分かる。ぶらぶらしているように見えるその養虫、実はしっかり次なる策を練っているのかも。

価値観の違いを悟る今日の雨

流 奈美子

宮沢賢治の「雨ニモマケズ」には「ヒドリノトキハナミダナガシ」とある。その反面昨年の長梅雨、冷夏はコメの大凶作をもたらした。降っていいのか、悪いのか雨は知らず

に地におちる。今夏の日本列島は炎えていた。真実は残酷嘘は美しい

村上 久美子

美しい嘘は、どんどんひとり歩きしていく。それに引き替え、真実は物事の中核にいながら、触れられるのを拒むがごとくかたくなな姿勢を示す時がある。真実ゆえ残酷さをあわせ持つからだろうか。

足病んで口の達者な妻になる

尾宮 弘治

世界一の平均寿命がまた延びて、女性は八二・一歳、男性も七六・二五歳となった。なんの持病もなく、平均寿命を迎えたいものだが、現実にはなかなか難しい。まあ、いいや。自分の中に残っている元氣印のパワーを存分に使って、しっかり生きてみよう。

むすんで開いて両手に幸を溢れさせ

奥谷 彩子

金魚にも秘密にしたい事がある

村上 剛治

追伸に書いてしまった恋心

清原 悦子

花も子も構いすぎると駄目にする

古川 かずのり

聞き役になるだけの耳貸してやる

楠 昭子

路郎賞

候補作品中間発表

川柳塔賞

平成六年五月号～八月号

路郎賞候補作品

黒川紫香

野村太茂津

頭数の中に入っている安堵

宮尾みのり

良い人の住む街角に花がある 宮崎シマ子
ホイホイと梯子登って外された 金山 夕子
釘だつて力まかせに打ちや曲がる 工藤吟笑
春には春の唄あり今日も窓を拭く

山本希久子

春遠からじ同行ふたりの幕があく 舟渡杏花
医者が聞く前に風邪だと言ふ患者 相馬一花
居眠つてばかりの鬼と新幹線 高杉 千歩
九官鳥あなたあなたと呼びすぎる 榎本蔭児
身内切ること始まる蘭正化 桜井 千秀
簡単にノーとは言えぬのが未練 池内かおり
ジャンケンはあるなと蟹の親が言う 久保 正剣
切れそうで切れない 母からの電話

末席に座して気配り許りする 政岡日枝子
漬けられて茄子は本領発揮する 古野 ひで
西口いわゑ

孫弟子がすっかり癖を継いでいる 西出楓楽
さらなる夢をいただきたくて登る坂

恩に報いる花と線香では遅い 天正 千梢
疑いの深まる穴を掘っている 堀端 三男
穴掘ると等身大になつていく 大橋 政良
その時のために縫代残しとく 政岡日枝子
打ち明けて悩んでないという他人 川崎ひかり
悩みごと生きる証と言われても 奥田みつ子
振り向いて翼やすめる海がある 松原 寿子
イヤリング淡い殺意を抱いている

逢つて別れて靴何足を履き潰す 西口いわゑ
取つ付きは悪いが取り柄あるらしい 田中 薫

いい噂したい座ぶとん譲り合う 玉井 豊太
個人差を物差し容赦してくれぬ 林野 麴光
縦の樹は自分の位置をゆずらない 福本 英子
林 荒介

橘高薫風

散骨もいいがお墓に妻が居る 弘津 柳慶
ひとりにも慣れて湯呑みの暖かさ 松本文子
顔芸の要るお見舞をして帰り 舟木与根一
定年五年首輪の傷も消えました 川島颯云児
さらわれる娘がともよく笑う 新 正子
港区に海が無くなるベイエリア 榎山 隆
騙されて総理大臣になつただけ 谷口 次男
真実と真実融けて藍の青 谷 真風
一人旅電車が時刻通りくる 森川まさお
桜散る父と歩いた日のように 木村貴代子
メーデーの後に抽選会がある 小島 蘭幸
私では亡母の結城が着こなせぬ 安藤寿美子
ひとり酒ロダンのようなかつこして 浅田 隆樹

耳鼻眼科完治ためしにパチンコ屋 清水絹子
砂曼荼羅 砂のみ仏 砂の経 佐治千加子
人間でいたたくて回り道をする 岸 桂子
自由ならたつぷりあつてひまがない 吉田 笑女
奥の手が効かぬ相手に母がいる 江口 明光
雛の夜に小さき欠伸貰うたり 長谷川春蘭
コトコトと安らぎくれる落しぶた 新川マサエ
無視されるよりはましだと聞き流す 浅野 房子

阿萬萬的

うぬばれにこの頃多い誤字脱字 松下たつみ
踏み台があるから登れたのを忘れ 河井庸佑
陽だまりに補聴器なしで猫といふ 一戸ツネ
幸せを絵にしたような潮干狩 稲本 凡子
十人十彩老いに無色の日がつづく

閑という悪魔が時々わるさする 島崎富志子
幸運の女神 理詰めが気に召さぬ 秋元てる
うっかりと聞けば小骨のささる語尾 辻川 慶子

浮きたかろう豆腐がバックで重ねられ 岸本豊平次

西田 柳宏子

ガラス窓拭いたら春が透きとおる 土橋 螢
下手な嘘だからあなたを信じてる 牛尾緑良
ジャンプくらいは出来ると思ふあひるの子 江口 度

一匹になると生きてはゆけぬ雑魚 三宅保州
筆談に明るい文字を探しつつ 栗谷 春子
朝がきてイカ釣り船の大あくび 鈴木 公弘
スマートにノーと言つてゐる女文字 藤井正雄
父親は由緒ただしいなまけもの 江原とみお
勿体ない青空ながめ無職なり 小野 克枝
雑草でよし全身に陽を浴びて 川端 柳子
都合よく忘れ上手に生きてゐる 原 さよ子
葱坊主お前もお世辞言えないか 小池しげお
ナツアカネ翔んでいたのではとす 高須賀金太

川柳塔賞候補作品

玉置 重人

紫陽花がとてもしずな嘘をつく 光井 玲子
まんまるな石ポケットに落着かぬ 吉田笑女

補聴器の電池を替えて生きのびる 永田晩風
明日咲く蕾と虹の話する 藤井 高子

地図にない川から貰ううまい水 田辺 鹿太
さりげないたとえ話が胃にもたれ 渡辺南奉

絵まんだら恋に溺れたことがある 児玉歌子
生かされてジグソーパズル埋めている 野瀬 昌子

嘘ついてないからご飯よく食べる 森 茜
もう暮れるこんな楽しい今日なのに 富坂 志重

全力で生きたページにある誇り 杉山 精子
俱会一処 背中合わせで丸く生き 土橋睦子

飽食の中でストレス溜めている 塩路よしみ
湯の宿でうちとおんなじテレビ見る 澤田 和重

移ろいの哀しみ背骨から曲がる 長浜 澄子
忘れたいことが邪魔して眠れない 沢田きん

祭寿司 姑は許してくれている 山根 恵美

小出 智子

泣き顔もええなあ吉祥天女さま 萬沢 翠
どこでも降りてくれる田舎バス 高畠 五月

大釘の強さを誰も疑わぬ 杉山 精子
たじろいだ形で毛蟹皿に乗る 田辺 鹿太
手紙文他人行儀になり他人 山口 新子
日本語でカルテは書いてくれないか 石川 勝

夕刊の匂と淋しさを領つ 永田 晩風
ボタン一つはずして友と許し合ふ 池田寿美子

亡父の絵のまつり太鼓がまだ止まぬ 島 ひかる
お目当は門前町の柏餅 大西 文次

捜した靴大小屋の中にある 山口三千子
紫陽花に傘かたむけて立ち話 勢理客トミ子

底ぬけの晴天 靴の底を干す 岡本 道子
非行の子も握れば温い手をしてる 朝倉大柏

風が出た風に乗るのも一つの手 山本 義子

板尾 岳人

落城のはなし聞いているにぎり飯 島 ひかる
消しゴムを使う男を眼の隅に 永田 晩風

躍進の夢は捨てないかたつむり 塩路よしみ
すぐ側に凭れる大樹ある安堵 流 奈美子

六月の雨しとしとと聞かす上手 藤井 高子
人形の抱かれ上手は炎の匂 田辺 鹿太

いさぎよく着地を決めた落椿 平川 幸枝
ふつつつと木の芽言いたきこと多し 岡本 道子

耳搔きに少し本音を乗せておく 八木 芳水
思い切り泣けと夕日が沈みます 高畠 五月

ためらうと男の傘を畳めない
善人で風の器にすぐ嵌まり
流れ星どこへ落ちたか気にかかり
森 志げる
大峠 可動

ひたすらに時を流した砂時計
野村 清美
四面楚歌堪えて生きてるちぎれ雲
江城修史

宮口笛生

大釘の強さを誰も疑わぬ
杉山 精子
残高を気にしています生きてます

たらふく飲んでたらふく食べて不況論
高田美代子
神田 治

ゆるめたり巻いたり妻のねじ加減
丹下美津子
あしたには過去となる日を大切に

歯ごたえのある奴だから叩いとく
朝倉大柏
死ぬほど好きで時々アカンベーをする

芭ラの痛さ知っているから口ごもる
萬沢 翠
神も仏も居ないと思う日が終る

嘘ついてないから御飯よく食べる
森 西
故里が近くになると妻多弁

逃げ道を少し残した母の愛
辻上よしみ
爆笑のネタは夕餉にとっておく

自信満々喫水線を深くする
森 志げる
その時は鬼にもなれる勇氣持つ

足立由美子

高杉鬼遊

恋成就 大噴水も立ちあがる
宮崎 菜月
窮屈なところで働く乾電池

エプロンをつけた男が家にいる
小塩智加恵
ねじ巻いた時だけ動く子に育ち

永田町で一番売れる鼻ぐすり
横田 放人
孤独ではないさ時計が鳴っている

順ぐりに杜仲茶 柿茶とくだみ茶
古谷ひろ子
どちら様も孫が孫がの春四月

寝て居ても冬は静かに遠ざかる
井上すみれ
嘘だとは分かっているもおもしろい

真つすぐの道でリズムを狂わせる
榎谷 郁子
女もう女になった日を忘れ

合っているはずの時計に待たされる
村上 剛治
Vサインして父ちゃんがいなくなる

直角に曲れば影がうつたえる
榎原 公子
萬沢 翠

遠山 夏生
田辺 鹿太

残暑御見舞

久家代仕男

平成6年度 大阪文化祭 川柳大会

とき 11月19日(土) 午前11時開場

午後1時出句締切 同2時披露

ところ 大阪市中央公会堂中集会室

(地下鉄「淀屋橋」北浜から徒歩5分)

宿題と選者(各題2句)

「豊か」 梶川雄次郎選

「風船」 宮園射月芳選

「絵」 谷口光穂選

「ぬれぎぬ」 永田帆船選

「時事雑詠」 柏原幻四郎選

「遠い」 野島満寿巳選

席題 当日2題発表

◎出句は出席者に限ります。

会費 1000円(作品集代を含む)

賞 秀句に主催者から「川柳賞」を

贈呈します。

主催

大阪府・大阪府教育委員会
大阪市・大阪府教育委員会

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、、、ろ

(45)

橘 高 薫 風

川柳雑誌創刊百号記念句会は五月二十日夜
ちとせ倶楽部で開催、出席は九十八名。庄萬
よし氏の講演「満蒙の川柳を語る」、路郎は

「底力」と題する講演で相も変らず硬い。出
席者には合本一冊と路郎染筆の手拭い、小林
ライオン商会から歯磨十打、春元商店より旅
行用石鹼十打の寄贈あり、とある。本社句会
にて賞品を出す仕来りは路郎の死まで続く。

兼題「裸婦」麻生路郎選と「鶴」岸本水府
選の三才と軸吟を抜粋する。創立句会るとき
は「鶴」を路郎が選をしたことを想起する。

(人)裸婦と仔猫と春の夜の壁

(地)電燈と一緒に消えた窓の裸婦

(天)神様を信じて裸婦は寝そべりぬ

(軸)裸婦の圧力彼の死を悼む

(人)失業の辛さ鶴にも見附けられ

(地)バラソルの色に驚く春の鶴

(天)父の影の影鶴の影もよし

(軸)売立の鶴燦然と売のこり

この一ヶ月半ほど前の関東川柳団歓迎川柳
大会の開催を、本欄六月号で触れたが、肝心

の東京側の氏名を記さなかったので補記する。

(東京) 迷亭、○丸、千寿郎、茶六、杜若
花川洞、夢一仏、玄六、比呂志、盈光、鞍馬
愚仏、寿山、雀郎、桃太郎、周魚、久良岐、
栄二、三太郎、玉兔朗、しげを(横浜) 懷窓
(静岡) 柳葉女、柳多良(長野) 柳児(福島)
五花村、らまこに豪華な顔ぶれであった。

川柳雑誌百一号の表紙は、路郎の句を路郎
が墨でさらりと書いている。

待ったなしの歩にさされたる犬養毅

これは、首相逝くの前書のある五・一五事
件を詠んだ有名な句だ。

大日本帝国が歪な歴史を辿り始めるのと時
を同じくするように百一号が発行される。

その編集後記は路郎の筆で、病み上りとは
見えず軽快に走る。

▼玻璃越しに初夏の光りが流れる。テーブル
クロースの埃りが眼につく。昨日はこの机の
横に緑雨君と鶴峯君が来て坐った。入れ代り
に山雨楼君が坐った。夜に入って素人君が坐
った。山雨楼君は夜の三時過ぎまで談し込ん

で私の横でアートのベッドにもぐり込んだ。
私が眼をさましてこの机の前に坐った時には
もう山雨楼君は出勤していなかった。

▼バットの煙りに親しみながら過ぐる一ヶ月
を振り返ると、創刊百号記念事業のために日
日奔命に疲れていた同人や社友やその他の人
々の顔が眼に浮かんで来る。特集号の刊行、
「川柳の夕」の公演、記念句会の開催を次か
ら次へと釣瓶落しに断行したのであるから実
際その衝に当ったものでなければ想像も及ば
ぬ苦労があった。

▼私などは顔を洗うひまがなくて、二日続け
て顔を洗わない日さえあった。朝食を机辺に
運んでくれても箸を取り上げるのが、電燈の
点く前だった。文字通りに寝食を忘れ
た形であった。そんなにしていて、特集号は
遅刊の止むなき状態で四日の午後に至ってよ
うやく出来上った始末。(中略)

▼五月四日「川柳の夕」の当日である。私は
漸く五時に朝日会館へ着いた。楽屋は戦場の
ありさまで緑雨、艸楽を中心に各委員は大車
輪で活躍した。開会の一時間前にまだ十数氏
は数萬のパンフレットを抱えて街頭宣伝に出
掛けるという物凄い活躍ぶりであった。

かくて、既定時間を十五分遅らして開会し
た「川柳の夕」は未曾有の大盛会となった。

同人特集

月百句

平成三年〜平成五年
同人吟から 編集部

月の縁 団扇くるくる回すだけ
砂丘有情お前と月の出を待とう

西尾 栗
橘 高 薫 風

すねて出た道で明るいお月様
口げんか出来ぬ独りよ昼の月
ラクダの背 月の砂漠はもう知らぬ
夜にまぎれ月の雫が城に落ち
寒の月セルビアの火も知っている
人ひとり許すと丸い月が出る
ホテル出る時には怖いお月様
逃げ腰になるから月も追ってくる
人恋わぬなんて嘘でしょ冬の月
月へ翔ぶ夢は忘れぬ竹とんぼ
語りべの村の大樹に寒の月

黒川 紫香
藤原 鈴江
大原 葉香
一瀬 福一
春城 武庫坊
赤川 菊野
相馬 一花
三宅 保州
栗谷 春子
藤村 女
春城 年代

ほろ酔いへ月もいい顔してくれる
三日月に切られて帰る寒さかな
月冴えて自伝が少しずつ曲がる
焦るまい月が上がれば潮満ちる
月が見ているから涙拭いておく
月が出ていつそ別れがつかくなる
上弦も下弦の月もあたたかい
月が出て山が笑顔になつてきた
痴話げんか上弦の月も笑ってる
露天風呂 驕りを月に覚られる
あの人もこの人も好き月おぼろ

西口 いわゑ
結城 君子
森山 盛桜
藤解 静風
西原 艶子
吉岡 美房
堀江 芳子
青戸 田鶴
松尾 柳右子
園山 多賀子
細川 稚代

ほろ酔いへ月がお供をしてくれる
満月の答を九月には貰う

三行半を書くのにちょうどいい月夜

念願が叶って丸い月を見る

灯を消すと病舎を覗く月あかり

三日月を仰いだ僕も欠けてくる

若い日も今も変らぬ丸い月

おぼろ月に胸を借りたい人もない

償いの道 上弦の月冴える

さよならへまたねと月は高うなり

男との約束いい月の夜だった

お二階のラジオ聞こえてくる月夜

満月へ身の上ばなししてしまふ

ソナタ弾く月の光におどる指

月煌煌 男の弱さ浮き立たせ

秋深み月に心を盗まれる

父の夢叶え名月 桂浜

泣けという謎かもしれないぬ籠月

騙されてみようと思う月の暈

月光に染まると青い雪の屋根

月原 宵明

田中 亜弥

新 正子

高須賀 金太

片上 明水

小寺 花峯

澤田 千春

吉岡 きみえ

小野 克枝

水粉 千翁

土橋 螢

田中 叶

對馬 一閃

福井 桂香

山下 美津留

古野 ひで

北川 竹萌

波多野 五楽庵

舟渡 杏花

林 瑞枝

消毒の時間だ月を浴びに出る

ふる里はもうないダムへ月が散る

不意の客もてなす月がまんまるい

満月の波にあればぬ訳がある

月に影並べて次の世を妻と

ポッペンと語りつくして寒の月

昼の月 女の髪がからむ指

籠月 思い違いはそのままに

ふる里は月の浮いてる井戸がある

呆けたなと思えば淋し昼の月

白木蓮妖しいまでに月おぼろ

充分に満ちれば欠けるお月さま

お月さまもとのひとりになりました

亡母という母といふんだ墓地の月

ローカル線 田毎の月が浮いて見え

菜の花や月の出待っているロマン

海を昇る月は西瓜の匂しして

いい人に逢いたい月が美しい

おぼろ月 内緒内緒をしてくれる

婉曲な言葉通じぬ鎌の月

八木 千代

加藤 彩人

山本 玉恵

政岡 日枝子

驚見 章

高杉 千歩

野村 京子

田中 輝子

山崎 君子

越村 枯梢

北 勝美

永峰 伽名子

内田 結実

三宅 不朽

森下 愛論

神夏磯 典子

新家 完司

小谷 美ツ千

奥山 美智子

松本 だだし

お月様へ行きたがつてるシャボン玉

母子家庭やさしく包むお月様

赤い月 歩道橋には風がない

火砕流跡 月面こうもあろうかと

辻斬りの血しぶきあがるいい月夜

十五夜の月を敵にはまわせない

空港の栄転左遷 昼の月

闇を出て駅舎に残る昼の月

終電車あまりに月がきれいすぎ

水煙へ十六夜の月上り切る

木犀の香に振りむけばいい月夜

石蓀や遠き想い出 昼の月

ここまでと切なく月は欠けてゆく

月がやさしいから窓あけておく

困ったらみか月さんと対話する

諍うて月のきれいな夜と知る

一人の窓にひとりの月を抱きしめる

おぼろ月 女心が変化する

あっぱれな武将へ月も満ちてくる

河内 天笑

小白金 房子

森川 まさお

安藤 寿美子

植村 客遊子

肥後 和香子

永田 俊子

林 荒介

内芝 登志代

松川 杜的

辻川 慶子

有働 芳仙

高橋 千万子

茂理 高代

小林 由多香

岸野 あやめ

金山 夕子

柴田 英壬子

津村 八重子

陽は沈み心もとない月明り

寒月へシベリアのことまた想い

動き出した街にばんやり昼の月

冬木立に砂色の月ひっかかる

想われていたとも知らぬ池の月

湖が澄んで別れの月写す

公園のベンチけだるい昼の月

何となく話してみたい春の月

三代が揃った旅のまろい月

野仏に今宵はかかる月の暈

別れなど喜劇にしよう丸い月

橋の上の二人に丁度よい月だ

記念する日となりましたお月様

餅を搗く月の素顔はそのままに

上弦の月へ弁解などしない

もう二度と来るなと月の石が言う

月天心 高層ビルは地に沈み

名月や東海林太郎の赤城山

仲秋の名月という虫が鳴く

本間 満津子

田村 新造

柿花 紀美女

片岡 智恵子

松本 はるみ

さえき やえ

福浦 勝晴

梅 みどり

信本 博子

久谷 まこと

松本 文子

土橋 はるお

山本 希久子

藤井 一三三

小西 雄々

福元 みのる

堀江 光子

片上 英一

正本 水客

川柳と音韻

川柳こぼれ話

田中正坊

ており、短詩形文芸の俳句・川柳も音韻を無視することはできないと思う。

まえおきがすし長くなつたが、音韻には「頭韻」と「脚韻」とがある。頭韻とは五・七・五のそれぞれの頭が同韻（ここでは同じ音を指す）であるもので、①上五・中七が同音②中七・下五が同音③その他の音が同音の三つに分類される。①の典型的なものに

俺に似よ俺に似るなと子を思い 路郎
があり、「オ」が韻を踏み、「思い」のオもこれを補強している。現代の作品に見ると

人恋し人煩わし波の音 栗

校長の校長らしい松の内 薫風
妻の忌に妻の知らない服を着て 晚風

信すれば弥陀の光の水の色 葭乃

恋人の坐つたとこへ坐つて見 豆秋
雨の日のカレーは少し辛口に 惠美子

があるが、これはあまり多くはない。やはりいちばん多く、さまざまなケースがあるのは

③のその他で、二章一句の八・九では
三人が酔えば三人らしくなり 路郎

があり、九・八では、
池に鶴残して一家都落ち 葭乃

を挙げるにとどめるが、ここで春果は路郎の言う「重語法」と「畳み句」についても、同

じ音を繰り返すから、韻を踏んでいると見られぬこともない」と述べている。

ほ・ほ・えめばほ・ほ・えむ恋の川田順 路郎
吾は海の子泥を立て泥を立て 葭乃

豆腐買うのに判が要る判が要る 豆秋
がその例句だが、現代の作品においても

お・お・んと鐘お・お・んと恨み節 俊平
雌蕊雄蕊雌蕊雄蕊の夜となる 甲吉

母を流す男を流す秋の川 惠美子
美・し・いと別れる美・し・いうちに 三窓

と多彩である。
もう一つ、触れておかねばならないものに

「脚韻」がある。この場合、
大杉を殺し思想を取り逃し 路郎

のように同音もあるが、子音と母音で構成される日本語の性格上、同じ母音を「韻」と見なすという指摘は正しいと思う。例えば

女好し酒好し友の旅便り 紫香
スベアキー性善説は信じない 正坊

は、共にイ列（i）の韻を踏んでおり、拗音（ようおん）や撥音（はつおん）も同韻としていいだろう。拗音には甲吉さんの句

人生はよいしよこらしよにどっこいしよ
があり、撥音には俊平さんの次の句がある。

友とまた旅せんかまた泣かんかな
もつ少し論及したいが、紙数が尽きた。

いつか川柳と音韻についてまとめてみようと思つていたところ、たまたま手にした北川春果句集『聴診器』の中に、「川柳における「音韻」について」と題する一文があるのを見つけた。昭和三十四年、『川柳雑誌』に掲載したのを再録したものだ、いま読んでみても価値ある論考であり、専門外のことをよくこれだけ調べられたものだと思う。そこでこの先人の知恵も借りながら、一応、言語学を履修したことになっている私の考え方をのべてみたい。

「音韻」の字義的解釈はしばらくおくとして、古今東西の詩（ポエジー）は原則として韻を踏むものであると言えは少し言いすぎだが、ヨーロッパの古典的な詩は韻を重視しており、中国の古典詩である漢詩には「平仄」「押韻」という厳格な約束事がある。これは詩が本来、口誦文芸であるということから来

銀河系

河内天笑選

愛媛県 久保 良子

ハイハイ妻の元気が有難い
父の日も母の日もない二反五畝

吹田市 山本 希久子

手の上の豆腐も切れず男なり
大失敗から上役の目にとまり

米子市 新 正子

十二まで数えて叱るのを止める
揉めそうな気配に花火打ち上げる

兵庫県 遠山 可住

おもわくにあんじよう乗っているマイク
無農薬虫に半分くれてやる

鳥取県 土橋 螢

太陽が入道雲を呼んでいる
隣の女に体温を盗まれる

鳥取県 新家 完司

神話しか売るのがない霧の村
斧の刃の形に幹がえぐられる

倉吉市 野口 節子

千鳥足 十六夜の月笑み給う

天秤の先に男をぶら下げる

砂川市 大橋 政良

雑踏に迷いのさめぬ足がある

思考するブランコ少しだけ揺する

米子市 林 荒介

唄わない蛍に熱くなっている

こめかみを往き来る数艘の舟

黒石市 千葉 風樹

パースデーケーキを五個に切り分ける

愛食べてやがて悲しく眠る猿

松原市 小池 しげお

どんでん返しを考えている火消堂

釘打ったそこから洩れてくる噂

兵庫県 北川 とみ子

花言葉添えて草餅送る母

気付かず他人の傷をもてあそぶ

箕面市 椎江 清芳

ボーナスが新車に化けて走り出す

退職金出るまで女房はなれない

名古屋市 藤井 高子

おむすびの真ん真ん中にある誠意

脳細胞も天引きされてゆく加齢

大阪市 津守 柳伸

体型へしようことなしの和服党

仲のよい浴衣を見せる祭りの灯

大阪市 松尾 柳右子

口八丁手八丁で情深し

青森市 工藤 甲吉

目が覚めたように芽を吹く百日紅

通院の帰り女のとこへ寄り

和歌山市 堀畑 靖子

弱虫な男に恋をしたトマト

叶うならあなたと生を奏でたい

羽咋市 三宅 ろ亭

向井さん銀河の美しさ話してね

自己のワル正当化して悔いもせず

寝屋川市 平松 かすみ

離陸トラブル ナンマイダナンマイダ

実印が欠伸しているみな達者

姫路市 北条 てる代

古里の息吹き聞こえる国説り

はんなりの笑顔の裏にある野心

唐津市 浜本 久仁於

死神が来て表札を裏返す

蟬泣く日戦友名簿朱を入れる

姫路市 中塚 遊峰

辻棲を合わせて罪に追い打ちを

幸運が舞い込むように門を掃き

西宮市 西口 いわゑ

どうしても倒し切れない旗がある

藤井寺市 高田 美代子

一周忌わらい話がたんと出る

西宮市 奥田 みつ子

落日のクレーン明日を待つ構え

寝屋川市

江口

度

瓶のふたあける時だけ甘えられ

姫路市

大原

葉香

いい風が吹いて一日早う暮れ

今治市

渡邊

伊津志

話しかけるように庭石据えてある

羽曳野市

吉川

寿美

病室へ今日もラッパを吹きにゆく

香川県

高橋

宅

これ程の星をひとりでもらう宿

八尾市

片上

英一

飲み放題食べ放題がせつなくて

和歌山市

森口

美羽

うしろ髪引かれぬようにマイペース

京都市

松川

杜的

父の日に妻がお祝いくれました

福岡県

本田

忠男

二人きり妻が喧嘩を吹きかける

広島市

森田

文

十二支がどこかで狂う酔いの果て

今治市

越智

一水

正直に水は語るよ世の汚れ

和歌山市

池永

正雄

印籠のようにカードを振りかざす

鳥取県

乾

隆風

たてがみを優しく撫でて馬に乗る

阪南市

深日

白光子

政変に場慣れしてゆく不仕合わせ

堺市

高橋

千万子

今拍手してはいけない人と居る

大阪市

梶本

路児

Tシャツの胸つき上げている若さ

枚方市

海老池

洋

救急車時を争う音で去り

黒石市

相馬

一花

タバコ吸う人の隣でけむり吸う

倉敷市

田辺

炎六

上手ではないが楽しむ歌の道

米子市

金山

夕子

どなたにも読める表札かけている

広島市

中村

要

役人は何でも極秘つけたがり

川西市

氏林

洋敏

古代史の謎に溺れてしまえそう

大阪市

本間

満津子

痛くない腹深られる焼け太り

寝屋川市

堀江

光子

夏来れば会う約束の風の盆

唐津市

市丸

晴子

五十年遺影凜々しく若いまま

唐津市

山口

高明

官軍の旗たなびかせ検査察

唐津市

仁部

四郎

タレントにほめてもらった村おこし

唐津市

山門

タミ

有難く佗しき老人送迎車

愛媛県

中居

善信

蟻の列えつさえつさの声がする

和歌山市

山根

めぐみ

どうにでもして頂戴とだんご虫

枚方市

前

たもつ

謎解きのヒント犯人からもらう

尼崎市

春城

武庫坊

私の時間電話に盗まれる

大阪市

藤田

頂留子

噂など気にせず背のびくりかえそ

宝塚市

丸山

よし津

真紀子節訝え鮮やかに人を斬る

枚方市

八田

敏

妻という味方が時に攻めてくる

鳥取県

上田

俊路

下積み之首から切られゆく不況

八尾市

山下

美津留

また妻を鬼にさせます終電車

柏市

上鈴木

春枝

思春期の入口に立ち無口なり

米子市

林

瑞枝

珈琲に凝ってロンドンまで出掛け

鳥取県

谷口

次男

長所だけ接写レンズで撮ってみる

高槻市

乙倉

武史

人間に出来ぬ蟻を犬にする

鳥取市

前田

一枝

大臣の椅子くるとよくまわる

和歌山市 桜井 千秀

先ず先ずの暮しにもある上中下

河内長野市 水谷 正子

お位牌がメロン食べごろ言うてはる

大阪市 板東 倫子

仙人のような総理もよろしかろ

東京都 清原 悦子

目隠しをされて世間の裏が見え

鳥取県 田賀 八千代

月満ちて鬼も寄り道せず帰る

今治市 矢野 佳雲

脱ぐ文化やましく思うことが減り

米子市 石垣 花子

波風が立つとご飯がまづくなる

大阪市 尾崎 黄紅

猫が見ていたわたくしの隠しごと

広島県 田村 新造

コンビニの弁当に慣れまだひとり

鳥取県 江原 とみお

逆風だ鎌首上げぬ方がよい

旭川市 朝倉 大柏

妻の目にいつも光っていたい夫

枚方市 濱田 良知

よいことがありそう生駒よく見える

海都市 谷口 義男

空想の世界誰にも邪魔されぬ

岸和田市 田中 文時

小遣いを残り日数で割ってみる

単身赴任 男は一度憧れる

海都市 三宅 保州

いろがみの好きな色から鶴になる

大阪市 川原 章久

友が来てフアッションショーの部屋になり

八尾市 高橋 夕花

白を白と言いい切ることのむつかしさ

田川市 松元 寿永

大人にはなりきれぬ子を旅に出す

唐津市 浜本 ちよ

道化師の笑顔に深い哀がある

鳥取市 小谷 美ツ千

直木賞神にもらって弾むベン

米子市 小西 雄々

ちよきちよきと切つてあげたい村山さん

札幌市 瀬尾 六郎太

おんどりがどじょうくわえてプレゼント

鳥根県 岩田 三和

何故と聞く子へ満足がさせられぬ

姫路市 小井里 兆

残り火に賭ける女の若づくり

藤井寺市 中島 志洋

満月よ そつかと愛想ない夫

豊中市 田中正 坊

ほんわかと酔うてあなたに傾斜する

吹田市 西岡 豊

相槌が上手な太郎冠者の首

倉吉市 最上和 枝

銘水の村の真夏が騒がしい

弘前市 一戸 ツネ

野仏の膝を埋めてる花供養

倉吉市 奥谷 弘朗

お手なみが鮮やかすぎて声も出す

姫路市 服部 一典

お父さん譲りの指を娘が嫌い

宿毛市 岡村 千鳥

言い訳はよそうあんなに月冴える

鳥取市 西原 艶子

貧しいが一番うまい夕ごはん

大阪市 今西 静子

負けいくさ忘れたような丸い月

摂津市 井上 源一

熱帯夜 右脳左脳の装いのび

香川県 山地 マツエ

老母の夢 余生家族と暮したい

弘前市 中山 雅城

手をつなげばきつと仲良くなるだろう

香川県 高橋 たみ

ホオズキを鳴らすこつなど忘れたね

京都市 都倉 求芽

少しずつ大人の味になるレモン

和歌山市 青枝 鉄治

汚職への誘いないまま職を退く

茨木市 藤井 正雄

香川県 新川 マサエ
パチンコ屋妻の土産も忘れない

鳥取県 乾

喜与志

堂々と日本国籍持つ米だ

大阪府 渡部

さと美

笑いぐせつけて仲間と若返る

米子市 澤田

千春

刺をもつ人からすいと逃げてゆく

倉吉市 野口

御前

外人に貰われ英語わかる犬

出雲市 園山

かおる

忘れろと言っても忘れ得ぬ雲よ

松江市 松浦

登志子

女の子 千秋真紀子があふれそう

青森市 漆戸

凡々子

野苺が熟れ青大将恋をする

静岡市 小木

久子

齢だけで老人なんてきめないで

鳥取県 土橋

はるお

爪の垢ほども信仰心がない

鳥取県 田村

きみ子

秋の空恋を捨てたり拾ったり

鳥取県 土橋

睦子

どなたにも八方美人して疲れ

鳥取県 岩崎

みさ江

忘却の鍵を時間がくれました

流山市 神田

治

白くて丸くて軟らかいダンスのパートナー

羽曳野市 麻野 幽玄
来世の布石 私の寺詣り

西宮市 亀岡

哲子

単純な手相で軽く生きている

和歌山市 西口

忠雄

天罰は鏡の中にいる自分

姫路市 丁坪

サワ子

上向いて歩くと足を掬われる

和歌山県 中後

清史

スベアキー返して夏の恋終る

米子市 茂理

高代

もう少し歩けば虹も見えてくる

静岡県 藺田

猿沓

朝露と毎一緒に食べている

熊本県 高野

宵草

子がみんな離れて家が広すぎる

岡山県 富坂

志重

まだ隠したきこと一つ神の前

青森県 諏訪

明雄

花の道ひとりはやはり淋しいね

出雲市 板垣

夢酔

借金があつて死なせてくれません

和歌山市 田中

みね

諍う気も失せて許せぬひとを絶つ

有田市 生馬

美美子

いつまでも泳いでいたい母の海

姫路市 本上

まさ子

黄信号点滅 母のもの忘れ

唐津市 久保 正剣
ハミングで湿った風を追い出そう

鳥取県 橋本

孝原

折々の恋を知ってる花時計

和歌山市 玉置

当代

事なかれ主義で自分をまた殺す

守口市 森川

まさお

端っこで撮られて同じ写真代

兵庫県 玉田

三重

円陣で競う心に火をつける

広島市 流

奈美子

湧き水をいただいてると生き返り

大阪市 上田

柳影

かき氷やっぱりこれが一番だ

鳥取県 権代

康女

ひかえめの女がやっぱり美しい

姫路市 福島

姫女

歪んでるとこ面白いお城の絵

香川県 木村

あきら

旅先の一句を書いた箸袋

綾部市 藤田

芳郎

アリバイも崩れて妻の王手飛車

岡山県 江口

有一朗

事故に遭い知る平凡の有難さ

五所川原市 斉藤

島

夏の陽がドスンと落ちて生ジョッキ

八尾市 村上

ミツ子

競ってる妻には塩をおくつとく

苗香のむ 八木千代選

猫のように軽く残そう足の跡

米子市 林 瑞枝

別に怠けることを奨励する訳ではないけれど、こうしてそこその年まで生かされて、身内をはじめ数々の生き方死に方をじっくり見させてもらって、その昔、大志を抱いて偉い人になったり、世のため人のために尽くし切って早死にをなさった立志伝の人の生き方など、さして感心しなければ手本にしようとも思えなくなつて、ささやかな人生でいい、荷物にならぬよう、まわりを傷つけぬよう自分も押し潰されぬように人の世に溶けたいと念い、むしろ小市民であつた父や母が、ある種の夢をかけたながらもごく普通に育ててくれたことに運まきながら、感謝が湧いてくるこの頃なのです。しなやかに自然体で歩き続けたその足跡が重苦しく残つて欲しくないと、瑞枝さんは通り過ぎてゆく猫の背からも大事な閃きを素早く捉えました。それはまた私の本願でもあります。それだつて行先だけは見据えていますもの。

池くるとりまわつて旅と思つたり

香川県 高橋 たみ

淡々と語々と表現も普通ですが、読返せばその都度に言葉をはえてくる思いがあります。それは作者の感動が新しくて深いからです。いま体験したことをすらすら書かれたことのみずみずしさが伝わってくるからでしょう。それが池であれ湖であれ、一歩踏み出すたびに少しずつ景観が変わつてきて、まして水面の波ぐあいも見て飽きることはなく、一回りして終点がまた出発点であるということも旅そのものです。いつも自分の横に水のあるという風景なんて、まったく人生さながらではありませんが、そこらまで買ひ物に行つても小さい旅、一日が終わつても旅の中の営み、くるとりまわつた旅には人物がはつきり見えて好ましい作品になりました。

鈴の音いま本筋に差し掛かる

堺市 山本 半銭

渡り廊下の向こう他人と割り切ろう
祈らねば一汁一菜前にして

米子市 野坂 なみ
大阪市 北川 弘子

寺町の真昼にんげん匿される

尼崎市 春城 年代

心の中の風の温度が解らない
ひと度は君を見棄てて時を待つ
晴のち晴すこし情緒にうとくなる
愛される婆で果てたし星降る夜
今日の明日あしたの明日に花開く
下山するところはテレビで映さない
生き残るもしも土俵が四角なら
新聞紙に包んで母の女を捨てる
炎の跡に置くものは何も無い
水は父 母だつたのかいとおしい
山二つ越えても山がまだ見える
なりふりを構わず渡る橋がない
許せ許せと虹もだんだん淡くなる
人生を示す図形か虹の橋
野に咲いて出逢いあふれるほど溜める
猫の目の世相しつかり見据えねば
ロックしてチェーンをかけてうそ寒い
物差しで計ると情け薄くなる
子を打った右手が老いてから疼く
愛犬を死なせせ少年淵を知る
かげろうの中で聖書を読んでいる
わたくしを稿う指輪ひとつ買う
南瓜の花のちいさな自己主張
ブレンド米さきの自信はなにもない
どの彩をとつても虹にならぬなり
アンチツクの時計とわたしだけの部屋

堺市	板野 美子	堺市	横田マリ子	和歌山市	田中 輝子	島根県	松本 文子	米子市	政岡日枝子	和歌山市	古久保和子	名古屋市	藤井 高子	大阪府	西出 楓葉	宮崎	菜月
寝屋川市	宮崎 菜月	和歌山市	高田美代子	和歌山市	茂理 高代	藤井寺市	高田美代子	和歌山市	奥田みつ子	和歌山市	岩本美智子	和歌山市	岸野あやめ	和歌山市	森田 文	大阪府	西口いわゑ
大阪府	西出 楓葉	和歌山市	高田美代子	和歌山市	茂理 高代	藤井寺市	高田美代子	和歌山市	奥田みつ子	和歌山市	岩本美智子	和歌山市	岸野あやめ	和歌山市	森田 文	大阪府	西口いわゑ
大阪府	西出 楓葉	和歌山市	高田美代子	和歌山市	茂理 高代	藤井寺市	高田美代子	和歌山市	奥田みつ子	和歌山市	岩本美智子	和歌山市	岸野あやめ	和歌山市	森田 文	大阪府	西口いわゑ

前進だ暗示は風にくれてやる
 身の上も齢も不詳の鳥を飼う
 粥する敗戦の音響かせて
 言い訳にしてもノートが譲らない
 何のためなんのためにと問う夜更け
 一願の女の顔に紅は無く
 日高川紀ノ川おんな流れてる
 帽子転がす風をだあれも怒らない
 有頂天みんな他人になつていく
 路地の風小さな昔連れてくる
 鬼灯を二つ頂き祖母となり
 早寝して風のページをやりすこす
 美しい花へ呼び出すひとが居る
 真つすぐな心で言えたありがとう
 若竹の意志炎天にたくまざる
 今日一日のり切る暗示かけておく
 生きているあかしヒマワリ咲きに咲く
 坂の道あじさいいうなずいてくれる
 あの場合で逢わなきや死ぬね夏の蝶
 分身の脱皮うながす月あかり
 神さまの刃やんわり受けとめる
 どの人も仏になる顔耐えられる
 草の波ふるさにと母おわさねば
 小引出し過去巻き戻す音がする
 じりじりとボタンからぬまの今朝
 お向かいにややの泣き声しうれし

米子市	中井	ゆき
鳥取市	西原	艶子
和歌山市	榎原	公子
米子市	寺沢みど里	
和歌山市	福井	桂香
寢屋川市	堀江	光子
和歌山県	小倉	アサ
守口市	結城	君子
米子市	白根	ふみ
和歌山市	福本	英子
八尾市	高橋	夕花
米子市	新	正子
寢屋川市	平松かすみ	
鳥取市	小谷美ツ千	
岡山県	山本	玉恵
米子市	足立由美子	
鳥取県	さえきやえ	
神戸市	向井	泰子
米子市	金山	夕子
寢屋川市	籠島	恵子
米子市	光井	玲子
八尾市	宮西	弥生
弘前市	佐治千加子	
富田林市	片岡智恵子	
吹田市	栗谷	春子
寢屋川市	井上すみれ	

土地神話関係ないネ蟻地獄
 病み抜いて余白は神に問いながら
 通院なく日曜版など念入りに
 あと戻りできぬ私の綱渡り
 行き昏れてまだわたくしの絵に逢わぬ
 螢火を探す女の手が丸い
 かりそめの出逢い雀の知らぬ事
 逢う機会あれば一喝してみたい
 夏最中 花火の音をあなたにも
 こんな時だまつてるにもいる勇氣
 嘘の涙ふくハンカチは持つてない
 見えるほど見えないものに憧れる
 花散つて花のビデオがよく売れる
 棘のないバラを想像できますか
 川下の哀しき色は鮎の歌
 うたかたの虹に救いを求めゆく
 笹舟の流れに添うて風が吹く
 ボランティアひと日の手足満ち足りる
 もう一度生きてる私 掴みたい
 同じ城描いてどうしてこう違う
 花の風入れて採用通知来る
 諦めているのに風が背を叩く
 そこに秋 尾花がそつとゆれている
 隠れんば鬼はとつとく帰っている

投句先 〒683 米子市花園町14-8

◇

西宮市	秋元	てる
米子市	服部	朗子
枚方市	森本	節子
米子市	澤田	千春
羽曳野市	吉川	寿美
倉敷市	小野	克枝
米子市	鹿島	蘭
和歌山市	森口	美羽
米子市	田中	亜弥
堺市	高橋	千万子
八尾市	村上	ミツ子
貝塚市	池田	寿美子
鳥根県	今若	章子
羽曳野市	芦田	絢子
和歌山市	野々	圭子
大阪市	大河未	佐子
和歌山県	杉山	精子
岡山県	矢内	寿恵子
米子市	永井	三津子
姫路市	福島	姬女
大阪市	三浦	千津子
宿毛市	岡村	千鳥
愛媛県	久保	良子
松江市	佐野	木みえ

八木千代



川柳へのおもい

白根 ふみ

何年か前、地方新聞の柳壇に、気楽なおもいで目をやり、一人で笑いながら成程と穿ちに感心して読み耽っていた頃があった。折から近所に川柳の大先輩がおられ、「興味があるなら同好会へ入ってみたら」とのお誘いにも何もわからぬまま入門したのが作句の切っ掛けだった。

それからというもの、人様のものを読むのと、自分が作るのでは全く異なり、苦痛の毎日が続いた。

様子のわからぬまま、初めての県大会では全没となり、それから先輩に付いて各地の句会に出席したが、頭をかかえることばかりだった。

そうこうするうちに、川柳にも核心までのプロセスがいろいろあることが少しは解るようになった。とは言っても何時までたっても疑問符のままで、今も先輩の教えをどうこと

ばかりである。

このところ、川柳へのおもいははてしなくトンネルを抜けかけたところで思ふことは、もつと事物を抽象的にとらえる、想像性を豊かにするなどである。それには土壤をしつかり耕し、したたかに自分を見つめ、その心を川柳を通して主張しなければと考える。

いずれにしても言うは易しで、何事も謙虚にみつめながら、川柳を人生のよき道づれにしたいものである。

何時の日か、やさしい言葉で深いところが詠めるようになったら最高のものと、夢を追っている毎日である。

行く先に灯いちばん遠い道 ふみ

感激家

秋元 てる

私には六十年來の友が居る。三年前の川柳塔社四国白鳥勉強会の時、紫香先生のご厚情で、その友人と一緒に同行させて頂き、その時の川柳塔の雰囲気が好きになってその場で誌友となり、今回は隠岐の勉強会に嗜れて名古屋から参加した。久々にお逢いした方々からは笑顔で迎えられ、出発前には親しく話せ

る方もできたと喜んで話していた。

観光中にもいろいろな方とお話してきたし誰一人分け隔てする人もなければベテラン然とした様子の人もなかった。一日目の宿で友人は安堵と満足で感激の言葉を繰り返した。

さて三日目勉強会の当日、初心もいと句会など出席することがない友人は、私の隣に席を取った。もし方が一、句を読まれたら名を名乗るのだと、呼名の仕方など教えておいた。ところが、瓢箪から駒で一句拾ってもらった。本人はびっくり、私も驚いた。すぐ前列の席の正坊、笛生の両氏は振り向いて喜びの笑顔を見せて下さり、佳秋さんはわざわざ席を離れ、肩を叩いて喜んで下さった。友人は句を抜いてもらったそのことよりも、会の方々が一人の初心者に示して下さった厚い情けが嬉しいと、またまた感激一しきりであった。帰りのバスの中でも、その夜の私宅に一泊の時でも、繰返し話し続けた。

名古屋に帰って記念のスナップ写真を送って来たので、私から一枚か二枚差し上げた。するとそれぞれにお電話やら丁寧なお礼状をもらったと、またまた私の所まで電話して来る始末に、釣られて私まで嬉しくなってしまう。川柳塔社の皆様、有難う。私からもあらためて厚く御礼申し上げさせて頂く。

■句集紹介

石倉芙佐子『花筏』

金村 青湖

「女の子が生れたら可愛らしい服を縫って着せよう。お嫁に行く日には私の手で真っ白いウエディングドレスを作ってやりたい。そんな楽しい夢も束の間に、昭和四十五年の暮れ、心臓発作のため救急入院を致しました。受験生の息子と、幼い幼稚園の娘を残して闘病生活に、声をこらしてよく泣いていた私に、川柳をすめて下さった病友がおられ、新聞投句をしたのが川柳との出会いでした」これは著者あとがきの書き出しの部分であるが、私が芙佐子さんの名前を知ったのは、投句を通してのその頃でした。

離壇も飾らぬままに母病みて
吾子のため生きる命の火を燃やす
木枯らしが吹く 対話なくした親と子に
妬心何故病める女の胸に住む
風邪の子に歌って聞かす春よ来い
初心当時の句だから、感傷的な部分もある

が、病む母の心情が切々と詠われている。

作品は年代別に五章に区分され、七二二句が収められている。序文は久家会長不調を押しての執筆、規格はB6判、装丁は上製本、二〇四頁、表紙の布貼りもシックな色彩で、著者の人柄を思わせる清潔感が感じられる。花も生き私も生きている夜半

紫蘇巻きの頃だと老いた母を恋う

散り際を風は論じてゆくばかり

転がって走って霞後を追いつ

ふと過去がよぎる浴衣の袖通す

好ましい色に染つて来た家紋

夫と息子に浴衣揃える夏祭り

五十五の峠を越せば春の海

根つからの善人鬼の豆拾う

著者は一句一句、非常に大切にされているのが窺える。平素私たちは、句会吟を軽視する嫌いがあるが、ノートには課題を記し、○

選、年月日もちゃんと書いておられる。指一本入る甘さで繋ぎ止め

雪さんさ男と女の紙芝居

欠けてゆく哀しさ想う十三夜

人妻に一枚の絵が踏まれない

蒲の穂で女の傷はまだ癒えぬ

沈黙の器に活ける白い花

桃色の夢を二十歳の娘に着せる

読み進んで行く内に、措辞というか、言いまわしの巧みさを感じる。二十数年と言えはそれほど当年季の入った柳歴とも言えないが、意表をつく表現は著者本来のものであろう。

芒野はうつろいやすき風の径

向日葵のさんげ話は雨がよい

逃げ水に多くは言わぬさざれ石

レモン切る厚い薄いと云う人に

れんぎょうを秋に咲かせた罪ひとつ

秋の月耐えねばならぬ事多し

過去形で話すしかない遠花火

月はいま女の胸のまん中に

火の海を抜けても業はまだつきぬ

燃えた日はさだかにあらず曼珠沙華

遠い娘へ心通わす花筏

娘の船のたゆとつ果てを見届ける

銀杏の落ちて訣れは深くなる

以上年代を追って二十数年の労作の一部を紹介したが、総じて言えることは、芙佐子作品には、短詩文芸の本質である空白の部分があり、読者に多くの思いを与えてくれる。それは詩のもつイメージの世界とは一味違った、作者独特の叙情性ではないかと思う。

今後ますます精進を重ねられ、第二、第三集の『花筏』が上梓されることを念じたい。

南 通 南 秀 雄 伊 重 ツ 明 芳 希 甚 舞 剛 艶 勝
泰 彦 み 雲 仁 和 正 隆 津 人 ネ 水 郎 子 一 影 治 子 巳

万歩計　野山の見える町に住み
野の山葵味も香りも自慢せず
野仏に誰かやさしい菅の笠
ひっそりと野菊の似合う亡母の墓
ふる里に母あり野には月見草
野の花をいっぱい摘んで暮まいり
里の野に君は匂をまだ残し
てっぺんの視野から消えてゆく味方
野仏に花一輪のさんげかも
四季の種まいて野良着の似合う老母
あだし野に佇つてわたくしとりの葬(訃)
妹の知つてゐる歌になる野道
野火走るなにかを追うて行くように
枯野から微かな音がしたような
野に立てば村は親しい人ばかり
住
野に還る穴は小さ目に掘つておく
果てしなく枯野がつづく余命表
野良犬の群れにまじつて吠えている
野を追つて虫かごはまだ空のまま
野仏の一基が水を乞ふ
人
野に立つてわが身の丈の小さいこと
地
はすれくじいつまで持つてゐる枯野
天
野あさみの枯れて別れの刻となる
軸
風と出て一度は捨てた野に戻る
門谷たず子

紀一
たもつ
章久
良子
高代
倫男
忠男
可住
京子
源一
美
しげお
時弘
美代子
たつみ
かおる
白光子
良知
良江
寿恵子

入門

伊藤寿美選



入門はみんな真面目に同じ顔
茶道入門すこしおんなを取戻す
ロボットが入門せずに寿司握る
入門のその負けん気を見込まれる
入門書また取り寄せている夫
入門の日の約束が胸に棲む
入門を許す きびしい師の眼
筋がよい入門当時はめつづけ
入門へ妻の化粧が濃くなる
入門のカバンに家訓入れてやる
入門書に頼る児育で核家族
どこへ入門しても個性が事起こす
迷う度助けにくれる入門書
入門の時は確かにあった虹
入門書五冊も読んで諦める
入門書趣味は選べと書いてある
入門書手引書もなく親になる
入門の前に補聴器確かめる
晩学に座右に侍らす入門書
入門が同期だったと自慢する
その内に宇宙旅行の入門書
新弟子の入門を待つちゃんこ番

一壺 たず子 正剣 たつみ 良江 伊津志 きみえ 柳五郎 京子 源一 彩子 みね 正子 大柏 保州 芳郎 希久子 洋敏 多賀子 たもつ 正雄 あすま

年金の枠で入門書を選ぶ

入門へ試験つまずく石ばかり

三日坊主こんどは何の入門書

書の門の入口にいて墨をする

入門はしたが正座がままならず

変人の芸へ変人入門す

裸から見せて分けいる入門者

手ぶらで来たので入門許される

まごころを知る入門の戸をたたく

入門へ背丈の伸びるまでを待ち

入門の同期がライト浴びている

下積みの苦労は書かぬ入門書

入門書簡単に書いてある

残り時間を入門書から拾う

助走路に積まれたままの入門書

佳

入門のことも男が隅に居る

感動した一句 それから門叩く

裏表紙めくると高い入門費

才能に少しも触れぬ入門書

入門書扉の軽さ載せて来る

人

入門書 道の遠さは書いてない

地

入門書よりも子育て母に問う

天

入門書に少しずつ落ちている鱗

軸

入門の師が好きになる乱れ髪

凡々子

雄々

ツネ

螢

満秋

ただし

忠男

しげお

艶子

新造

よし津

武史

落児

日枝子

洋

可住

文子

かおる

舞鳥彰

清史

(宙) 寿美

ちかし

夕子

跳ねる

吉岡美房選



天に睡蹴った小石が跳ね返る

跳ね起きた子に約束を守らされ

少年が飛び跳ねている古日記

癖のあるあなたの文字が跳ねている

跳ね返り怖くて鈴が付けにくい

あの時に跳ねられたのがはくの運

跳ねつけてみたが気になる子の無心

鯉の値が跳ねて浪速の夏祭

泥跳ねた車をにらむ白い服

俄雨滴音符となって跳ね

生簀から跳ねる魚にある謀反

子育てが済む日へ跳ねる青写真

釣り上げた魚が跳ねてる泣いている

跳ねるからボラはカモメに狙われる

泥はねて隣家の車出て行った

跳ねすぎた女がはまる水溜り

組で跳ねては鯉の名が廃る

盆踊り日本中が跳ねている

鍵盤に小さい指が跳ねている

檀山の芝居が跳ねて皆寡黙

失敗を重ねて跳ねるバネにする

トーストが朝のリズムに跳ね上る

(宙) 寿美

和重

里兆

高明

帆雀

たもつ

通彦

清芳

志洋

明水

俊路

可住

葉香

南奉

敏

寿恵子

虹汀

満秋

よしみ

さち子

艶子

(宙) 正雄

盤上に王手の駒の跳ねる音

湯上がりビールが喉で跳ねている

もう跳ねず転がるばかり僕の毬

よく跳ねる毬は垣根を越えたがる

逢うたびに跳ねるわたしを笑えるか

一度だけ跳ねてみたいねカタツムリ

愛跳ねて橋の長さに気付かない

えびフライ波乱呼びそな音で跳ね

まだ跳ねる海老の命をのせる舌

跳ねすぎる妻に我が家の乱気流

跳ねるなど肋の骨が弱音吐く

いいことがあって返事が跳ねている

命綱の範囲で跳ねている男

溜息が跳ねた舞台に残っている

シャワー全開 鬱も泪も跳ねとばす

佳

ワテンテンポ遅れて泥を跳ねられる

おとなしい子も跳ねる子も私の子

とび跳ねる夢は捨てない車椅子

起承転結 転のあたりで跳ね返す

ナレーションばかりで跳ねるのをやめる

人

少年が跳ねると風が渦になる

地

時々跳ねて若さを確かめる

天

跳ねるのは止そう哀しみ深くなる

軸

跳ねすぎて見事にかかる足払い

(池) 正雄

剛治

希久子

正剣

夕子

一花

克枝

めぐみ

勇太

時弘

日枝子

美代子

保村

狸村

たず子

悦子

重人

鉄治

しげお

雄々

たつみ

ちかし

松本文子

初歩教室

題 — 理 解

吉 岡 美 房

今回は、「理解」というようなむずかしい題でしたが、題をうまく捉えたい句がたくさんあったのは、うれしいことでした。

しかし一方で、添削句としても取り上げなかった句の中には、作者の存在感がなく、表面的で抽象的な句も多かったようです。初歩教室では最初からむずかしい表現は要求しませんが、説明句や報告句にとどまらず、色々な情景が想像できるような句への挑戦を期待しています。それでは添削句から発表します。

親心理解できたが親不在
(親心理解できたが親は居す)

孝男

ものわかりいい親ぶてなめられる
(理解ある親を演じて馬鹿にされ)

圃幸子

再婚へ温い理解のある絆
(再婚へ子等の理解が踏み切らせ)

武春

子と別居ブライベートな事言わず
(つかず離れず理解し合って子と別居)

三千子

理解ある母は正座の聞き上手

行子

(理解ある母は正座で聞いてくれ)

理解度を見せたくない小言聞く

忠男

(理解する気配などない小言聞く)

わかったと言いつつ裏で意地通し

りつえ

(理解しているのに意地を通す父)

子と別居理解はしてるはずなのに

(令)章子

(理解したはずの別居にある不安)

理解ある子達にかこまれ日々楽し

志重

(趣味楽し理解ある子に囲まれて)

両親の理解よすぎるの不安

ふさ子

(両親の理解よすぎるの不安)

理解よい人とおだてにのっける

半量

(理解ある父とおだてに乗っておく)

理解した筈で許した空虚感

義男

(理解したつもりで親の空虚感)

娘には理解させたい事ひとつ

宅

(子と思う心 娘は理解せず)

相互理解何時の事やら嫁姑

ツネ

(理解ある姑と自分だけ思う)

理解ある亡姑に教わり娘に伝え

(由)正子

(理解ある亡姑を見習い姑となる)

お互いに理解しあって平和です

颯静子

(嫁姑理解し合っている平和)

姑の理解にあまえ共稼ぎ

ますみ

良き理解者だった義母いま土の下 姫女

(わたくしの良き理解者であつた義母)

暗黙の了解そつと目を瞑る (楠)章子

(理解してくれた合図へ目をつむる)

カタカナ語理解せぬことが多すぎる フク子

(大人には理解できないカタカナ語)

カタカナ語理解しにくい事多し ふゆ子

(カタカナ語理解できない娘の会話)

飲み込みが悪くてあなた許せない 美羽

(飲み込みが悪くて理解できぬ彼)

恋人の心の理解むずかしい 孝原

(恋人が理解できないあとと歩)

理解するが越してはならぬ義理の壁 郁子

(理解しているのに恋をはばむ義理)

理解してすぐに忘れる年になり (楠)嘉子

(すぐ理解できるが年が忘れさせ)

老い一つ理解したはずすぐ忘れ (楠)弘子

(理解したはずを忘れて年を知り)

理解ある女房毒の針を持つ 君江

(理解ある妻が一針針を刺す)

理解する前に爆発してしまふ 泰子

(理解する前に爆発する夫)

理解ある夫と歩んだ五十年 八重子

(理解ある夫でわたし翔んでます)

妻だけは理解してます僕の癖 克美

双方が理解し合つて仲なおり 美寿子
 (仲直り理解していい言い出せず)
 理解してもらつつもり酒を注ぐ ミツ子
 (理解さす魂胆あつて酒を注ぐ)
 理解ある亭主に感謝の余生です 知香子
 (理解ある夫で余生趣味に生き)
 理解しているつもり夫にいた女 侑里
 (理解したつものの甘さ浮気され)
 新時代理解に暇のいる婆さん 美恵子
 (新世代理解できずにとまれる)
 理解した気持の返事トンチンカン 高栄
 (おばあちゃんといふかんなく理解する)
 天才か理解を越えた息子の絵 あずま
 (天才か孫の絵理解越えている)
 理解した振りしてウンウンと頷き (内) 静子
 (理解した振りもしておく老いの知恵)
 ある時は理解足らずに愚痴も出来 悦子
 (理解しているのに解つてくれぬ愚痴)
 またしても自己中心の早とちり 一壺
 (理解したつもりが独り合点とは)
 理解してほしい胸を叩いて訴える とし子
 (理解してほしい無口が口惜しい)
 ふんふんと理解したよな顔をする 源一
 (理解度はあやしい祖父の生返事)
 呑み込んだ理解苦しむ腹の虫 三重
 (賛成が理解できない腹の虫)

初心者に理解しにくい説明書 しのぶ
 (読めるけど理解できない説明書)
 頃合いかこころで理解示しとく 勝巳
 (この辺で理解を示す処世術)
 鴨川の流れに恋の理解して 三重子
 (鴨川に理解されてる夏の恋)
 心ない理解素振りにあらわれる (松) 幸子
 (理解した素振りといふ付焼刃)
 諦めへ理解したのと勘違い 一典
 (諦めただけを理解と勘違い)
 政局が理解する間にまた変り 彩子
 (政変に理解する間もない政府)
 延命に理解しがたい時もある 三津子
 (延命に理解しかねる無理がある)
 民族の理解し合ひで得た平和 辰男
 (民族の違いで理解せぬ戦)
 理解してほしいと主張押しつける 芳枝
 (理解してほしい政治を押しつける)
 組合も理解しベースダウンする 義子
 (骨抜かれ理解し合っている労使)
 連立へ政策理解出来ぬまま 武春
 (国民に理解できない数合わせ)
 着想・表現ともに立派な句 幸枝
 理解した振りが反旗をひるがえす 黎之助
 国民の理解を越えた永田町 隆
 夫婦でも理解するのに時が要り

金婚へ愛と理解と信頼で タミ
 理解する基準親子で食い違い 三津子
 孫の顔理解の溝を埋めてくれ 勝巳
 欠点を理解し合った共白髪 辰男
 お世辞だと理解してても嬉しがり 笑
 ビカソの絵理解できぬがかけておく さち子
 理解せず右へ並への拍手する 一典
 手加減の父の心を理解する 芳水
 理解したはずの意見が的外れ 半畳
 理解しているのに言葉出て来ない よしみ
 宇宙まで理解できない距離を飛ぶ 瑠美子
 喧嘩から理解深まり無二の友 一乗
 子の論理母の理解を越えている 絢子
 脳みそが理解できずになすねている (中) 弘子
 理解ある母を演じて肩が凝り 碧
 わたしにも理解のできる政治欲し ふさ子
 尊厳死理解はするが忍びない 幸夫
 空か無か理解せぬまま逝くだろう 文子
 理解したつもり世代の壁がある キヨエ
 子の心理解してない捻子を巻く めぐみ
 御理解を賜りたいと寄付が来る 君枝
 目の位置を変えて子供を理解する 君江

題「雲」 9月15日締切(11月号発表)
 宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4
 吉岡美房

老地物語

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳高知

川竹

松風報

見るだけで今日は財布が軽いから
軽い気で乗った話の落し穴
軽口が眠れぬ過去をあばき出し
たんぽぽがふわり浮気の風に乗る
母の日は亡母の好みの花を買う
意地悪もして初恋の照れ臭さ
生意気にご意見老姑に申し上げ
球場をサッカー熱が駆け抜ける
お隣の芝生緑に少し負け
草餅の香りが亡母を連れてくる
お手植の松も緑の色を増し
確実に緑が減っていく地球
視野いっぱいローカル線にある緑

倉吉川柳会

谷口

次男報

固そうでとつても脆い金庫番
空き缶を鳴らして雀踊らせる
雨の日は家という缶詰の中
秋人
とみお
寿満湖

自販機が無粋な音で缶コーヒー
空き缶で日本海を埋めてしまえ
罪負うて空き缶風にごろがされ
要求が通らず上司缶詰だ
缶ビール冷やして夫待つ平和
缶ビールにされて犯人取り調べ
捕鯨禁止クジラの缶詰国宝に
舳舳別れわかれになる形
立ち枯れてゴメンナサイという形
お菓子モゴモゴテレビ只今キスシーン
菓子鉢の最後の一つを食う勇氣
キノコ雲今も形は忘れない
形では老いても中身崩さない
大人つていいな酒呑み菓子も食う
言にくい言葉にアメをくつつける
腹が出て姿見なんか見たくない
缶詰の日付よく見る隠居部屋
お菓子の隣に歯科医越して来た
親に似た爪の形が気に入らぬ
おん礼の形にいつもこたわっている

岸和田川柳会

田中

文時報

御前
石花菜
柳風
幸子
和枝
かつみ
次男
日枝子
完司
苦句
秋女
独歩
康子
秀峰
サカエ
碧水
ゆり子
螢

釣銭の手がもどかしい発車ベル
帰宅後に釣銭合わぬあわて者
釣銭の一円玉が増えつづけ
釣銭を読みながら飲む立吞屋
朝市の釣銭掛声入りでくれ
手伝いが船をあやつりもめている
履歴書へ家事手伝いと書く無職
手伝うより塾へと母が叱言いう
手伝いが何時しかシテになっていた
こまやかな心遣いのお手伝い
折り鶴を手伝う母の手が温い
手伝いがマゴマゴ邪魔だとも言えず
半世紀タイムスリップクラス会
同窓会過労死二人欠けている
見栄ばかりうずまいでいる同窓会
選挙だけ同窓生と頼られる
手弁当で寄る同窓会に味がある

ほたる川柳同好会

井上

直次報

眉毛から困った顔になつてくる
結論を押しつけているインタビュ
困つたら来いと言つたらすぐに来た
第九条厳と在るべし敗戦日
日々新たそして私の作業着も
日々新た日毎初日の新舞台
年金の入る日老体軽い足
俸せで日のたつことの早さかな
巢立つ日が近くなつたかタバコ吸う
向日葵も憶えているか敗戦日
瓢人
東雲
真柳
勝晴
浪速子
京
呂万
甚一
ひで
さよ子
狸村
柳宏子
文時
信博
富志子
通彦
一弥
薫風
福一
直次
ただし
螢柳
眞郎
明光
吉太郎
博史
馬洗

古希の今生命拾つた終戦日

父の日は何故か氣勢が今一つ

嫁ぐ日は父の小言も聞けぬなり

過ぎし日の青春讃歌「支那の夜」

終戦日危うく生命よみがえる

赤とんぼ面影もない都会の日

亡夫といいた日々の幸せ抱いて夏

胃カメラをのむ日朝から油照り

考えておきまひよ又日をあらためて

ほどほどの汗の日課に茄子胡瓜

キャンセル待ちで乗ったジャンボの運不運

三幸川柳教室

三宅 保州報

やり癖ついてもいい運勢もくれてやり

嫁ぐ娘の先々案じカード切る

天衣無縫いい運勢がついてくる

運勢の狭間で揺れる赤い糸

百八十度運勢変えた子の進路

欲捨ててから運勢が上を向き

晩年運信じて重いペダル踏む

運勢に曳かれて登る未踏峰

子捨て鳥血を吐くまでも鳴き続け

鳥肌の立つてくるよな嘘を聞く

羽振りよくなると賤しい鳥になる

焼き鳥の串三本のうさばらし

棒高跳びブカの背なに羽根を見た

鵜飼い船拍手の中で哀しい眼

声の弾みて娘のしあわせをキヤツする

華やかな舞台上に声のない黒子

方郎

純次

一笛

祥司

竹二

清史

英子

敵子

紫水

瀧小

幸子

かなめ

美智子

恵美

当代

三千子

高夫

朱夏

公子

よし子

武春

靖子

正雄

章子

和子

初子

満州子

ひと声をかけて非行の紐がとけ

大声を出すのも良いと言う内科

声荒げ威圧の背なにある悩み

よく通る声で秘密がすぐ洩れる

ライバルも頑張ってるな声の張り

アンコールの音が嬉しい二度の職

親愛の一声胸の中に棲む

ICU命拾いの声を聞く

單身赴任夫婦の声が揃わない

二番手の声を背中で感じて

モンローの胸は見せない憎い風

親友の胸にストレス捨てて行く

ドイツ語の医師が私語する胸さわり

花束が胸のときめき聞いている

南大阪川柳会

金井

文無しにさせぬカードで恐ろしい

幾重にも包んだ老母の宅急便

真夜中のベンがますますびえてくる

文無しの軒につばめが巣を作る

文無しが大きな話ばかりする

包装の中身が先にくる電話

ポケベルの範囲であなた泳がせる

夜更かしのツケだと思ふ聴診器

夜更かしのつげが三日もおらない

文無しを笑った友に貸しがある

文無しになって解った世の温み

泳ぎきりフラッシュあびる新記録

針の目に老眼意地を通して

さち子

道子

西秀

千子

町子

保州

信子

みね

百合子

昭枝

悟路

親路

鉄治

桂香

文秋報

楓楽

柳宏子

寿美

千里

庸佑

凡子

源一

重人

智子

柳伸

真砂

頂留子

秋子

夜更かしも人それぞれに善と悪

文無しの啖呵に木霊かえらない

老眼鏡はずしスピーチ興にのる

老眼がずり落ちてくる小糖雨

老眼鏡行方不明が好きらしい

城下町若葉の水に泳ぐ鯉

包装が店を誇示する御中元

文無しの気持文無ししうわかる

包装をしていのように晴着させ

首に紐つけられ妻に泳がされ

近々にメダカも泳ぐ宇宙船

文無しの頃は病氣など知らず

たらい回し中味と違う包装紙

給料日待つ文無しのカップ麺

夜更かしの靴が重たい空財布

佳句地十選（8月号から）

小倉ア

卑弥呼から続く寓話の海鳴りよ

文学の窓珈琲にこっている

定年へ鬼の仮面はもう要らぬ

ひょうたんのをのぞけば海が広がりぬ

四捨五入されて私の椅子がない

明日になれば仏の水も汚れよう

思い出すまで風船をふくらます

今一つ吐けば炎となるだろう

脱皮する蝶に信じる風がある

鮮やかな復讐 川に水が無い

勝美

悟郎

憲太郎

章久

直子

萬的

志華子

文秋

度

東雲

スミ子

トミ子

三男

智久

千梢

サ

勇太

元紀

松風

比呂子

三千子

日枝子

螢

ちえ

帆雀

透太

包裝紙集めて祖母が紙細工

川柳塔おつぱこ吟社

木村あきら報

岩信

お多福も鬼も私の中に居る

練りにねりやや本心に触れてくる

握手した手が味方とは限らない

住民は川の怖さを知っている

食卓の器が味と色を添え

輝いた日もある過去のカレンダー

シルバーの誘いに弾む靴をはく

記念樹も六十年の枝を張り

病院で夢を持つ人捨てる人

住む人の心が判る町の顔

他人の花余りきれいでつい盗み

まあまあ暮し満足しています

かしわ手を打って待ちます青田圃

一枚の紙も折りよで祝い鶴

逃げ道を作って参加の呑み仲間

勝負師が作戦を練る勝つために

子に従いて波風立てず余生行く

初孫を土産に娘が里帰り

川柳クラブわたの花

片上

英一報

枝豆を食べたべ話切り出せぬ

幸せを折って母の豆ごはん

豌豆の優しい花よ子沢山

豆板屋閑古鳥泣くはだか球

そら豆のわずかを添えて季節膳

豆ごはん朝のけんかも混せて炊く

くに子

吟笑

マツエ

あきら

放任

ひかり

マサエ

チカエ

いさむ

正雪

迷貫

よしみ

かおり

治延

文仙

中なみ子

ふみ

白柳子

英一報

シマ子

一風

千枝子

暁子

君江

しのぶ

ずんだ餅姑の得意な豆の餡

豆食べる無心に動く手が動く

豆の蔓枯木に重くのしかかる

納豆が出番待ってる冷蔵庫

豆もやし大地に根っこ張りたかろ

撒いた豆ひろい集める夜半の鬼

命日は母の煮豆に花が咲き

年寄りに喜ばれない落花生

母の味おにぎり二つ竹の皮

初なりの胡瓜そのままろみそえ

コガネザワ君周富徳にいどむなり

定年で戸籍を抜けて行つた妻

血統書飼主よりも偉い犬

封印をした思い出は語らない

金魚の世話子育てに似て血が通う

どうにでもしてよと金魚掬われる

スターなど居ない我が家の金魚鉢

妻とふたり終のすみかの豆ごはん

川柳東大阪

森下

丘の霧奇跡はきつと起こるだろう

贖罪の丘に曼陀羅雲が浮く

丘越えて過去の続編書き続け

他人とは思いたくない妻である

少し明るい話題をくれるのは他人

悪いことは悪い他人の子を叱る

赤ちやうちん他人の噂聞いてくる

手のひらに書いて字面を確かめる

筆不精でも書いてる借用書

道子

トシエ

明子

実希子

剛治

弘直

友甫

泰成

龍

雅恵

英一

春子

幸枝

初子

隆

ますみ

美津留

鬼遊

愛論報

湖風

信治

真柳

元紀

度

恒明

猪太郎

孤舟

恭昌

鍵つ子に嬉しい母の走り書き

書いたメモ忘れたままで市場籠

能書きを並べセルフス自画自賛

偽りを見抜かれそうなまぶしい瞳

親の目に嫁ぐ娘眩しく惜しまれる

鎮座する阿弥陀の瞳まぶしすぎ

生ぬるい彼の返事にある疑惑

ぬるい湯で長風呂いつもうとまれる

ぬるい湯を注いで玉露のまろやかさ

川柳後楽吟社

従野 健一報

贅沢な舌た芋粥がうまい

わだかまり捨てて空気が軽くなる

ここそこに花を咲かせて亡母に会う

曲りくねった人生後戻りは出来ぬ

ゆさぶりを慌てず齢が受けとめる

スカートの気になる自転車罪な風

たのしげに見える老いにも悩みあり

貸菜園笑顔の朝が美しい

見せ場ない人生だけ腰を据え

父の貨車やすらぐ駅はまだ遠い

義理ひとつ済ませば回る両車輪

老いらくとなつて真の愛を知る

歯車に素直な私が今孤独

これ以上無理ですよそへ行ってくれ

筋書きのないドラマにのめり込み

親切はみんなが秘めている宝

雨のない庭で残像の紫陽花よ

子を作る才能はあり子沢山

庸佑

潔

頂留子

愛論

柳宏子

東雲

太一

高尚

勝美

草風

拓治

美智子

哲郎

佐加恵

柳五郎

博友

正秀

道博

桃風

邦季

吉則

幸子

玉水

金吾

健一

秋月

結んだ口に負けし魂ひそませる
不況なり湿った空氣散らす酒

義親
照路

岩美川柳会

羽津川公乃報

永田町あらしの風が吹きぬける
そよ風が仏のはほを撫でてゆく

孝由
單車

風向きは寝ているうちに变えておく
水いらす等言つては居れぬ子は四十

一京
美代子

相席で水が取り持ついい縁
俺の帰りを待っていた背戸の水

嘉津江
喜与志

したたかに生きる泥水ですする
いささけは水に流せと夜は更ける

忠良
孝男

一輪の花にも水という命
水のある地球に感謝して暮らす

きみ子
芳江

水すましくくる川をバトロール
泥水を飲んで男は鍛えられ

公乃
黙光

老夫婦きつと越えます水たまり
ネッシーの嘘に水神さま怒る

睦子
大漁

羊水の中でノックをする命
こだわりの水がのれんに沁みてくる

美恵子
照女

突っこんだ話に水が洩れだした
螢

螢

川柳塔まつえ吟社

恒松

苦い水ので世間を知りました
苦い苦い経験がある夏帽子

きみえ
与根一

父のくれた苦い薬が効いてくる
言ひ勝って飲む酒だけどほろ苦い

早苗
房子

苦虫を食った飲みの話好き
いきさつを話せば苦い川の水

満江

苦い経験積んでいるから慌てない
一匹の螢へ家族みんな呼び
休耕田増えて螢の戻る里
螢が飛んで愛されている予感
いつまでも胸の螢は生きている
一度だけ螢も苦い水を飲む
諦めた頃に螢がやってくる
約束を沢山作って夏休み
約束に時計の針は遅すぎる
約束の重さを知った保証印
ぐい呑みの中へ約束置いて来た
当てにせぬ約束だけ忘れたい
約束で小指ばかりが太くなる
息抜きの酒約束を忘れさせ
母さんの太っ腹から笑ひこぼれ
貧しいが心は誰より太っ腹
太っ腹入道雲の空が好き
五線譜に載らぬリズムのみじん切り
リズムカル余命を計る古時計
割り箸のリズムに乗って唄い出す
生活のリズムが狂って戻らない
若い町リズムがあふれ踊ってる
かあさんの笑顔で朝のリズム感
酒一合父のリズムが軽くなる

静恵
清子
茂美
螢

桂子
太泡
文子
みえ
邦代
たつみ
義良
寿美子
友子
静江
知恵子
米子

女同士内緒話は風にのる
野苺のなつかし暫し時忘れ
正義ばかり主張爪弾き詮もなし
夕立の前ぶれ跳ねる雨蛙
臆病な目は隠せない目出し帽
粘り甲斐最後の球で虹と消え
物指しを当てて妻との距離を見る
ばれたなら修正申告するだけさ
国民の為にのかけにある野心
野に瑞氣漲り昇天の竜を見る
天狗には見えぬ敗者の涙壺
岩跳ねる波よ男の海になれ
手を貸さぬ鬼がやがては仏にも
貯めおきし米に穀象うこめける
年式は古いがまだ走れます

桂子
太泡
文子
みえ
邦代
たつみ
義良
寿美子
友子
静江
知恵子
米子

川柳塔唐津支部

久保

結婚離婚吹き出しそなた政治劇
方言で酌する女の太い指
親子酒誰に遠慮がいるものか

正剣報

多賀子
長三
章峰
鶴丸
登志子
佳江
叮紅

目覚めよと一途な父の平手打ち
炎抱く男にめざす椅子がある
ああ文化逆に地球をあつくする
弁護士会の面会で知るシヤバの風
人間の皮を脱ぎたい暑い夜
髪型をかえて暑さに向かう妻
クーラーに負けてしまつた熱帯夜
暑い日は暑い目だけで人を追う
暑ければ暑いで嬉し獄の牙え
両親を目安に生きて金が無い
目安狂って船は浅瀬に乗りあげた
人生の目安六十路の橋渡る

ふさ子
紀一
喜久亭

川柳塔わがやま吟社

宮口

克子報

克子報

治幸
義美
ちよ
朴竜
四郎
幸夫
晴子
高明
旭弘
虹汀
久仁於
タミ
実

鉄治
寿子
克子
緑良
めぐみ
豊太
信子
公子
金子
輝子
稚代

川柳塔わがやま吟社

克子報

治幸
義美
ちよ
朴竜
四郎
幸夫
晴子
高明
旭弘
虹汀
久仁於
タミ
実

鉄治
寿子
克子
緑良
めぐみ
豊太
信子
公子
金子
輝子
稚代

禁煙も出来ず五本が目安です
幸せの目安下げれば満ち足りる
あと五年目安に花の苗植える
バート終え病院行きのバスを待つ

面会へ老母の差し入れ温かい
会いに行く網走少し遠すぎる
面会の病人まわり笑わせる
病む妻を和ませ見舞う枕元

そだったのか面会避けた日を笑う
新生児室この感激は母のもの
また明日も目覚めることを疑わず
愛に目覚め女の憂い深くする

恋に目覚めてうろたえている六十路
健やかな目覚めやる気が湧いてくる
土鈴振る音で埴輪が目覚ます
うぐいすの声で目覚める寸又峽

さわやかに目覚めて足が音頭とる
少年の目覚めは月に吠えている
川柳塔鹿野みか月 土橋

残照を奪う絵の具がみつからぬ
残り火を抱いて余生をたのしまん
留守番なのだな蟬殻だけ残る
残されて一人暮らしになれました

良妻でいようか残り火が揺れる
境内の石をならべる僧の知恵
庭石に座った母のだるまさん
何が不満で背中合わせの石仏

苔の生ず岩で本音を語らない

晶子
佐代子
英子
武春

淳太郎
和重
誠子
光代

千寿子
保州
吞天
射月芳

三男
栄美子
文子
好美

裕美
管報
中良
八重子

八重子
武子
美恵子
保子

富久江
みさ子
実満

どの指も宝石持ったことがない
たくあん味の味を上手に石が決め
境界の大きな石が盗まれる
凸凹の石にも自負があり生きる

均等法娘夫婦を手本にする
悲しみを減らす手ほどき受けている
すり減らす命を生きる道しるべ
口車に乗って旅から買う真珠

子定にない寄り道をして若返る
直情の川の機嫌をとっている
快適な暮らしに慣れた縫いぐるみ
快適に私の換気扇まわす

快気祝してから病ふり返す
感謝する眼差しうけて快し
そう快な朝だゆっくり歯を磨く
人柄の伝わる快い電話

快食快眠このリズムなら百歳までも
快調が続くとあとが恐ろしい
快便快食今日もしっかり儲けるぞ
ごく稀に愉快なことがあり笑う

快く分相応とあきらめた

川柳岩出 小倉

アサ報

綾子
精子
和子
幸子

重徳

節子
久枝
はるお
きみ子

弘子
明美
富恵
かつ乃

喜与志
とお
睦子
三千代

くに子
しげる
智恵子
和子

汲香
隆風
孔美子
完司

螢

子報より庭の蛙が当てになる
はじくるとびっくり箱が出る世間
洗濯機フルに回転梅雨晴れ間
母ががいるただそれだけで和む風

梅雨空を眺めてひとり無為無策
記憶から消したい話ほじくられ
ほじくればみんな持ってる癖七つ
ほじくりの上手な舌にのせられる

古傷をほじくり出してみたけれど
ほじくれば古傷痛む過去がある
風の吹く時は静かにすることだ
それ以上過去をほじくる愛信じ

京都塔の会 松川

杜的報

萬的
武庫坊
圭坊
年代

波留吉
葉子
巨詩
英一

求芽
庸佑
倫子
芳子

ただし
栄

杜的

紳一郎
アサ
愛子
春子

昌子
千鶴子
英子
保子

正直
悦男
忠雄
与呂志

ガス灯の水玉に彼を待つ

磔

蓮の台で夢をみている水の玉

百合子

人違いらしいが会釈して過ぎる

てる

何時死のといふと言ふのも負け惜しみ

笑女

山鶯の声がしきりに下手くそで

達子

お兄ちゃん今度は先手の名のりする

水客

川柳ささやま社

酒井 靖子報

化けてでも一度出て来てほしいひと

恵美

四世代生きた達者な姑がいる

とよ子

自己主張しすぎてないか枇杷の種

純子

キッチン嫁の笑顔が福の神

ふゆ子

今日もまた女の道にけつまずく

とみ子

若き日のシミ埋み火として残り

素水

涙涙幾度潜った女道

つや子

父の道辿って貧乏神に会う

芳郎

若い氣を他人が齡を聞きたがり

ヒサ子

道草をして人情の綾に触れ

和子

横向いた神にお百度踏んでいる

市三

どんな服着ても若やぐ街の風

可住

コスモスも女も強い風の道

靖子

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

隠してた傷が騒いで困ってる

夢之助

叩かれた肩の思いが胃にたまる

定人

満ち足りて困ったことに皮下脂肪

鹿太

時に妻吼えてわたしを困らせる

向西

困ります口では言うが目は笑ひ

ミサ子

早朝に困る万札路線バス

幸代

手品師の裏の話にのせられる

十四郎

溢れ出る人柄写す裏話

末貞一

なつかしい署名があつた裏表紙

紫香

四十一円の切手二枚で娘に便り

弘治

出稼ぎのハガキにつなぐ家族の和

尚利

郵便を待つ人居ない年になり

美々

筆不精ラブレターだけまめに書く

勇次郎

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

前方の火花しばらく見ていよう

夕子

左前笑つた方も左前

富美子

スリの意地交番前で一つスリ

花子

前向きに暮らし笑いの渦のなか

亜弥

前もって集まり知らず真の知己

朗子

たゆまずに前進のみの蟻である

玲子

前ばかり歩いて晴れた明日がある

晶子

前も後もひまわりばかり狂いそう

ゆき

泣くなかれ前向きにこそ明日が来る

日枝子

前向きの姿勢でやれと父の言

紫野

前は前今の誠意を買ってやり

保子

前向きに善処しますと逃げ口上

天雀

前の事泥の中から学びとる

春枝

語らいの前後左右に風の耳

寿々子

わたくしも前ゆく影も回遊魚

八重子

仏壇の前に座って詫びている

千代

ぶきつちやが前に出て来て的しぼる

恵子

不意に落ちるボタンは何の前触れか

瑞枝

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

急所には触れずにおこう暑いから

透太

ガラス戸を開けると怖い夏の夜

柳伸

暑いのにな弱く冷房にも弱い

三男

ねじり鉢巻暑さ忘れたこともある

たもつ

暑い方がよいと夏には言うだろう

頂留子

あのことがあるから暑さがまんする

祥一

湯気の立つ地図を描いたスーツの背

律子

ヒロシマの暑さに焼けた父の影

美幸

空っぽの頭になっていく暑さ

欣之

あれからを死者と対話の夏とする

俊彦

口だけで泳ぐ金魚になりきれず

和樹

一匹になつて金魚を田に放つ

隆

過労死かも知れぬ金魚横たわる

夕花

女関の金魚で癒す旅疲れ

波留吉

羽根伸ばす出張先まで妻のベル

幸雄

花がきれいなので出張の途中下車

山久

出張と言う旅に出て羽根のぼす

美千子

出張もといば帰りの缶ビール

恭昌

愛のキュービッドが出張先に居た

洋

出張のたび毎方言ひとつ殖え

恒明

出張で飲む居酒屋も決めてある

弘直

ルール通りの男が少しじれたい

一風

妻先に死ぬなルール違反だぞ

長生

散るときルール思い出みな捨てる

シマ子

ルール出来た仲よしの輪がひろがって

紀乃

お年頃家のルールをよく乱す

朝子

森子 空氣のようなルールで寝息たてている
柳宏子 ルールには詳しく違反ばかりする

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

釣忍 一会の縁につなぐ虹

天国へいざなうようにかかる虹

少年の夢ははるかに虹を越え

屋上の月がわたしを放さない

屋上の木馬が好きま王子様

屋上からあなたの部屋の灯を探す

デパートの屋上からの別世界

屋上のクレーン星空見て休む

魂を濡らす言葉に飢えている

夜のブランコ亡母の記憶に濡れてくる

ころも二つ夜露に濡れて蛍となる

子育ての燕は濡れて餌を運ぶ

ずぶ濡れて戻った猫を追ひ回す

濡れている大仏殿も鹿の目も

二人でも濡れたくはない酸性雨

特別にして置きますと如才ない

特別の期待はしない鬼瓦

特別に叱れる部下がひとり居る

特別にされて寂しい隠居部屋

特別賞あげたい亡母の黒写真

何時からか特別な人になつてた

特別に心配はせぬ反抗期

曲曲けてまだ出るチューブ指の牙え

とつときの茶碗に僕の愚痴聞かす

屋上にぼつんと社長立っている

澄子

キク子

武庫坊

いゝ

よし津

香子

絹子

哲子

みつ子

たず子

暁風

トミエ

紫香

道胤

房子

てる

鹿太

佳秋

諷云児

江美

レイ子

求芽

春蘭

文

礫

好物のソフトクリーム母元氣
一病に今あじさいのまつ盛り
指切りをして子供らに明日がある
老いの波もぐって逃げた夏の夢
メダカが卵生んだと宇宙から電波
選ばれた金魚地球の外にいる

はびきの市民川柳会

榎本

吐来報

関白のまんまで粗大ゴミとなる

もつページ汚したくないエピローグ

雲行きが怪しくなると貝になり

船頭が多く羽田丸座礁する

吟行に数珠をバッグにしのばせる

川柳を聞かされている仏さま

頂戴と愛想の良い鹿が肥え

屋根反りに歴史を刻む新薬師寺

わたしの句も新薬師寺も修理中

混迷の政局よそに奈良の鹿

大和路の謎の巨石にあるロマン

親猫の光る目先で子猫ジャレ

呼び声は猫と亭主を使い分け

つまみ食い猫と目が合いわけてやり

野良猫に隙をつかれた市場籠

年金のころがわかる膝の猫

人間になりたくないと膝の猫

暗い話話つて聞かす苦勞人

病棟の暗さ今夜もみんな無事

暗い過去語らず羅漢まるくいる

暗闇を抜けて多彩な風に逢つ

みき

泰子

涼子

ひろ子

萬的

佐江子

かつみ

晋

志洋

利武

敦子

美代子

昭子

キミ子

淑子

一屯

六点

さとみ

夏秋

りつえ

昇

吐来

美津留

扶美代

絢人

見通しは思案投げ首する暗さ
不景気へしきりに攻めるクレジット
クレジット使え便と来るメール
クレジットで幸福の木を買いました
肩書がとれて靴が軽くなる
先生の靴を持って火の粉浴び
解散風吹いて靴が動き出す
桜さくスキップしてるランドセル
旅慣れた靴が覗く露天風呂

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

依怙地だと言うが他人の手は借りぬ

対岸の火の手さかなな方がいい

踏まれたら芝も依怙地になつてくる

切られた尻尾うごく依怙地が執念か

代表の名で詰め腹を切られる

依怙地だと分かつていても振り向かぬ

残り火は依怙地の胸の奥にある

童謡を歌うと月が丸くなる

代表と百鬼が踊る夜の巷

勝つてくるぞと歌う涙の戦友会

父の依怙地を通させておく嫁姑

ハンストは依怙地になった兄の抗議

のん気節朝から母は歌っている

試し斬り覚悟代表引き受ける

まなんのリズムが歌になる佳き日

ほんたうのことを言つたら首が飛び

依怙地だな四角な顔をしてござる

依怙地者自動ドアに手をかける

ひさ子

松盛

明女

柳風

二南

一壺

悦子

金太

末一

泰子

みつこ

たけし

敏

幸子

とみお

よしえ

玲子

節子

孝恵

和枝

螢

雄々

喜与志

早苗

善政

野草

柳風

明女

松盛

もう春だ小鳥の歌う声で覚め
代表の座へ特別のマンツーマン
御詠歌もカラオケ流に歌ってる
代表の頃の威厳が邪魔になる
君が代の歌が生きてる国技場
命まで賭けた女が鬼となる
謎めいた妻のお世辞に油断せぬ

サークル樺櫓

小林

一夫報

寿満湖
小生
一浪
妻
みほの
弘朗
喬水

嫌われはせぬか この頃逢いすぎる
怠けてると言うたらあかんリラックス
かく生きる定めとあれば鵜舟の鵜
こんな小さな水溜りにもある季節
別れ道迷う余裕が欲しくなる
またも来た母の手紙は終りなく
わたくしを笑う わたくしの両手

千代
正坊
喜美子
希久子
智恵子
雅子
薫

さりげなく別れてそれっきり夏に
怠け心 ポワンと夏の陽にさらす
考える像がなかなか光って来ぬ
やさしいと言われ本音しまい込む
つじつまが合うまでたぬき寝をしよう
モノクロの雨 父がいて母がいて
少女早や浴衣のほしい歳になり
怠け癖あれるそばに海苔がない

房子
みつ子
あずき
いわゑ
楓
たか子
智子
薫

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

赤い傘二人でさせる梅雨楽し
労多く儲けはないが日々元氣
まる儲け笑い止まらぬ長い眉

まさ
末貞一
修水

儲け話にすぐのりたがるお人好し
炎天下 儲け話が加熱する
儲かりまへん儲かりまへんで儲けてる
浜の夏 氷の旗が翻る
風はピンクときめいている夏帽子
ワンポイント嫁に伝える姑の味
ほどほどのジョークポイント外さない
ポイントのあとの一つは伏せておく
ほどほどに余生楽しく生きている
ほどほどに聞き流してお説教
ほどほどに惚れて終った恋ばかり
ほどほどの妥協で息を吹き返す
宵宮へパリパリ音のする浴衣
路上車が熱気とガスを撒きちらす

昌子
歌子
紫香
六浦
澄子
正治
弘治
十四郎
向西
勇次郎
夢之助
鹿太
いわお

川柳化粧櫓

植村客遊子報

片ペリの靴に本音をききただす
一寸したもつれにきしむ独楽の芯
言い勝って空しい風と居る孤独
陽が沈む明日の僕を照らすため
口づけて取り消す言葉見失う
四百四病の狭間くぐりて生きている
老いはれてなおブライドを放さない
雨の街泣いたピエロを見てしまふ
遅いわよ旧姓で呼び好きなんて
旧姓で呼び止められたホテル街
目立たない花も節目を知っている
退院に程遠ければ初夏を待つ
孫に揺れ一喜一憂しています

朱玉
サワ子
遊峰
里兆
奮水
葉香
礎石
悲子
大鷹
岳詩
白遊
春蘭
八起

新生の牡丹咲いたがすぐ散りそう
留守番をしたい日もある影法師
ふるりの丘の桜は健在か
どの蟻がつけた道だろ列が出来
輝入りの体支えて喜寿の春
我が歴史曲折あつて幅が出来
最近はずつおぼえて十忘れ

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

姫女
嘉
珊瑚
早苗
茂章
寿美
幸風

誰とでも話が合いますかすみ草
脇役を使命と思うかすみ草
ここだけはほかしておこすかすみ草
種まいた日から咲くのを待つており
言いたい口をつぐんだかすみ草
ほのめかす言葉の裏を期待する
ほのめかすつもりへ先方笑いこけ
奥の手がまだあるようにほのめかす
歯ごたえがあつてわたしは長寿です
お茶をくむ妻に歯ごたえ見えかくれ
歯ごたえがないようであるなまこ

好栄
ちよえ
恵美子
英子
はるみ
鈴江
かつ子
聖子
博利
清泉
白汀

川柳大阪

川端

一步報

ウグイスに笑われながらも登る坂
父の歳越せば聞こえる風の音
少年の夢へサッカークロケット
雨の日に部屋の中は万国旗
梅雨時の柳の枝は淋しげに
雨降ってテルテル坊主が出す涙
雨降って雷さまが笑つてる

比呂志
希久志
雅果
須賀夫
信男
青道
圭

誘いたんだけどあいつは雨男
憶測が勢いつけて歩きだす
サバ半身焼いて昼時威勢よい
悪政の勢い止める民の声
威勢よい声に魚が生き返る
勢いよく走る車は青春か
この勢い続いて欲しい最後まで
勢いがないとあっさり間引かれる
勢いのつた女に逆らわぬ
勢いが違うつもりも食べている
勢いのあるうち書こう僕の詩
あの態度みたらストレスたまります
温厚な人の態度は絵にもなる
太いコネあって態度がでかすぎる
態度から嘘を見つけて子を論し
コロコロと態度変えたらあきまへん
頂点を極める態度凛として
街灯が消えて二人の影ひとつ
此の街を貧乏神が出て行かぬ
汚されたまんまで街は病んでいる
黒い雨残して人生さらばです

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

柳 弘 柳 昌 司 雅 末 坊 太 元 鉄 心 与 呂 志 重 人 金 太 美 花 川 童 本 蔭 棒 河 南 子 ま っ お 洛 醉 し げ お 美 津 留 笑 風 一 步

万雷の拍手を浴びている孤独
ダイエット心の栄養欠けてくる
逆風の中ばかり行くへそまがり
へそまがり三面鏡で確かめる
人肌の酒も冷めてる夫婦仲
陽は燦々妻と影踏みして遊ぶ

隆 樹 一 花 甲 吉 花 峯 五 楽 庵 黙 人

栄養がどうのこののとまた太り
紙吹雪浴びてふたりの始発駅
愛憎の草臥れ癒す智恵子抄
点滴とならべてみたい宇宙食
夫には言えぬシャワーを浴びている
親に輪をかけた立派なへそまがり
独占の乳房へ縋るもみじの掌
まな板の音が栄養源でした
栄養価知らずに今日もまめでいる
雑草の日々どん欲に陽を浴びる

川柳やがわ

江口

別姓の名刺で勝負する女
肩書きを天眼鏡でみる名刺
百枚の名刺が減らぬ二度の職
心得て電話は入れてない名刺
洗濯機爆発させた花名刺
ゴルフしたらしい水増し出張費
人間の弱さ水増し試みる
水増しの評価さびしい客の足
元氣よく答えて仕事捗らす
いい答欲しくて森をかけぬける
妥協する答に揺れた落椿
根回しと違う答に狼狽える
木簡の墨のかすれにある答
ロケットに説教してる愚か者
世間から捨てられもせず愚夫愚妻
好きなのですたとえ愚かと言われても
ご先祖に愚かを託る赤い数珠

一 光 生 恵 子 祥 子 ツ ね ふ じ 子 雅 城 花 匠 正 徳 龍 人 し げ る 度 報 光 子 博 泉 敏 小 路 た も つ 亜 成 欣 史 子 冬 葉 波 留 吉 一 風 洋 庸 佑 速 水 か す み 文 秋 礫 三 千 子

人の愚を地球も笑っていられない
のびきったゴムは愚かな顔をする
医学書を読めば全身みな病
古里の風が洗ってくれた傷
愛社心育てておいて肩たたき
中流といわれ浮草あえいでる
寝たふりて肩を凝らせたサロンパス
捻じ釘の跡が残った痛みです
聖人の苦行マンガにしてしまふ
ツインビル一つに見えたるたこ焼屋
身に覚えありちぐはぐな答えする
肚よりもあって水増し知らん顔
水増しを半分こする官と財

川柳藤井寺

高田美代子報

盛装の女集まる梅雨の部屋
軒下にロマン待ってた俄雨
長雨に手を挙げている釜ヶ崎
一点差コールドゲーム雨に泣き
雨だれの音耳にして口説いてる
夕立を責めてはならぬ虹の橋
長靴を履きたい雨を待っている
さよならのチャンスだ雨が降り続く
住みなれた街につばめが帰らない
雨ざらしの野仏に聞く世の流れ
習うより慣れり律儀な母になり
馴れ馴れしくおじいさんとは呼ばないで
鼻唄は若葉マークのとれる頃
鍵穴は目かくししてもあけられる

度 英 壬 子 時 弘 ル イ 子 頂 留 子 黎 之 助 恵 子 あ や め 吉 之 助 良 知 紫 香 柳 宏 子 薰 風 登 子 三 夫 利 武 史 郎 宗 一 和 樹 悦 子 美 代 子 ト ミ 子 絹 子 与 呂 志 敬 一 敦 房 敦 子

和晶年正良よし文洞
重子子子美平子雄庵
秀春とし史静澄
夫蘭子風子子

登美子 頂留子 八重 久留美 あい子 達子 昭子 トヨ子 倫子 白峰 一子 恵子

吐田公一報

報一公

澄 静 史 と 春 秀
子 子 風 し 子 蘭 夫

政子 登美子 頂留子 八重

あい子 達子 昭子 トヨ子

惠一白倫
子枝峰子

太らせて太らせて豚売られゆく
吸い殻を押し込むように消す未練
散る明日を覚悟に燃える花の雨
年輪のブライド胸に艶ふきん
人間の本音疑う好奇心
人妻のしきりに匂う初夏の雨
タバコやめたら勲章をくれますか

翠洋会

渡部さと美報

流水がつづく隣の核の国
涼しさをはもの洗いに氷のせ
新民法太郎の妻は嫁じやない
花時計太郎の恋は風にのる
評判の太郎の杉でバス停る
仏だんに座る太郎の背は大人
学のある太郎は村へ帰らない
太郎も次郎も継がぬ田んぼに蛙なく
逃げる敵追いかけるワナにはめられる
男なら逃げたらあかんラブコール
傷手から逃げおせたい花を買う
逃げ足の早い男の口上手
余命表この運命を逃げ切れぬ
リュウキランチュウデメキンワキンエトラ
きんぎよや金魚絶えて久しい都市砂漠
ガラス越し金魚と話す熱帯夜
震度「三」津波がわかる金魚鉢
魂胆などもってはいない金魚の尾
金魚達雨の降らぬを知らぬまま
玄関のお世辞金魚をほめている

典子 金魚死に孫の悲しい夏終る
ただし 金魚すくいそはのじいちゃんやかまし
寿美子 夕やけこやけ並んで帰る兄いもと
満津子 川柳たけはら
佐津乃 森井
柳影 中学生最後の夏を駆けてみる
公一 試験の日雲一つない青空だ
父の日のビール美味いと言つて飲む
大灯籠に松が寄り添う雨上がり
花活けて明るくなった老いの部屋
封筒を開けると夢がこたえます
新緑の香りにむせぶ遍路杖
スイトピー夢は自由にごらんない
上昇気流深夜才女のベン炎える
寄せ書きの温さなんとも読み返す
足元の一円玉がばやいてる
野いばらの香に蘇るわらべ唄
みどりの風の中で私の誕生日
新曲を習えば前の曲忘れ
見渡せば緑の中にいる孤独
いたわりの佳しとはしない母の意気
一日はかくあるべきか夕焼ける
ゴルフよりルーツが深いカブト蟹
メンバーを抜いては一人風の中
遠き日の母に似て来た苦勞性
若葉一面シャワーを浴びて生き返す
入札へ悪知恵たんとつめてある
欠点も長所も知っている上司
五月晴れの天の恵みは平等に

真砂 志華子 宏子 東雲 蛙 ひろ子 楓楽 久峰 正坊 照子 光子 希久子 英一 宣司 佳秋 叔子 さと美 綾子 正雄

恭昌 絹子 みつ子 蘭幸 喜久恵 ヤスエ 千代美 現代 比呂子 静佳 栄恵 勲 厚子 麻代 美佐雄 蛸牛 淑子 笑子 白狐 一枝 喜美子 貞子 節夫 清水 汎美

智ノ花夢中で旗を振っている
湯米観音僕のもひとつ作りたや
平均寿命越えてる計報なら聞こう
愛された数だけ落ちてゆく鱗
雑念を持たぬ紫蘇の色が出る
戦から戻れば孫が待っている
川柳塔とつとり
武田 帆雀報
泳ぐのはへただが俺は海が好き
亡母が待つ向う岸まで泳ぎたい
逆らわず泳いで今日も無事にすみ
荒海をがむしやら泳ぐ父だった
雑兵が盟で泳ぐ波しぶき
賢人の人生訓はキラキラと
女の胸がキラキラ光るのは恋か
銀河系キラキラ尋ね人は死す
逢う人があるキラキラに歯を磨く
心ますしい女キラキラさせて来る
友情の苦言が肝に沁んで来る
友情の温もりを知る平手打ち
友情はあるが助ける金がない
幼稚園からの友情まだつづく
友情の裏にもあった落し穴
ぼろくそに言つて友情ありがたい
スポーツが国境線を取り除く
天覧の土俵男の汗が散る
スポーツが日の丸好きにしてしまふ
スポーツを観る夏帽子買いにゆく
カメラマンスポーツ並みによく走り

正宏 夏路 静風 臣子 菁居 孝原 侑里 粗粒 圭一郎 帆雀 崇 螢 日枝子 艶子 静生 享 山人 喬水 輪多朗 一枝 明美 黙光 銀嶺 俊路 孝男

スポーツの好きな家族で和がかった

倉吉川柳会

谷口

次男報

お喋りに金齒が覗く午後のお茶

和枝

金さへ出せば手に入るササニシキ

螢

金山の哀歌が佐渡の島にある

かつみ

金もなく欲もなくなり死ぬだけだ

碧水

年金の枠のため息ばかりする

山康子

金太郎船をしゃぶると愚痴がでる

とみお

金と暇出来てお医者をはシゴする

秋草

金塊を抱いて体温下げている

康子

金箔のトイレを作るバカもいる

独歩

ブランド品金額だけが気に入らぬ

よしえ

愛と金との比重に悩むかいわれ草

苦句

もう切れかけているフィルム

喜美子

切り西瓜近所に配るお嫁さん

日枝子

一徹の親父が縁を切るという

恵子

よく切れる男外出世せぬ

秀峰

母さんに会って涙のせきが切れ

秋女

好きなを切れては迷う花鋏

美由起

愛情がブツツしたと娘が戻り

柳風

不況には勝てず空手形切つちまい

次男

なめらかなステップ君に酔っている

澄子

なめらかな祝詞へ妻は胸をなで

よ志子

駅前のポストは愛の使者になる

瀧小

そろそろと妊婦が渡る駅前の信号

薫

駅前で女が待っているドラマ

年代

船頭の自慢ののどと川下り

紫香

これ以上言うたらあかん喉ぼとけ

紫香

二番煎じの駄洒落に動くのど仏

萬的

喉笛をめがけて一の矢がうなる

萬的

原爆を恨むドームのある限り

惠美子

人を恨み自分を棚に上げている

芳子

公平にしたつもりでも恨まれる

一閑

ストローでゆっくり呑み込む恨みごと

稲子

恨んでる訳は聞かなくても分かる

白漢子

恨んではいけない僕が播いた種

白漢子

吃水線越えた親切恨まれる

白漢子

恨む暇あれば連二無二駆けてみる

正坊

恨むのはよそう心が乾くだけ

あきら

恨まれているのが肌がしめりがち

あきら

宇宙へと尻尾ふくらす蛙の子

武庫坊

むずかしい話は止めて縄のれん

東雲

退院の準備へ試歩の万歩計

ただし

銀行員を手玉にとった紅い爪

きく子

銀行の残高知らずわれ平和

富子

不安です銀行株を持っている

博史

自由金利 預金なければ用もなく

登代子

銀行の隣に住んで用がない

庸佑

地銀合併 大蔵省が書くコント

武庫坊

心配の種 銀行へ預けたい

明光

生と死の岐路を銀行の匙加減

悟郎

ざわめきを抜けて一人になるチャンス

慶子

またとないチャンス ライバルにもチャンス

英子

好きと言うチャンスがあつた滝の音

福一

与野党の駆引きチャンス党大会

一笛

母さんがでんと座つて家安堵

吉太郎

父の日に嫁が届けて夏椿

圭坊

春風に誘われて買った軽い靴

つえ子

銀行の夜は屋台の店が出る

真柳

マグカップいずれ一人の旅となる

知香子

チャンスだと父の日そと彼会わす

薫

川柳塔原稿用紙

従来の「川柳塔用箋」(200円)と別に、200字詰原稿用紙・1000枚綴ができました。各地柳壇はじめ本社への投稿にご利用ください(1冊350円)

本社 八月句会

八月八日(月)午後五時半

メンズフアッションセンター

今日は立秋というのに記録的猛暑の中、九十一名の参加で八月句会は開会された。

句会の前に川柳文学社主幹の波部白洋氏から「堀口塊人句碑建立募金」協力のお礼が述べられ、現在の進展状況の報告があった。

今月の「おはなし」は例月と趣向を変え、堺文化会館書道講師の中村蹊虹先生が招かれた。先生の経験によると上達方法は、練習と継続に尽きるとか。「書をはじめるのに遅い年齢はない」との言葉に、食指を動かされた出席者も多かった様子である。先生はまだ若い女性で、はきはきした口調での「おはなし」は、夏の夜の一服の清涼剤となった。

初出席は松田壮之助氏。
月間賞は柴田英千子さん(寝屋川市)に輝く。

(司会―岳人) (受付―美房・智子)
(記名―ダン吉・みつ子) (清記―楓楽)

席題「危ない」 森中 恵美子 選

早天に危ないニュースばかりだ
親の目に危ないことが多過ぎる
お笑いがまじめに危険しやべり出す
月雲に隠れ危なくなる二人
もっ年や危ない橋は渡りなや
口止めはしたが危ないなと思っ
なけなしの金で危ない馬券買っ
若さかな危ないことが大好きだ
危ないドイツ語で書いてあるカルテ
危ない橋渡ったこともあるバツジ
人妻と言葉途切れた喫茶店
危ない人と隣り合わせたバスツアー
夏の夜はもう危なげもなく更ける
人間が危なくなってきた炎暑
ラストダンス危ない頃は過ぎ去った
一面目乗るなと亡母の声がする
危険球ときどき投げってくる男
家で死ぬ危ない橋は渡らない
女からの電話を妻がとりあげる
よその核だけ危ないと言っている
断崖であなたが好きと言われても
テールブルの隅で危ないことになり
落石注意 誰が守ってくれるのか
好奇心危ない場所へ行きたがる
若葉マークが送って行けると言っ
ゴキブリはいつも危ないところに住む
塀の上 猫もバランスをとっている

危ないと母がウインクしてくれる
踏絵ふむ少し危ない足どりで
世の中を見くびる本を読んでいる
危ない橋の途中で戻るのは男
絹の靴下 危ない過去もありました
危ないぞいちばん優しい顔
露の五郎へ危ない話期待する
葬式の帰りに危ない奴と飲む
錦ヶ浦のふたりの気配気にかかる
危ないと言っ男ほど面白い
危ない人 wait っているなと花時計
団体が危ない橋を渡ります
危ないと言われた父の帽子掛け
世界中 危ない火種がかえり
たとう紙へ危ない話たみ込み
青春の絵は危なくてまぶしくて
危なそうな名前がいつもてのひらに

兼題「蛙」 三宅 保州 選

一番星見つけた河鹿鳴いている
水不足 蛙は井戸を教えない
世渡りのとつても下手なやせ蛙
蛙の子でよかった青い空の下
似てはしいとこが似てない蛙の子
蛙の子やっぱり父を継ぐという
雨を待ち侘びる蛙もわたくし
雨乞いの蛙が唄う佐渡情話
取材合戦 蛙の面になり切って
カタコトの嫁と気の合う雨蛙

白 洋
庸 佑
たもつ
楓 楽
正 坊
一 風
射月芳
いわゑ
ゞ 女
吐 来
美 房
英 子
希久子
房 子
みつ子
柳 伸
天 笑
しげお
一 風
ダン吉
たず子
月 子
保 州
文 秋
正 坊
岳 人
親 路

かすみ
しま子
みつ子
一二三
萬 的
天 笑
柳 宏子
勝 晴
義 洋
昭 子
露 児
岳 人
義 子
寿 子
希久子
恵美子
正 子
美 子
文 子
良 知
庸 佑
天 笑
吸 江
昭 子
柳 伸

ホップステップ街の蛙は跳びすぎる
 ジャンプする意欲は持っている蛙
 ケロケロと野心響かす井の蛙
 睡蓮が開いて蛙向きをかせ
 蓮の葉の揺れて蛙の目も動く
 しばらくは眠んでもぐる蛙達
 蛙鳴き止んだら蟬が鳴き出した
 旱天に蛙の恋は山を越え
 早乙女の脚を久しく見ぬ蛙
 ライバルの顔色を読むやせ蛙
 それなりの幸せを持つ井の蛙
 冷戦が終り蛙も井戸を出る
 大海へ指輪外して跳ぶ蛙
 結局は轍をなぞる蛙の子
 蛙の唄聞きに帰れという便り
 ふるさとの駅で蛙に迎えられ
 冷房の効いた部屋から出ぬ蛙
 辛抱強く儲け話に乗る蛙
 がま蛙 今日も確かな座禪組み
 考える蛙も棲処荒らされる
 炎天の蛙 青空駐車場
 ときたまに見せる蛙の白い腹
 白雪姫を忘れかねるイボ蛙
 庭の蛙と暑い話をしていいます
 蛙合戦 一夫一婦をはねのける
 東京に出れば蛙も威張り出す
 減反に蛙言いたいことがある
 蛙

美代子 金太 親路 愛論 萬的 紫香 天笑 美房 楓楽 白洋 楓楽 射月芳 当代 公子 公子 一風 金太 豊太 弘直 憲太郎 森子 たもつ 恵美子 重人 美房 路児 茜

青蛙少し冒険してごらん
 追われれば飛び込む池を持つ蛙
 井の蛙ある日バートを考える
 大海を知った蛙のUターン
 人
 すぐに飛びつく蛙を飼うて草臥れる
 地
 沈黙を守る蛙もきつという
 天
 田が売れたことは蛙に話すまい
 軸
 そいういえば去年もここに居た蛙
 兼題「リゾート」 河内月子選

房子 希久子 三男 鹿太 英子 智子 しげお 保州 太茂津 さち子 文子 吸江 たず子 しげお いわゑ 正坊 正雄 度

リゾートでみじかい夏が破裂する
 リゾートもええけど海は埋めないで
 リゾートの陰で漁民は泣いていた
 リゾートに蓼参を兼ねる母の旅
 リゾートはふるさとの墓よけてゆき
 ひとつ覚えて夏はハワイト決めてある
 リゾートで大きな話はかりする
 リゾートと言う名で消されゆく緑
 リゾート開発までは桃源郷だった
 リゾートは里でトンボとたわむれる
 リゾートへ招かぬ客が押し寄せ
 リゾートはブラウン管の山や海
 リゾートの島に無粋な基地がある
 リゾートは星がきれいな過疎の村
 ビーチバラスルの下泳けない人魚たち
 男たちを上手にリゾートで使う
 リゾートは少し派手目のTシャツで
 佳
 リゾートの波に吞まれた過疎の村
 夏休み騒がしくなる過疎の浜
 リゾートの此処にもあった水不足
 リゾートホテル夏の真を妻と繰る
 空っぽの街でリゾートする事に
 人
 リゾートのここら辺りが先祖の田
 地
 リゾートに縁ない蟻の光る汗
 天
 クーラー全開わたくし流の軽井沢

公子 正坊 金太 絹子 一風 美代子 しげお 三男 ダン吉 シマ子 憲太郎 絹子 白洋 金太 森子 恵美子 路児 弘直 当代 勝美 正雄 天笑 昭子 勇太 朱夏

銘水の里でゆつくりして帰る

月子

兼題「にがい」

吐田公 一選

こぼさず吞み込む涙ほろ苦い

満津子

だんだんと苦い漢方効いてきた

稚代

約束の小指に残るにがい過去

緑良

恋多き女にがい過去がある

正子

栄転のライバル送るにがい酒

天弘

ブラトリックラブ恋のにがさをまだ知らず

緑良

嫁姑にが味を越えてきた甘さ

螢

にがいこと言うが味わい深い人

一閑

インコース妻が苦手を突いてくる

正雄

愛憎の深さににがいアメリカン

英壬子

宮仕え飲まねばならぬにがい酒

庸佑

ほろにがいビールを飲んで仲直り

射月芳

にがい水飲んで一人前になり

たもつ

深刻な話でお茶もにがくなる

かすみ

にがいこと言う男やが味方なり

美羽

良薬の苦味も知って娘は二十歳

天笑

百体の仏も苦い過去を持つ

吐来

ほんとうの苦さを知らぬ糖衣錠

壮之助

引導を渡してからのにがい酒

保州

裸一貫にがい思いの暮し向き

シマ子

愛ちゃんを太郎にとられた苦い青春

欣史子

ほろ苦い初恋でした夏の海

豊太

ほろ苦いお世辞が溜る耳の底

恭昌

千秀

英子

にがいから効くとは限らない薬
棒グラフにがい話になってくる
にがい汁吸うて大きくなる男

白漢子
天度

にがい汁のんでやさしくなったボク

白洋

あのにがい思い許さぬ夏の雲

当代

押しつけて椅子に座ったにがい過去

射月芳

後になりが意見と知る話術

当代

ボリーナスが半分減ってにがい酒

君子

にがい酒 男演歌の中で飲む

勝晴

同居してにがいお汁粉食べている

美房

寅さんの泪は多分にがいだろ

英子

にがい過去おんな女へ漏らさない

路児

祝い酒なのに父にはにがい酒

欣史子

にがい酒飲んで男になっていく

昭子

母の便 甘さにがさも詰めて来る

昭子

人 気まぐれな蜚でにがい水に来る

愛論

地 男がくれたにがい薬なら呑もつ

惠美子

天 せんぶりの苦さに亡母が生きている

弥生

軸 正論のはずが左遷の苦い酒

千秀

兼題「形見」 野村 太茂津選

公一

パイブルが形見となって散った兄

稚代

本棚に形見の時計だけが生き

哲夫

父の形見 母の形見の国なまり

家訓五ヶ条

父の形見の筆の痕

形見分け母の手紙が宝です

目をつける通夜に形見をささやかれ

桐箱に父の形見の銀煙管

母の形見持つと心の海が風ぐ

父の形見はずれ馬券と質の札

細いうなじ母の形見の緋の喪服

質屋のウインドーに親父のウォルサム

懐中時計ネジを巻いたら動く亡父

先立たれ一粒種という形見

形見など無くても八月十五日

しつけ糸ついた涙の形見分け

残留孤児 実母の形見手がかりに

柳弘

形見分け私が死ねば捨てられる

欣史子

青春の形見思い出胸に住む

洞庵

勤の良さ亡母が形見に置いてくれ

清史

孤児哀れ母の形見の櫛を持ち

めぐみ

形見分け父の野良着を先ずもらう

権悟

美しい地球が一番の形見

正子

足跡と笑顔が父の形見です

一閑

うまい酒 形見の手鉤振う腕

東雲

優しかった祖母の形見の花鉢

柳弘

形見の駒並べて亡父の手を偲ぶ

保州

愛された記憶が何よりの形見

三男

形見分けの法事の時ほみな揃う

一風

亡母からの指輪質屋も知っている

度

煙草供える父の形見のライターで

当代

哀しみも滲む形見の女紋

当代

目に見えぬ形見師匠の芸を継ぐ
今ここに亡母が居そうなる形見分け
愛弟子に形見にしたい古竹刀
割れそうなる下駄の音だけ形見分け
形見の色は脱ぎ捨てた生きたため
ネクタイは惚れた女の形見です

佳

寂しくて亡母の小紋を出してみる
啄木の歌を形見に恋終る
形見には父の指紋がつけてある
一言が愛の形見として胸に

形見などいらぬ生きてはしかった
形見分けおもしろい話聞かされる

人

人間としての形見を考える
靖国の父の形見は石ひとつ

天

金鶏勲章 悲しい形見だと思ふ

軸

兼題「太陽」

橋高薫風選

太陽だと言われた頃もありました
白日のもとでもそれが言えますか
太陽が沈むあなたと明日会う
今日もまたやさしい顔で出る太陽
白い帆と太陽似合うナポリ港
太陽と原爆ドーム相對す
死後の景にも太陽はきつとある

希久子

当代

二南

哲夫

森子

利武

いわゑ

朱夏

美房

みつ子

保州

月子

惠美子

隆

太茂津

三男

一閑

ダン吉

昭子

義子

萬的

みつ子

蓮の花昇る太陽は如來様
生きている実感今日も陽が昇る
生き甲斐をくれた真夏の太陽よ
賞罰ナシで生き太陽を直視する
太陽に愧じないパンが香ばしい
太陽の真向かいに乾す暮しむき
雑巾の一目と目を射す冬陽
ひまわりも太陽に伏す真夏日よ
太陽は稲と雑草差別せず
ひまわりにも成長記録する太陽
太陽はこぼれ種にも愛そそぐ
オホツク海一ぱいに夕日の赤
沈む太陽へ少年が吹くハーモニカ
原爆忘あの日と同じ陽が昇る
八月の絵日記 太陽にもシャワー
太陽にエールを送るひまわりよ
太陽よせめてゴッホの複製画
太陽が輝く神の火のおどり
太陽に父の代りをして貰う

佳

おい元氣だせと太陽東から
太陽の光のもとで政治せよ
太陽の遊びオーロラ螢気楼
夕陽背にあひるの尻が列になる
八月の陽よ生きたとは悔いばかり

人

太陽に我八十の肋骨
太陽と未来 月とは過去語る

地

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

太陽と未来 月とは過去語る

勝美

親路

花梢

二三

重人

智子

栗

房子

文時

度

一風

絹子

萬的

吸江

かすみ

いわゑ

白洋

狸村

しげお

射月芳

拔智

文秋

吸江

希久子

栗

楓

楽

楽

楽

楽

楽

楽

楽

楽

太陽と家と縄とびチューリップ

天

椰子の木は太陽によし月によし

軸

訂正 7月号掲載の6月本社句会・兼題

「苦しい」2句目「苦しみの日」に日に募る片

想い」の作者「稚代」↓「さち子」に訂正。

岸和田市民川柳大会

ときき 10月16日(日) 正午開場

ところ 岸和田市民会館地下会議室

兼題と選者(各題2句・午後2時締切)

ゆつくり 牛尾緑良 うなずく 河内月子

経験 河内天笑 遠慮 中田たつお

自信 阿萬萬的 喝采 橋高薫風

席題 当日1題発表 内田一弥

会費 1500円(参加賞・軽食共)

東大阪市民川柳大会

とき 10月16日(日) 正午開場

ところ 東大阪市立社会教育センター

兼題と選者(各題2句・午後1時締切)

揺れる 竹森雀倉 或る日 板尾岳人

素足 杉森節子 地球 久保田半蔵門

書く 波部白洋 タオル 大路美幸

駅 伊佐次無成(席題) 江口度

会費 1000円(記念品・発表誌)

会費 1000円(記念品・発表誌)

会費 1000円(記念品・発表誌)

会費 1000円(記念品・発表誌)

会費 1000円(記念品・発表誌)

会費 1000円(記念品・発表誌)

会費 1000円(記念品・発表誌)

会費 1000円(記念品・発表誌)

会費 1000円(記念品・発表誌)

柳界展望

宮園射月芳

ている 岩本美智子

双方で気にして開けぬ窓がある 松本 敏生

働き手 起こさぬように窓をあけ 森 茜

隣へは小さな橋をかけておく 山本希久子

お返事は橋を渡ってからします 椎江 清芳

★第12年度夜市川柳大会は7月31日、堺市総合福祉会館で開かれた。当日の各題秀句は次のとおり。

飲むとすぐ寝るからオモロない夫 大野佐代子

胃が痛むほど上役が元気です 中原 一揆

美しいたてがみとなり群れを出る 後藤 正子

ソマリアを見よ八月がまた巡る 内藤 摩耶

私が死ぬばすつきりする 鈴木 公弘

箬だ 忍者ハットリ君と跳ぶ 鈴木 公弘

敗戦忌いま人並みに生き

★第49回尼崎市文芸祭大会は9月4日午後1時から同市立中央公民館で開かれ、川柳・俳句・短歌の入賞発表が行われる。

★第30回川柳塔きやらばく忘年句会は12月4日(日)午前10時から米子国際ホテルで開くことに決定した。

▽同人消息△

■工藤甲吉氏(本社参与・青森市)両眼白内障手術の

ため入院、約一か月で退院の見込みと、波多野五楽庵氏から連絡がありました。

■浜本義美氏(同人・唐津市)脳梗塞による半身不随で入院中と、ちよ夫人からお知らせがありました。

▽出版版△

■川柳句集『花筏』(石倉美佐子著・いずも川柳会刊・B6判204頁)久家代仕男序文・浜村溪堂題字。

遠い娘へ心通わす花筏

■渡辺和尾川柳作品集『まみどりに』(みどり選書16に訂正します。

新同人紹介

古川 喜美子

——薫風・智子・恭昌推薦

島田 昭治

——甲吉・五楽庵推薦

A5判236頁・2000円) さくひん第一七章・ことば抄・うたともだちII

渡辺和尾の宇宙II 佐藤岳俊

▼計報▲

■安藤正純氏(本社参与・安藤寿美子さんの夫君) 8月10日、肝臓がんのため豊中病院で死去、70歳。同12日告別式が行われた。

▽訂正△

■8月号P78下段2行目「あじさいやベンに後さき

滲み出す」↓「ペンの…」に訂正します。

★もうせい川柳会の創立十周年記念川柳大会は7月18日、豊中市立中央公民館で百人が参加して開かれた。各題2句の秀句次のとおり

肩書きの消えたりリストにある温み 野島満寿巳

深い褥りで書き足す広島のリスト 河瀬 芳子

豊かさに馴れて忘れた塩の味 田中 道胤

趣味一つ抱いて豊かに母は老い 藤村 べ女

わたくしを妻が一番知っている 高須賀金太

世の裏を知りすかたんを押し通す 岩井 三窓

十年も私に知らんふりをする 中尾 藻介

幼子が十を数えて輝きぬ

9 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(木)午後1時から 波乱・仏(共に共選)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼崎 いくしま	2日(金)午後1時から 秋・見る・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 わかやま	4日(日)午後1時から 破る・矢・野暮	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	6日(火)午後零時半から 20周年記念川柳大会	西宮市民会館 本文P70参照 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
川柳塔 まつえ	10日(土)午後1時半から 仮面・渋い・半分	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
八尾市民 川柳会	10日(土)午後6時から 実る・善人・素足・新婚	八尾文化会館 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
ほたる 川柳 同好会	13日(火)午後1時から ドラマ・進む・上手(じょうず)	豊中市立螢池公民館 阪急螢池駅西へ150米 〒560 豊中市螢池中町3-10-28 井上直次
南大阪 川柳会	16日(金)午後6時から 意欲・規定・冗談・直接	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
川柳 ねやがわ	18日(日) 正午から 透明・グロッキー・薬・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時から 耳・学校・そろそろ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	22日(木) 正午から 運命・岸・送る・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島鳳云児
富柳会	22日(木)午後1時から 鉢合せ・ピアノ・端数・自由吟	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大井町4-1 池 森子
京都 塔の会	22日(木)午後1時から 軒・貼る・保証	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
東大阪市 川柳 同好会	24日(土)午後6時から 弁当・ライバル・泣く・門	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市川柳 民会	25日(日)午後1時から トンネル・こつこつ・告げ口・弱い	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
岸和田 川柳会	25日(日)午後1時半から 鈍い・塗り絵・寝言・乗気	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

編集後記

★集合の記念写真を撮る時
パチリとやった後、かならず「もう一枚」と一枚目を写す。私たちの場合でも、

プロのカメラマンも同じである。これは、大勢の中の誰かが動いたり、横を向いたりしているような失敗を防ぐためである。

★では一枚だけしか撮らなかつたとき、失敗する可能性を仮りに千分の一とした場合、二枚写して二枚とも失敗する確率はどのくらいだろうか。「二千分の一」

ノー。正答はなんと「百万分の一」である。航空機に必ず正・副二人のパイロットがいるのも、その応用である。『安全を設計する』

(近藤次郎著)の一節から引用した。

★写真を失敗するくらいはよく私のメモから。(正)

どうと言うことはないだろうが、航空機事故は跡をたないし、『絶対安全』な

はずの原子炉の事故も起こっている。「完璧」を追求する努力はたいせつだが、かるがるしく「絶対」ということは使えないのではなからうか。

★こんな話のついでのように校正の持ち出すのはどうかと思うが、およそ印刷物においてどうしても避けられないのは誤植である。以前、学力検査の仕事にタッチしたことがあるが八回校正したのにミスプリントが発見された。校正の話は次号に書きたい。

★トマトは、一八三〇年九月二十六日、アメリカはマサチューセッツ州のセラムという町で、ロバート・ジョンソン大佐が食べたのが最初だという。ほんとです

よー私のメモから。(正)

〇この半年ほど、朝食が時々喉に詰りそうになる。ご存知NHK連続ドラマ「び

あ」で変な大阪弁を聞かされるからである。

〇大阪弁を含めた関西の言葉は、他の地方の人にとつて、アクセントが大変難しいと聞く。そのために、明治政府が標準語を決めるとき、京都弁が候補に上った

が流れたという。ただし真偽のほどは不明。しかし、

あるこだわり

川柳をはじめて数年、「川柳」という古色蒼然たる呼称(名前)にこだわりがあります。川柳史には革新川柳、新興川柳、本格川柳、詩川柳、一行詩、短詩などの文字が目につきます。川柳界にも、古

ひとこと

川柳から脱皮して、川柳を文学に昇華させるための運動が、過去にはあったのです。けれどもそれらの願いは、大時

代な「川柳」の流れの中に、泡沫のように消えてゆきました。名前を変えるだけで中味が一新されるとは思いますが、「短歌」や「俳句」が改名した理由を考えてみて下さい。

ひとり「川柳」のみが、二百五十年の垢にまみれた名前で満足しているのは如何なものでありましようか。

その反対の性格の持主だそう。うだ。と言えはあの方がいい性格のようだが、そうはゆかない。両方の性格を裏返せば、前者は気骨がある・不屈・重厚などの長所となり、後者は軽々しい・意志薄弱・浮薄という短所となる。

〇もっともこれは極論すぎる。人間そんな単純なものやおまへん。ゆえに世に川柳の種は尽きまじ。(ふ)

加納 司

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（11月号）

地名

雅号

きりとらせん

◎ 8句を楷書で正確にお書きください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

川柳塔・水煙抄欄への投句について

① 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄への投句は誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限ります。

② 両欄ともこの投句用紙を使って8句を書き、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

③ 投句用紙はゆっくり引つ張るとはずれますから、ハサミまたはカッターナイフで「きりとらせん」のミシン目を切ってください。

◎送付先 〒545 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六

ウエムラ第二ビル二〇二号室

川 柳 塔 社

作品募集

川柳塔(8句) 西尾 紫葉選
水煙抄(8句) 黒川 紫葉選
銀河系(3句) 河内 天笑選
茴香の花(3句) 八木 千代選
課題吟「嘆息」 原 仁部選
(3句) 「いびつ」 小寺 四郎選
初歩教室「雲」(3句) 吉岡美房担当

11月号発表(9月15日締切)

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友(誌代半年分前納者)茴香の花欄は女性に限ります。

12月号 課題吟「鐘」「派手」「つかむ」
初歩教室「山」

本社9月句会

日 時 9月5日(月) 午後5時半
会 場 メンズファッションセンター3階
中央区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角
兼 題 「潔い」「ラフ」「黄昏」「てのひら」「会話」
投 会 席 兼 会 日
句 費 題 1 題 当日発表 各題2句以内
投句料400円(80円切手5枚)同封のこと

本社10月句会 2日(日)

兼題 「さばさば」「怠ける」「ダブル」「共通」「縞」

夜市川柳募集

第4回「てぶら」 岩内 外吉選
ハガキに3句 9月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

10月の常任理事会は10月1日(土)

NHK川柳作品募集

課 題 「きっと」 橘高 薫風選
ハガキに3句 9月10日締切
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発 表 9月24日(土) 午前11時5分から
ラジオ第1放送

西日本文字放送作品募集

課 題 「踊り」 橘高 薫風選
ハガキに3句 9月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

〒545

定価 六百元(送料84円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

平成六年九月一日発行

編集兼 西尾 紫葉

発行人 藤原 童心

印刷所 大阪府阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

電話 (06) 661-1691 四番

振替 〇〇九八〇一五三三六八番

川柳塔社

十七文字のドラマを本に……

あなただけの素敵な作品集を つくりませんか？

日頃書き綴って来たあなたの作品を本にしませんか。
出版樹々では低価格でご希望に沿った本を心をこめてつくります。
お気軽にお申し付けください。

自費出版のことなら

お問い合わせは…

(0726)77-5171

出版樹々

大阪府高槻市柱本3-12-3(〒569)

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

TJ 豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14

TEL (06) 330-0006代

FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21

TEL (06) 388-6166代

FAX (06) 388-6886